

成瀬記念館

開館 30 周年特集

2015

No.30

日本女子大学成瀬記念館



シリーズ“創る”(7)

関口裕子染色作品展

2015年1月15日～3月4日



「着物：オランダからの花開く」2013年

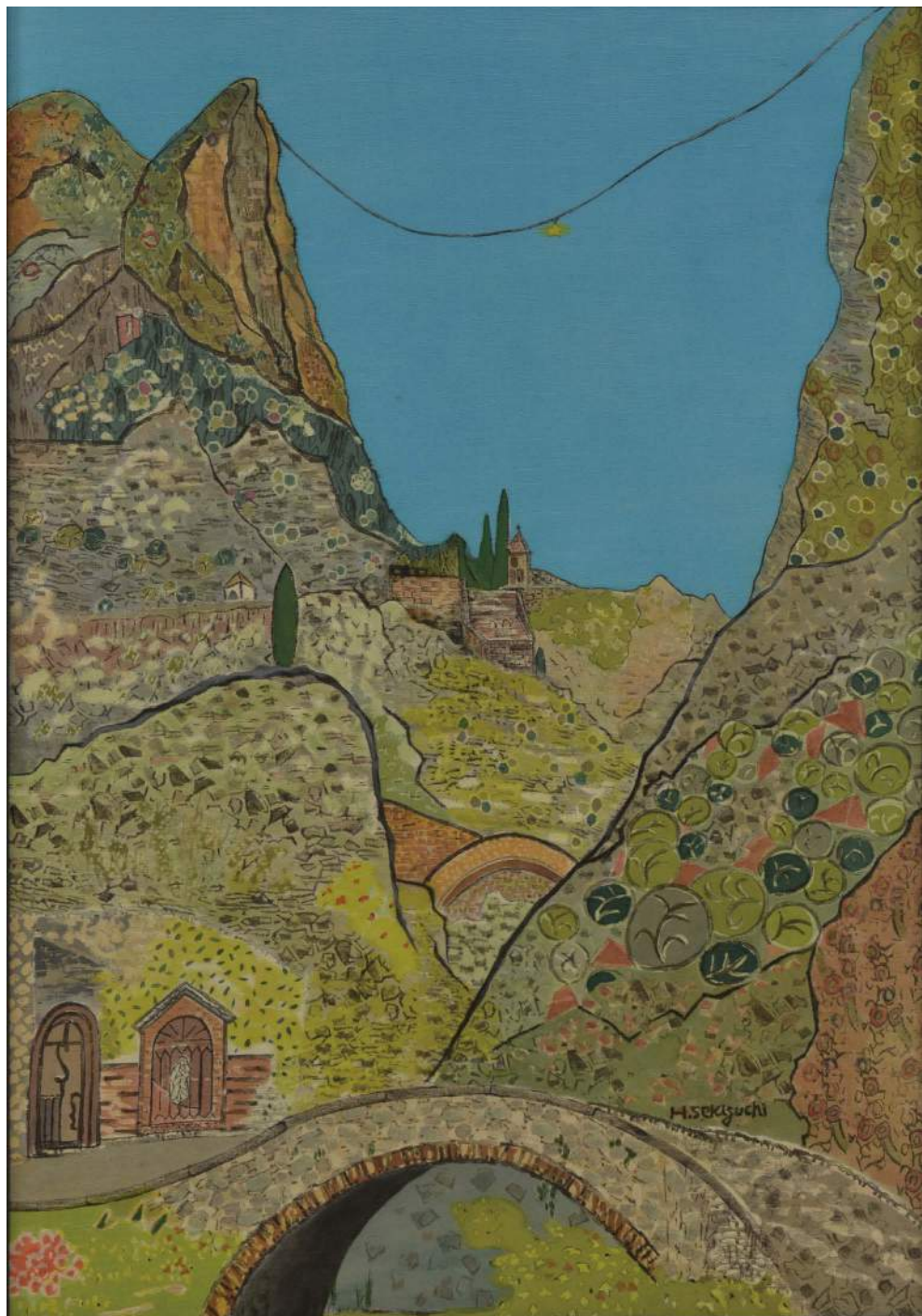
造形芸術の分野で活躍する卒業生を紹介するシリーズ“創る”。第7弾として、家政学部生活芸術科(住居専攻)卒業生(新制10回生)関口裕子氏の染色作品展を開催。いも版、ロウケツ染め、のり描きによる作品約40点を紹介した。展覧会終了後、関口氏より「ムステイエ・サント・マリ」(次頁)が寄贈された。いも版のみで染色された傑作である。



「正月の祈り」2014年



「帯：桜楓のサクラ・モミジ」2014年



関口裕子「ムスティエ・サント・マリ」2008年 いも版



成瀬記念館 2015

No.30

目次

表紙 / カット・武藤良子

口絵

シリーズ「創る」(7) 関口裕子染色作品展

関口裕子「ムステイエ・サント・マリ」

巻頭言

成瀬記念館三〇周年記念号に寄せて…………… 佐藤 和人 …… 4

随想

成瀬記念館分館の思い出…………… 守屋 良子 …… 6

「シリーズ「創る」(7) 関口裕子 染色作品展」を終えて…………… 関口 裕子 …… 8

新資料紹介

宮澤トシの「実践倫理」答案…………… 山根 知子 …… 11

日本女子大学と私

上代先生と日本女子大学合唱団…………… 大竹 洋子 …… 42

Bloom as a leader. 時代を切り拓く卒業生

桜楓会託児所保母主任 丸山千代…………… 山中 裕子 …… 47

未発表資料35

広岡浅子とその時代…………… 吉良 芳恵 …… 72

—日本女子大学校への夢…………… 明治三二年三月三十一日

成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡…………… 四月二日

未発表資料36

成瀬仁蔵講話…………… 111

1 大学部第二、三学年にて—明治四十四年七月五日— …… 102

2 第一学年生まとめの会—明治四十四年七月九日— …… 93

二〇一四年度業務日誌……………

展示の記録(成瀬記念館／西生田記念室)……………

成瀬記念館開館三〇周年特集…………… 114

成瀬記念館三〇周年記念号に寄せて

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

佐藤 和人

成瀬記念館は本学の創立者成瀬仁蔵の教学の理念と学園の歴史を明らかにし、広く女子教育の進展に寄与することを願って、創立八〇周年記念事業の一環として一九八四（昭和59）年に設立されました。本冊子の「成瀬記念館2015」は三〇周年記念号になります。

ところで、本学の創立発起人の一人である広岡浅子氏の生涯をモデルにしたドラマがNHKの朝の連続テレビ小説として本年秋から取り上げられることになりました。広岡浅子氏は京都の油小路三井家の出身で、一七歳で大阪の富豪加島屋の広岡信五郎と結婚。崩壊の危機に瀕した加島屋を救うため実業界入りし、炭鉱経営の他、加島銀行を設立、大同生命創業に参画するなど卓越した手腕を発揮しました。大和吉野の豪農土倉庄三郎の紹介で女子大学設立運動を展開中の成瀬仁蔵に初めて会い、その折に贈られた『女子教育』という本を九州の炭鉱滞在中に読み感銘を受け、以後、最も強力な支援者の一人となった人物です。広岡浅子の勧めで三井家は一門をあげて成瀬に協力し、目白台の土地や軽井沢三泉寮などを寄付したのです。そのような多くの人のつながりで本学が創立され、現在につながってきていることをあらためて認識するとともに、人との出会い、一冊の本との出会い、その力に驚かされます。

本学は昨年、自らの姿を示すタグラインとして“Bloom as a leader.”を発信しました。一九〇一（明治34）年の創立以来、本学は学術・社会・国際・地域・企業などで活躍する多数のリーダーを輩出し

てきました。「自己の可能性を開花させて、それぞれのステージでリーダーになる」「Bloom as a leader」は、学園に集う学生一人ひとりの高い志と、活躍する卒業生たちの軌跡を表しています。現在、本学は創立一二〇周年に向けて学園全体が一丸となって改革を推進しているところです。二〇二一年度までに生れ変わり、創立の地である目白キャンパスに四学部一五学科、大学院五研究科を統合し、人間生活・人文・社会・自然科学の四つの系統の総合力を生かした教育研究を展開します。新しくなる目白キャンパスのグラウンドデザインは、本学卒業生の世界的建築家・妹島和世氏が担い、「目白の森のキャンパス」のコンセプトで計画しています。そのコンセプトは、以下のとおりです。

- ① 目白キャンパスを緑に包まれた魅力ある学びの地とする
- ② 日本女子大学目白キャンパスの新たな顔をつくる
- ③ 既存の建物と新しい建物、過去と現在を融合させた未来に向かうキャンパス
- ④ 学生があふれるキャンパス空間の創出、キャンパスいっばいに広がるラーニングコモンズ
- ⑤ 地域とともにあるキャンパス

時期を同じくして、成瀬記念館分館の保存・移築の方針も決定しました。創立当時と比べ、時代背景や社会環境は大きく変わりましたが、成瀬仁蔵の掲げた女子教育への情熱と理念は、現代にそして未来へ生き続けています。

二〇一五年四月

成瀬記念館分館の思い出

守屋 良子

成瀬記念館分館がいよいよ解体移築されます。成瀬先生がお住まいになっていた時の状態を九〇年以上も保存され、いつの時代にも有効に使用され、全学の在校生をはじめ多くの人々に見学されて、それぞれに感銘を与えていることは、今あらためて大変貴重なことだと思います。

成瀬先生がお亡くなりになった、一九一九（大正8）年の八月に私は生まれました。母は、四七歳で戦死したのですが、附属高等女学校に在学中（一四回生）、陸軍軍人だった父親が地方に赴任中は、大学の寮

（富士寮）に入れていただいていたとききました。女学校卒業後間もなく結婚し、任地、大連（満州）また二年後には兼二浦（北朝鮮）へ移住し、娘三人を出産し育てました。親戚の一人もいない外地で、いつも成瀬先生のお言葉を胸に抱いていたことなのです。成瀬先生の御逝去を知ったのは、私の誕生数ヶ月前のことで、大きなショックを受け、決意を新たにしました。一九二六（大正15）年に東京に戻ると三人の娘は豊明幼稚園、小学校に入れていただき、男児を恵まれましたが病弱でした。「どんな子供も、男児も女兒も女性から生れる。はじめの四年間が大切で、その教育は母親の使命だ」とおっしゃったと何度も聞かされました。

成瀬先生がお住まいになっていた家の二階の寝室をはじめ拝見したのは八〇数年前のことです。当時の

豊明小学校は、一学年一学級でしたから、入学から卒業までクラスは同じでしたが、五年生になる時に担任の先生が代わることになっていました。そして六年生を手伝って、自治活動で下級生の指導をするという責任を負うのですが、その頃だった



解体移築が決まった成瀬記念館分館



2階の書斎

と思います。あの時の緊張感、恐怖に近い不安感を今でも思い出します。女学生の頃は、お茶の先生⁽¹⁾が住んでいられたということでした。大文学部や附属高女の生徒を対象として行われていた「兼修」の茶道や箏曲などで使われていました。また戦中

戦後には、戦火で家を失われた大学の先生が住んでいらつしやると聞きました。

想像もできなかったさまざまの経験を経て、その間も常に上代先生⁽²⁾のあたたかく力強いお力添えに感謝しながら数十年が経ちました。一七年間奉職した附属高等学校を定年退職して三年後、先輩のおすすめに従って婦人国際平和自由連盟(WILPF)日本支部の理事会に出席したのですが、昔と変わらぬ建仁寺垣を見て、門のくぐり戸に「若葉会」と並んでかけてある「婦人国際平和自由連盟(WILPF)日本支部」の表札に気付いた時には何とも言えない感動を覚えました。小学生の時はじめて見た「成瀬先生のおうち」の暗さの中から上代先生のお声が聞こえるような気がしました。

私たち三八回生は大学の第二次世界大戦開戦前の最後の学年だった

のですが、その頃の先生方は成瀬先生の教えを直接受けられていた方が多く、私たちに何とかして受け継がなければとのお気持ちだったのだと思います。生気だった学生の多くはかえって反発していました。上代先生は見抜いていらつしやつただと思います。決して押しつけることなく、成瀬先生の異文化理解、平和教育の実践を御自身でお教え下さいました。開戦直前の日本で、強い信念に基づく勇氣ある先生の行動は見事なものだったと思います。

WILPFの日本支部会長をつとめることになった一九九一年からの三年間は、私の時間と体力の殆んどを事務所費やしました。成瀬先生が二階にいらつしやるような気がした時もあります。質素ですが、しっかりとしたこの由緒ある建物を「無事に護らねば」という使命感もありました。理事・会員・事務員が一つ心

でした。休日には若い学生や留学生の集りも開きました。他所では得られぬ雰囲気がありました。四年間学生として親しく教えていただき、卒業後も御恩を受ける幸せを恵まれた一人として上代先生を、そして上代先生を通して成瀬先生を仰ぎながら働きました。

事務所の移転に際して、私は何一つ貢献できませんでしたが、この貴重な建物が再建された姿を見ることはできないかもしれません。分館が成瀬記念館と共に末永く母校の関係者のみならず、多くの人々に感銘を、指針を与えつづけることを固く信じています。

(一九四一年英文学部卒業)

もりや よしこ

(注)

(1) 高柳治 (家政学部三回生)

(2) 上代タノ (英文学部七回生・第六代学長)

成瀬記念館分館 (旧成瀬仁蔵住宅) は一九〇一 (明治34) 年の開校時に建設された三棟の教員用住宅のうちの一棟で、創立者成瀬仁蔵が一九一九 (大正8) 年に没するまで居住した。開校時の建築としては、現存する唯一の遺構。二〇〇七 (平成19) 年、文京区指定有形文化財に指定される。環状四号線 (不忍通り) 拡幅のため解体移築されることが決まった。

「シリーズ創る」(7)
関口裕子 染色作品展」
を終えて

関口 裕子

二〇一三 (平成25) 年一月初め、成瀬記念館から「関口さんの記念展を成瀬記念館で開催したい」とのお電話を受けました。卒業して五〇年を過ぎていた私への母校からのお話に、驚きながらもお受けすることに致しました。新しい作品も出品して下さいとのことで、二〇一四年元旦には京都に出かけて京のお正月をのぞき、後に三点仕上げました。

母校について思いかえしますと、一九五〇 (昭和25) 年四月、第二次



アトリエにて（撮影 松野誠）

世界大戦の終戦から五年が過ぎ、ようやく日本も落ち着いてきたころ、晴れて附属中学校に入学を許されました。今でも入学式風景は昨日のこのように思い出されます。壇上にいらつしやる大橋広学長先生の後ろにかかげられた三綱領「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」を口の中で何回もくりかえしたこと。中学生の私にもわかりやすく、受けとめることができました。

一九四四（昭和19）年四月から戦

争がきびしくなつて両親の郷里へ疎開しましたが、小学四年生の時に、焼野原になつた滝野川区の田端にもどりました。附属中学校に入学を許された時のうれしさは今でも忘れることが出来ません。成瀬仁蔵先生がその時から現在に至るまでまもつて下さっているように思えます。

附属中学校での図工は、戦争中の小学校でほとんど学んでいなかったことはかりでしたが、新しい感性を引き出していました。図工の授業でピンクに染めた額縁

は、多分、私の全身の喜びにみちた表現だつたと思います。附属高校時代の修学旅行は京都、奈良でしたが、大学レベルと感じられるほど有意義な見学をさせていただきました。のちに結婚して一時期大阪に住み、関西のあちこちを散策した

時、つくづく、長い学生時代を過したなつかしさとともに母校の先生方に感謝したものです。卒業論文は「居間の色彩」というテーマで、数値で面積を出しコーディネートを考えることでした。卒業論文に続いて東京大学建築学科小木曾定彰研究室で御指導いただきました。そのころの一番の印象は岡山県玉島の石油コンビナートの色彩をきめることでした。

二人の娘の子育てのほかに、住居専攻で学んだことの中で一生描き続けていけるものは何か考えている時に「絵更紗」に出合いました。小さいお人形を茶色一色で染められた地味なその作品に心をうばわれ、夫が東京に転勤になった時に、竹田十路先生に許され入門致しました。私が三十歳のころでした。「絵更紗」は、京都在住の画家元井みどり氏が正統時代に発案された手法です。その後に関西はじめ関東にも多くの弟子が

増えて本にもなりテレビでも放映されるほどでした。

竹田十路先生は、私を若い一人の弟子として様子をみていらつしやつた様に思えます。新聞紙に筆で大きい「円」を描いているように言われました。いつまでも前に進まないきびしさに、私は布を買って、自分一人で文様を考え小学一年生の娘のワンピースを作りました。いも版を墨でペタペタと押し先生にお持ちし



太平洋美術展にて（2014年5月）

ましたら、ようやく、いも版を教えて下さるようになりました。若さということでしょいか。このことを思い出すたびに赤面しております。絵更紗の中の「のり染め」は、いも版の様に単純ではなく、ロウで染める技法よりやわらかく表現出来、奥の深い更紗独特の味が一番出しやすいと思います。後になって多くの技法で作品を作りたいと思うようになり、友禪の職人さんのところに弟子入りしました。どんどんと社会に出ていくことをすすめて下さり、絵更紗技法も使ってもいいとお考えです。で、私は、その後、自由な構想で思う存分染めるようになりました。

その後、太平洋美術会公募展に入選出来ましたが、それから十八年になりました。染色は友禪、ロウケツ染めが主流の中、いも版、のり染めの私は一人我が道を進むだけなのか不安に思った折に、母校で小笠原小枝先生の

「染色文化史」の講座を聴講させていただき不安も消え、晴れて染めを進める方向へ導いていただけました。今から十年ほど前のことです。その後も小笠原先生が遠くから見まもつていて下さり本当に感謝の気持ちでいっぱいです。成瀬記念館での一月一日から三月四日までの日程も無事に終わりました。記念館へおみ足をはこんで下さった日本女子大学の先生方、太平洋美術会、新聞、区報の方々、そして何度も訪れて感動したからとさらに友人をお連れ下さり涙の出る思いを致しました。

今後、成瀬先生の教えをいつそう深め、このような光栄な機会を賜りましたお導きを心の糧として参りたいと存じます。

（一九六〇年家政学部

生活芸術科（住居）卒業

せきぐち ひろこ

新資料紹介

宮澤トシの「実践倫理」答案

——成瀬校長の導きとトシの心の軌跡——

山根 知子

はじめに

二〇一三年秋に、日本女子大学内の古い倉庫から「実践倫理」関係の答案を中心とする資料が大量に発見された。そのなかには、平塚らいてうの「実践倫理」の答案とともに、宮澤賢治の妹トシ（家政学部第一六回生）の「実践倫理」答案が含まれた貴重な資料があることが成瀬記念館によって確認された。そのうち、平塚らいてうの資料については、すでに『成瀬記念館 2014 No.

29』にて、中寫邦氏によって研究・紹介されている。

今回は、それに続き、宮澤トシの「実践倫理」答案二点の新資料を紹介するとともに、さらに以前から存在はわかっていたが未公表であったトシ自筆のカード六点を合わせ、計八点を全文翻刻の形で初公表し、後段に掲載する。これら八点は、記述内容から判断して以下の年度および順序にて書かれたものといえることから、宮澤トシの日本女子大学校における心の軌跡を、成瀬仁蔵の導きとの関係で確認していきたい。

新資料 宮澤トシ 「実践倫理」 答案 計八点

(すべて初公表であり、今回の新発見資料は〈資料3〉と〈資料8〉である。)

【大正四年度】家政学部予科

〈資料1〉「自己調書」(カード)

〈資料2〉「態度・独立」(カード)

【大正五年度】家政学部本科一年

〈資料3〉「大学生活に入る決心」

〈資料4〉「瞑想ノ目的、及経験ノ夏季間ノ修養、

研究ニツイテノ計画。」(カード)

〈資料5〉「夏期休暇中ノ経験」(カード)

〈資料6〉「第二学期ノ決心及希望」(カード)

〈資料7〉「自己調書」(カード)

【大正七年度】家政学部四年

〈資料8〉「『女子教育改善意見』を読んで」

筆者は、二〇〇三年九月に発行した拙著『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』(朝文社)にて、トシの日本女子大 学校における実生活および思想について、『実践倫理講 話筆記』(日本女子大成瀨記念館)等の資料をもとに 実証的な事実確認を基礎にトシと兄賢治との関係解明に 関する研究を行った。それによってトシが在学中に影響 を受けた成瀨仁蔵校長の思想が、トシにいかん浸透し、 またトシを通して賢治にいかん伝わっていたかを確認す ることができた。その後、日本女子大卒業証書の発 見による拙論「宮澤トシの卒業証書」(『成瀨記念館 2011 No.26』)では、成瀨校長とともに当時の教員 からの影響関係も認めることができた。これらを基盤と し、本稿では、今回の新発見資料を読み解きながら、近 年の新発見である近角常観宛宮澤トシ書簡二点(岩田文 昭『近代仏教と青年』二〇一四年八月 岩波書店)の内 容を加味して、トシの日本女子大在籍中の心の軌跡 に迫ってみたい。なお、トシ書簡および文章の引用は、 堀尾青史によって一九七〇年七月に発表された『ユリイ カ』第二巻第八号により、トシの「自省録」の引用は前 掲の拙著による。

宮澤トシは、花巻の裕福な商家である宮澤家に生まれ、 高等女学校まで常に学年のトップに位置する優等生とし

て育ったが、トシ自身が「自省録」で記したように、高等女学校の最終学年の年に、男性教師に対する思慕とその発覚から、学内の教師、友人をはじめとする人間関係に大きな溝が生じ、地元の新聞でそれが「真偽とりまぜた記事」になるなど、「故郷を追はれ」る思いで上京したという経緯があった。そうした心の傷を抱えるなかで進学した日本女子大学校での成瀬仁蔵校長の導きは、トシが新たな生へと進むためにいかに深い意味をもたらしたか、今回の「実践倫理」答案の内容を繙くことで、トシの心の軌跡を辿ってみたい。

大正四年度 家政学部予科

トシは、大正四年四月に日本女子大学校家政学部予科に進学し、責善寮に入寮する。この四月において、初めて成瀬仁蔵校長の授業「実践倫理」の講話を聴き始めた。『実践倫理講話筆記』によると、一二日に行われた「大工学部第一学年及び予科」を対象とする「実践倫理」の授業で、成瀬はノートの取り方を説明するなかで「ソノ最モ進ンダ方法ハ Card system デアリマス。此ノカードニハ十三通りガアリマスガ、一番安イノハ Name ト書イテアルノデ十枚四銭デアリマス。ソレカラ之レニハ英語ヲ

使ッテアリマスガ、之レハアナタ方ノ日常生活ノ間ニ自然ニ英語ヲ覚エサセルタメデアリマス」と述べて、カードの使用を勧めている（翻刻の英文表記参照）。実際に、今回のトシのカード資料では、そのうちの三種類が使用されている。そのなかの一つ目は、この授業のあとに書いたと思われる（資料1）のカードである。

〈資料1〉「自己調査」（カード）

このカードには、英文表記の印刷による名前、学部、生年月日、両親の氏名、親の職業、家族関係を書く欄から始まり、トシの記入がなされている。これに続く欄に「Character」を書く欄があり、トシは「意志薄弱、陰鬱、消極的、其他大抵ノ短所ヲ具有ス、正直」と書いている。ここには、高等女学校の卒業式から恐らく一ヶ月ほどしか日が経っていないなかで、トシの心の傷からくる精神的な状況が示されていると推し測ることができる。

続く裏面の「Belief and Conviction」の欄には、「既定宗教ニハ未ダ入信セズ」とある。この記述からは、宮澤家が浄土真宗の信仰をもつ家であり、父政次郎が花巻の夏季仏教講習会を中心となって進めるなど、熱心な信仰活動を行っており、トシも幼い頃から参加していたわけ

であるが、家の宗教をただちに自分自身の宗教であると認識してはいいことがわかる。さらに、トシは、苦しみはなかであって、自分の信じる宗教への道を求めていることが確かであり、その方向は「神或ハ仏トモ名付クベキ絶対者」として絶対者の存在を確実に信じる信念に基盤を置きながら、「何時カハ宗教ノ門ニ至ラン事ヲ期ス」という望みをもっていることがわかる。

また「Mission」欄には、入学の「動機」を「我が人格未ダ少シモ向上ノ道ニ進ミ居ラザル事ヲ覚リテ、ソノ欲求ヲ充タサン為、本校ニ入学ヲ希望セリ」と書き、「決心」として「真ノ人間トナリ、真ノ女トナリ、此ノ世ニ生レ出デシ吾ヲシテ最モ意義アル生活ヲナサシメント欲ス。而シテ本校ニ於テ、ソノ基礎ヲ造ラント期ス」と、「本校」への期待が示されている。また、この世の生への思いは、のちの大正七年一月二七日付の母イチ宛書簡にも書かれた「生まれた甲斐の一番あるやうにもとめて行きたい」というトシの言葉と通じていく。

この時期における他の資料として、前述した近角常観宛のトシ書簡二通のうち、四月には次のような書簡の言葉がある。なお、近角常観は、東京本郷を本拠地として説教と対話により若者に影響を与えた浄土真宗僧侶であ

る。トシの父政次郎は、トシの上京に際して常観にトシの指導を依頼する書簡を書いており、トシも常観の教えに近づく期待を寄せている。

私は今年十八才の至つて我儘なる者に御座候。我儘なる私を我れから持て余し居り候。はる／＼この地まで遊学いたし乍ら、将来に対する希望を持ち得ず従つて活気なく元気なく誠に意義なき生活を致し居り候。倦怠に悩まされ候て我乍ら望ましからぬ生活状態に在り候へど、これを脱する程の勇氣も起し得ざる実に情なき私に御座候。何とかして早くこの状態を脱し、積極的なる充実せる生活をなし度きものは、今この疲れし心に残る只一つの望み願ひに御座候。(四月二三日)

ここには、(資料1)の「自己調書」(カード)の内容に通じ合う心境が示されているといえる。

もう一通は、トシが常観を何度か訪問したあとの五月の書簡である。

当校の主義は自動自発、研究的、人格の向上、修養、目的ある生活、など、云ふ言葉を厭になりませ程聞かされます。当校の先生方を見ますと、「犠牲の精神」とか「愛」とか云ふものに生きて、死の問題をも解決されてる様に見える先生もあるように見受けられ

ます。一層の事この学校を批判的に見ず、自分もその中に同化してしまはふか、など、も思ひました。然し、同化する迄の努力がいやなので御座いますから、何とも仕様のない次第で御座います。(五月二九日)

このようにトシは、成瀬をはじめとする教師の教育方針や生きる姿勢について理解しながらも、自分のなかの問題を強く感じ、煩悶していることがわかる。そうしたなかでトシは、この長文の書簡の最後には、「向上とか何とかおっしゃる先生に依つて、当つて見ようかとも思ひます」と述べ、成瀬の導きに依じてみようとする心境を示している。

以上のように、トシは予科への進学当初、不安定で自己否定的な精神状態をもちながらも、〈資料1〉のカードに書いたように、いずれは「宗教ノ門ニ至ラン事」を望みながら、人格の向上をめざし、「本校ニ於テ、ソノ基礎ヲ造ラント期ス」と成瀬の導きに依拠ることを自分の道としてゆく思いを芽生えさせていくのである。

次の〈資料2〉が書かれた時期は、成瀬校長の『実践倫理講話筆記』によって推測を及ぼすと、予科の一年のうちの終盤ではないかと考えられる。

〈資料2〉「態度・独立」(カード)

〈資料2〉の執筆時期は、『実践倫理講話筆記』の「大正五年二月七日」のちであると推測される。この成瀬の講話内容は「独立」のため「自発ノ力」による「態度」を求める話題であり、エマーソンの「自恃論」にも触れながら展開されていることや、さらにカードの使用をめぐって「先年CUREノ方法ヲ始メテ見マシタガ、之レモ私ガ指導シナケレバピツタリト止マルケレ共、面会ヲシテ見ルト極少人数ノ人ハ今デモチャント実行シテ居ラル、ノデアリマス」という発言があつてカードの使用が促されていることから、トシが〈資料2〉のカードを書いたこととの関連が深いと考えられるのである。

特に「独立」について、トシは次のように記述している。

個人ガ団体又ハ他ノ大キナモノニ同化シ一体ニ成ツタ時ハ、私ノ生命ハ拡張サレ、發展サレ、大キクナツタ時デアル。コレガ個人主義ヤ孤立ト全ク反対ニ積極的ナ所デアル。独立トハ他ノモノトノ間ニ垣ヲ作リ、溝ヲ作ルノデハナクテ、他ヲ容シ、他ト一体ニアル事ガ我ガ生命ヲ延シ、真ニ独立スル事デアル。

このような個人の生命の拡張についての考え方は、成

瀬校長の「小さい自我と、大なる自我との間の障壁を破つて、段々に広くなり大きい我を作つて行く事が、内面から言へば自我実現と云ふ事である」(「我と云ふもの、研究」明治四二年一月『成瀬仁蔵著作集』第二卷所収)という考え方の影響を受けており、賢治の「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」(「農民芸術概論綱要」という思想にも通じる重要な要素であろう。

なお、少し遡る大正四年一〇月二一日付トシ宛賢治書簡の「色々利己的ダノト自分デ辯解シテ居ラレル様デスガソナナ気兼ネハアリマセンデ好イデセウ」という言葉から、トシが自分の「利己的」である面を兄に述べたことがわかり、一年後の(資料7)でもトシは「利己主義」が「改メラレツ、アリ」と書いていることから、成瀬の「小さい自我」を超えた真の自我実現の教えが、トシの意識改革への実践を大きく促したといえよう。

以上より、この予科一年の一年間は、トシにとって予科入学当初の大きな波立ちが次第におさまってゆく時期だとわからう。この年度終わりの三月には、トシは、母校の「花巻高等女学校校友会誌」第二号に「武蔵野より」と題した文章(「ユリイカ」同)を寄稿し、学科や寮舎の生活を報告するとともに母校への恩恵の思いを表現す

るまでの落ちつきを見せている。

大正五年度 家政学部本科一年

トシが本科に進学する大正五年度の始まりとして、四月一〇日に入学式があり、そこで成瀬校長は次のように、初めての宣誓式を行うことについて述べている。

今日ノ入学式ハ宣誓式トシタイ。先生ノ前デノミナラズ天ニ誓ツテ覚悟ヲ定メ、門ニ入ルト云フコトヲ希望スル確心ハ何デアルカ。銘々ノ決心ヲカキ、下ニ姓名ヲ記シテ生涯ニハ成就スルト云フコトニ致シタイト思フ。ノ二分間瞑想シ、父兄、保証人、先生方ノ前デ順次ニ此所ニ出デ書キ入レルコトニイタシタイト思ヒマス。

『実践倫理講話筆記』

この時、トシが宣誓文として「真実ノ為ノ勇進 宮澤トシ」と書いた筆跡が残されていることについては、すでに青木生子氏が一九八七年一〇月に写真入りで公開している(「女子大通信」No.四六八号『近代史を拓いた女性たち』所収)。この「真実」への思いは、次の(資料3)で「大学生活に入る決心」を述べた文章のなかに示されていったといえよう。

〔資料3〕「大学生活に入る決心」

この答案が、成瀬校長のどの授業での課題に応じたものかについて、『実践倫理講話筆記』をみていくと、「五月一日」に述べられた次の課題ではないかと思われる。

何シテモ欲シイト思フ最モ大切ナ宝ハ何デアラウ。
又ソレヲ如何ニ選択シテ得ヤウカ。コノ問題ハ生活ニ適切ナ問題デアツテ、コレカラ一週中間ノ問題トシテ与ヘルニヨツテ答ヲ記シ置キナサルコト、シヤウ。

さらに一週間後の「五月八日」の講話で、成瀬校長は、この課題内容を再度次のようにまとめている。

a, アナタ方ハ此三年間ノ大学生活ニ於テ何ヲ選択スルカ。

b, 如何ニシテソレヲ獲得スルカ

これに対して提出されたトシの答案〔資料3〕では、次のように記されるのである。

「如何に生きるか」この問題程、大切なものは私には無いのである。如何にもしてこれに満足な解決を与へなければならぬ。今後三年間の大学生活を空費するも有効にするも私の決心次第である。多くの同胞の望みて得られないこの生活を、我が最善を尽し

て生活し進み得られる限りどこまでも進めて行かうと云ふのが私の決心である。

先の宣誓文の「真実」として探究される対象として、トシは「如何に生きるか」という最も大切な問題を設定し、そのための「勇進」をなす覚悟へとつなげていくのである。

また、この「如何に生きるか」という問題探究の真剣さは、この年病床にあつた祖父喜助への書簡のなかで次のように発露する。

それら（＝衣食住の満足・筆者注）は只この短き間のからだを養ひ喜ばせるまでにて、死後の大事に比べてはあつてもなくてもよき物と思ひ候。それよりもその人の気には入らずともほんとに大切な死後の事に御氣付きいたゞきまことの親様に救はれる様にあれこれ申し上ぐる方がよほど深切なる仕方と存じ候。私も大切な死後の事一刻も早く心にきめる様にと思ひ居り候へど未だ確かな信心もなく、このまゝに死ぬ時は地獄にしか行けず候。（六月二三日 傍線筆者、以下同）

すなわち、「如何に生きるか」という生への問題意識は、死後の問題とのつながりのなかで、「未だ確かな信心もなく」と述べるトシにとつては、生死の問題を解決する

ための自分なりの信仰に対する渴望が募っていったものと思われる。

〔資料4〕「瞑想ノ目的、及経験ノ夏季間ノ修養、研究ニツイテノ計画。」(カード)

予科入学時からトシが寮生活で黙祷の習慣をもつていたことは、先の「武蔵野より」で「寮舎の一日の中では朝と夜とに黙祷とか考へる時間が与へられています」という記述からわかり、さらにこの年、「瞑想」について目を開かされたことがわかる。それは成瀬が、七月二日にインドの詩人タゴールを学内に迎えるに先だつて、タゴールの信仰姿勢と思想内容の紹介に努めるなかで、『実践倫理講話筆記』の六月二八日に、タゴールの瞑想に対する姿勢を踏まえて「宇宙ノ無限ナル大生命ノ音楽ヲキクト言ツテモヨシ、無限ノ震動ヲ受ケルト言ツテモ宜シイ。夫レデ尤モ深い潜在意識ニ入ル」という深い体験が「瞑想」であると伝えた認識による。こうした瞑想に対する心の準備を経てタゴールの講堂での姿に接したトシにとって、瞑想は深い意味をもたらす体験となつたと思われる。

そのうえで、トシの書いた〔資料4〕「瞑想ノ目的、

及経験ノ夏季間ノ修養、研究ニツイテノ計画。」の内容は、タゴールの講演直後の七月五日において出された次の課題の答案であることは間違いない。

次ノ問題

- 1、瞑想ノ目的及ビ経験
- 2、夏期間ノ修養及ビ研究ニ就キテノ計画ト決心

『実践倫理講話筆記』

これに対して、トシはこの年度当初に〔資料3〕で抱いた「如何に生きるか」という問題解決への目標を〔資料4〕でも再度「私ノ誠ノ願ヒハ、何故ニ生キ、如何ニ生クルカ、ノ問題ニ対シテ常ニ明快ナ答ヘヲナシ得ル日常生活デアリ度イ、即チ根本ニ生キ度イ、ト云フコトデアル」と確認して瞑想をしようとし、また「真ノ瞑想ノ目的ニ叶ツタ瞑想ヲシタ事ガアルカ」と自分の経験の貧弱さを自省したうえで、瞑想とは「絶対者」の「光」を経験することとしてその体験を求めていることが次のように書かれる。

私ハ今更ニ自己ニ対シテ不忠実不信実ナリシ私ヲ責メラレルノデアル。我ガ凡テヲ投ゲ出シテ打ち俯スベキ絶対者ノ前ニ、語り、ソノ光リニ照サレル事ガ瞑想デアルト私ハ考ヘル。ソノ様ナ経験ヲ曾テシタ事ノナイト云フ事ガ無上ノ悲シミデアル。サレバ私

ハ、形ハ冥想デアッテモ真ノ私ノ望ム冥想マデハ行ツテ居ナカッタ。今私ハ何故コレガ出来ナカッタカ、ソノ原因ヲ探リツ、アル。集中シナカッタ事、雑多ノ枝葉ノ事ニ余リニ囚ハル、事モソノ原因ノ一デアルガ最モ大キナモノハ、私ノ絶対者ニ対シテ未ダ殆ド研究シテ居ナイ、知ツテ居ナイト云フ事ニ帰スルト思フ。

ここで絶対者について、「絶対者ノ前ニ、語り、ソノ光リニ照サレル事ガ冥想デアルト私ハ考ヘル」との見解を打ち立て、冥想を通しての体験をイメージしていることがわかる。

また、「2. 夏季間ノ修養及ビ研究ニツイテノ計画ト決心」では、その冥想によって「絶対者ヲ知り、此ノ今ノ小ナル私自身ヲ包容スルトコロノ根本ノ力、絶対者ニ是非触レタイ。包容サレ度イ。ソレニヨツテ凡テノ日常生活ヲ営ム事ノ出来ルカラ得、ソレニヨツテ生カサレ、大キクサレルソノ経験ヲ是非味ハナケレバナラヌ」と決意している。

こうして、七月一〇日に終業式を迎え、トシは最上級生が八月の一週間、タゴールとともに軽井沢三泉寮で瞑想の時を過ごしていることを意識しながら、花巻に帰省し、次の〈資料5〉に書かれるような夏を過ごした。

〈資料5〉「夏期休暇中ノ経験」(カード)

この夏の休暇が終わって、その体験を振り返って書いた〈資料5〉では、トシは、自分の意志の弱さによって、自らの内心の実体あるいは本体とも呼ぶ絶対者に触れる機会を得ず、煩悶する自分を「病者デアッタ」として、次のように述べる。

私ハマダマダ内省ガ出来テ居ナカッタ。内心深く自己ノ実体ノ声ヲ聴キ、自発ノ叫ビヲ聴ク事ニヨリテ病ヨリ救ハル、ト信ジタ。

そう信じながらも実体験としての手応えが得られなかつたなかで、辛うじて「休暇ノ終リニ近イ頃」、次のような兄賢治による「暗示」があつたことは注目に値する。

今一ツハ或一日偶ナクモ敬愛スル兄ヨリ或暗示ヲ得タ。ソノ形ハ定カデハナカッタケレド僅カニ光明ヲ認メテ帰校シタ。

この夏の休暇において、賢治とトシが花巻の実家でもに過ごした期間は極めて少ないと考えられる。つまり、トシが帰省していた七月から九月までの間では、賢治は第一学期終業日が七月二〇日であつたことと、七月三〇日に上京し八月一日から三〇日まで、東京でのドイツ語

講習会を受講し、その足で九月二日から九日までの秩父、長瀨、三峰地方の土性・地質調査見学に参加していることから、二人がともに実家にいた可能性のある時期は、七月下旬のみである。この東京でのドイツ講習会の受講については、『家庭週報』第三七三号（大正五年六月三〇日）の「講習会だより」に「独逸語夏期講習会 七月一日より三十日迄及び八月一日より三十日まで神田仲猿楽町十七東京独逸学院に開催」とあり、賢治は後者の八月の期間に参加していることから、トシがこの講習会の情報を伝えたのではないかと推測される。一方、二人の第二学期始業日は九月一日の同日であることが確認できることから、このカードでの記述通り「暗示」を「休暇ノ終リニ近イ頃」に得たのであれば、「或一日」とは九月九日か一〇日しかなく、すれ違ふかもしれないなかった日に偶然にも接触ができたというのであろう。

トシの心に「暗示」として与えられた「光明」は、次なる精神的段階への足どりを確かなものとしたことが、次の〈資料6〉にも表されている。

〈資料6〉「第二学期ノ決心及希望」（カード）

第二学期開始にあたって、〈資料5〉を書いた日からさほど遠くない日に引き続き書かれたと思われる〈資料6〉の内容は、次のように先の暗示の体験から書き起こされている。

休暇中ノ或一日、暗示サレタソノ光リハ、帰校後種々ノ刺激ヲ得、又考ヘル事ニヨツテ漸ク明ラカニナリツ、アル。

このあと、トシが「空想的ニ求メル時代ハ過ギタ。ドウシテモ経験シナケレバナラヌ」と、体験を重視する言葉を書き付け、また「我ト他人、或ハ我ト物トノ間ニ築ク垣ヲ破リ、凡テト喜ンデ融合シ得ル者トナリ度イ。凡テノ生アルモノヲ、我ガ同胞ト愛シ尊敬シ得ル時ノ来ラシ事ヲ熱望シテ居ル」と、生きとし生けるものあらゆる生命への愛という感情を芽生えさせていることは注目すべきだろう。つまり、このカードの最後を締めくくる「現在ハ、コノ絶対者ヲ知ラントシテ、ソノ途中ニアル」という認識の段階において、「絶対者ノ光明ニ輝サレ」ることを望み、あらゆるいのちとの融合のうちにそれらのいのちを愛する体験への熱望が湧いてきているといえる。

こうして、のちのトシの書いた「自省録」（大正九年一～二月執筆）に記述される九月二十七日の「実践倫理」〔大正九年第二学期計画発表会ニ於テ〕で成瀬校長に出された「教育トハ何ンゾヤ、宗教トハ何ンゾヤ」という課題に対して、トシは「忘れもしない二年生の秋、実践倫理の宿題に「信仰とは何ぞや教育とは何ぞや」と出た時私は魂を籠めて可成り長い論文を書いた。」（「自省録」と記している。残念ながら、この答案は今回の発見資料のなかには存在しないが、トシの「自省録」によると、「信仰と云ふ事がわかつたつもりで満足して居た」とあり、この〈資料6〉の内容につながる積極的な思いが示された答案であったと想像される。

こうした本科一年の後半において、実践倫理の答案にますます心をこめて自己投入するなかで変化しつつあるトシの心境が、次の〈資料7〉に記される。

〈資料7〉「自己調査」（カード）

一二月一二日に書かれた〈資料7〉のカードの内容には、相変わらず「意志薄弱ナリ」という表現もみられるが、一方「徹底セズトハ云へ、信念生活ヲ考へ、行ハントスルコトニヨリテ、利己主義、又、怯懦ナル習慣ハ改

メラレツ、アリ」との肯定的表現も記されている。こうしてトシは「自己肯定シ自信ヲ固ム」という進行中の目標に手応えを得ている様子を表明している。

ただし、この約一か月後の大正六年一月一六日付トシ宛賢治書簡では、「あなたは去年あたり迄は宅でも大分考へながら外に出して置いた様ですけれども今はそんな心配もしない様ですし当然学校はおしまいまでやらなければいけないのですから決して急に学校をやめる様なことは思はないでゆつくり勉強して居つて下さい」との文面がみられることから、トシの自己改善の覚悟は、一時は学校をやめる道を口にする方向に向いたことも窺える。

大正六年度 家政学部三年

この年の四月、新学制に改められたことで、トシの学年は三年生となる。今回の新資料には、この年度のものも存在しないので、他の資料より二点のみ触れておく。

一点目は、この年、九月一六日の祖父喜助の逝去後に書いたと思われるトシの「料理ノート」のメモである。前年の祖父への手紙以来、トシは祖父を見守りながら自

己の生き方を模索していたが、祖父の死後、「ついに臆るげながら私の行くべき道を認める事が出来た即ちやはり信念生活を最もよく生活する外にないと知った」との言葉を記している。また、この体験を、祖父という個人のみならず、家族のため、すべての人々のために祈る愛をもつことのできた体験として意味づけていることは看過できない。

二点目として、大正七年一月二七日、トシが母宛書簡の記述で「あたりの人たちを見るといろいろ自分で新しがつたり、利己主義を構へたりさまざまで御座います。私は人の真似ハせず、出来る丈け大きい強い正しい者になりたいと思ひます。御父様や兄様方のなさる事に何かお役に立つやうに、そして生まれた甲斐の一番あるやうにもとめて行きたいと存じて居ります」と書いていることは、家族へ堂々と自分の生き方についての価値観と意志を伝えることができる心境に至ったことがわかる。

大正七年度 家政学部四年

最終学年に入ったトシは、体調を崩したあと、六月二日から七月八日まで五通の書簡で体調の回復を実家に報告し、七月一〇日の終業式のあと、一三日に帰省してい

る。また八月には、最高学年として軽井沢夏期寮に参加していることが、成瀬記念館所蔵の写真「軽井沢夏期寮にて」に映ったトシの姿によって確認できる。

この年の九月、成瀬校長はパンフレット『女子教育改善意見』を出版する。次の〈資料8〉『女子教育改善意見』を読んで」は、その発行後まもなく書かれた答案であると思われる。大正七年度の『実践倫理講話筆記』は存在しないため、授業内容との関係は確認できないが、『家庭週報』によると、成瀬は第二学期始業式にも、『女子教育改善意見』の内容と重なる女子教育の理想遂行と自覚への呼びかけをしていることがわかる。

〈資料8〉『女子教育改善意見』を読んで」

トシは、この答案において、「第一 女子教育改善意見ヲ読ミタル態度」から「第六 批評及確信」までの六項目を自ら作り、成瀬の著書の内容を客観的に整理しつつ、それが自己自身の考えとなり覚悟となる心境を募らせる表現を随所に見せながら展開している。

特にこの答案の冒頭で「女子教育改善意見ヲ真ニ読マウトシタ事ハ疑ヒモナク私ノ思想ノ（根本的ニ云ヘバ生活ノ）一大革命ノ動機トスル事デアッタ」という意欲を

強調していることは、この書を読んで共感や充実感を得、それが自己自身の使命の発見と生き方を変革する覚悟につながったという思いの反映であろう。また、本書では女性としての「天賦の性能」を生かして「使命」と「天職」を全うする道を導くことだと繰り返し書かれている。とりわけ「天職」について成瀬が「功利的打算に依らず、吾人が生れ来りたる使命を自覚し、其の使命を行ふことに依りて家庭国家社会に奉仕し、世界人類に貢献し、以て理想的善の根本要求を満足せしめんが為の生ける活動を導く作業を天職といふのである」(『女子教育改善意見』『成瀬仁藏著作集』第三巻)と書いていることを受けて、トシは「女子教育改善意見ハ特ニ女子ノ特質發揮、女性トシテノ天職遂行ヲ目的トス」と本書の主眼を捉え、女子自身がそうした目的に対して「コノ重大ナル使命ヲ担フベク高キ女子高等教育ニ耐エウルモノトナルベキデアル」と自己変革の必要性を述べ自らに課すのである。

答案の最後では、トシは「女子大学ノ建設ハ我々ノ共同ノ責任デアル」とし、その「責任ヲ負フニ相応シキモノニ自ラ成リ度イト希フノデアル」と自らの覚悟の言葉で締めくくる。その「責任」への思いは、二年後に、心の傷を乗り越えて母校花巻高等女学校の教員となり女子教育に携わることへの内面的動機につながった可能性は高い。

こうしてトシは、一月二四日付父宛書簡では、二二日に行われた休戦祝賀式での成瀬校長の話があったことを伝え、そこに同封した賢治宛書簡では、成瀬校長を天職を遂げている人物として「現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などを忍ばれて四十年一日の如く教育に我を忘れるらる、校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候」と書き、自分も「天職」を「見出し度く存じ候」という思いに至っており、成瀬の天職に生きる姿につながろうとしていることがわかる。

この書簡日付後の一月二〇日に、トシは病に倒れ、永楽病院に入院したため、翌年一月に告別講演をする成瀬の姿を見守ることもできずに、退院とともに三月三日に花巻に戻ることに成り、翌日三月四日の成瀬の訃報に接したことは、無念であったにちがいない。しかしながらそうであるがゆえに、体調が整い、大正九年に携わることになった母校の教職には、成瀬の女子教育への思いを受け継ぎ実行に移す時が来たという自覚で臨んだものと思われる。

おわりに

このようにみえてくると、宮澤トシという女性が、「信

仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくし」(詩「無声慟哭」としての認識をもつ兄賢治にとつて、二四歳という若さで亡くなった後もなお影響を与え続けた女性であったことについて、今回初公表となる「実践倫理」答案八点は具体的な理解を深めることのできる貴重な資料であることが明らかとなる。

そこには、賢治が捉えたトシの姿として、内面にどうしようもない闇の要素を抱えながらも、この世に生まれたい深い意義を探り「如何に生きるか」という課題の解決に向けて「勇進」し、個人の生命を拡張し、「絶対者」に触れてその「光明」に照らされる瞑想を求め、その「光明」のなかで自らの意志と行為が溢れ出るといふ人格に至るまで、向上を目指すという姿が立ち現れている。こうした成瀬校長の導きによるトシの精神世界は、絶対者と自我との関係把握や「宇宙意志」に対する信仰姿勢においても、賢治に伝えられ、その思想に流れ込んでいることは間違いなからう。

さらに、成瀬の『女子教育改善意見』を読んでの答案(資料8)では、最終学年になってようやくトシ自らの「自己教育」が落ちつく段階に入ったとき、トシの女子教育に対する使命への自覚が、成瀬の姿を追う形で新たに立ち上がっていることは注目に値する。このトシの教育に

賭ける思いもまた、トシの花巻高等女学校教諭への着任から約一年後に、賢治が花巻農学校の教諭となり、のちには羅須地人協会で農民の青年を教育する使命を担ったことへの思いと深いところで通じたことは想像に難くない。

以上より、成瀬、トシ、賢治の三者の心に流れ渡った深い泉のありかについて今後解明が進む糸口を、今回の資料は示しているといえるのである。

(一九八九年大学院文学研究科日本文学専攻博士課程

前期修了 一九九二年同博士課程後期満期退学

ノートルダム清心女子大学教授 やまね ともこ)

[付] 宮澤トシ 「実践倫理」 答案 翻刻

【大正四年度】 家政学部予科

〔資料1〕「自己調査」 カード一枚（両面使用） 計二頁 横書（カードの実寸…縦七五×横一一六ミリ）

表（英文は印刷）

Photo.	Name 宮澤トシ Department 家政学部 豫科
	Address 岩手県稗貫郡花巻川口町三百三 責善寮
	Date of birth 明治卅一年 十一月五日
	Parent's names 宮沢政次郎 合いち
	Parent's occupation 呉服商
	Relations 政次郎長女
Character	意志薄弱 陰鬱 消極的 其他大抵短所ヲ具有ス 正直
Essay	

Photo	Name	宮澤トシ	Department	家政学部予科
	Address	岩手県稗貫郡花巻川口町三百三		責善寮
	Date of birth	明治三十一年十一月五日		
	Parent's names	宮沢政次郎、同いち		
	Parent's occupation	呉服商		
Relations	政次郎長女			
Character	意志薄弱、陰鬱、消極的、其他大抵ノ短所ヲ具有ス、正直			
Essay	裏（英文は印刷）			
Brief and Conviction	<p>既定宗教ニハ未ダ入信セス、サレド神或ハ仏トモ名付クベキ絶対者ノ有ル事ヲバ信ジ居レリ、自己ノ不完全ニシテ欠点ノミ多キモ知レリ、故ニ何時カハ宗教ノ門ニ至ラン事ヲ期ス。</p>			
Mission	<p>我が人格未ダ少シモ向上ノ道ニ進ミ居ラザル事ヲ覚リテ、ソノ欲求ヲ充タサン為、本校ニ入学ヲ希望セリ</p> <p>真ノ人間トナリ、真ノ女トナリ、此ノ世ニ生レ出デシ吾ヲシテ最モ意義アル生活ヲナサシメント欲ス。而シテ本校ニ於テ、ソノ基礎ヲ造ラント期ス</p>			
決心	<p>決心</p>			

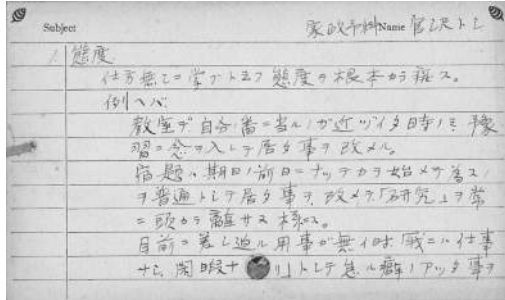
〔資料2〕「態度・独立」

カード一枚（両面使用）

計二頁

横書（カードの実寸…縦七五×横一二六ミリ）

（英文は印刷）



Subject

Name 家政予科

宮沢トシ

1. 態度

仕方無シニ学ブト云フ態度ヲ根本カラ廃ス。

例へバ

教室デ自分ノ番ニ当ルノガ近ツイタ時ノミ予習ニ念ヲ入レテ居タ事ヲ改メル。

宿題ハ期日ノ前日ニナツテカラ始メテ為スノヲ普通トシテ居タ事ヲ改メテ、「研究」ヲ常ニ頭カラ離サヌ様ニス。

目前ニ差シ迫ル用事ガ無イ時、「我ニハ仕事ナシ、閑暇ナリ」トシテ怠ル癖ノアツタ事ヲ改メル。

1. 独立

個人ガ団体又ハ他ノ大キナモノニ同化シ一体ニ成ツタ時ハ、私ノ生命ハ拡張サレ、発展サレ、大キクナツタ時デアル。コレガ個人主義ヤ孤立ト全ク反対ニ積極的ナ所デアル。独立トハ他ノモノトノ間ニ垣ヲ作り、溝ヲ作ルノデハナクテ、他ヲ容シ、他ト一体ニアル事ガ我が生命ヲ延シ、真ニ独立スル事デアル。

【大正五年度】 家政学部本科一年

〈資料3〉「大学生活に入る決心」

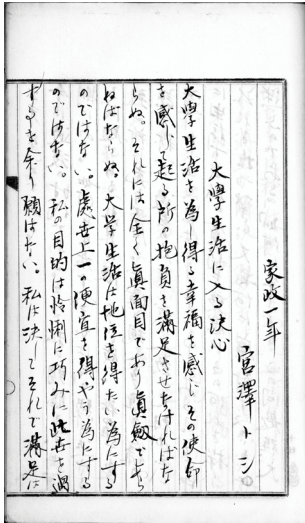
二〇行野線入り用箋三枚（袋とじ） 表紙・本文三頁

（用箋の実寸：縦二四五×横三三八ミリ）

（表紙）

家政一年

宮澤トシ



大学生活に入る決心

家政一年

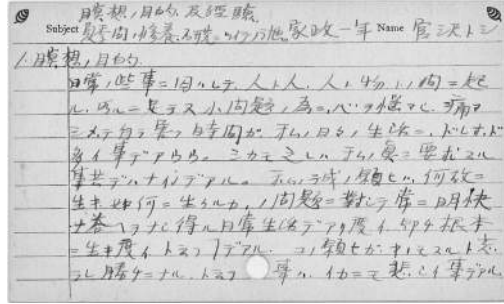
宮澤トシ

大学生活を為し得る幸福を感じ、その使命を感じて起る所の抱負を満足させなければならぬ。それには全く真面目であり真剣であらねばならぬ。大学生活は地位を得たい為にするのではない。処世上一の便宜を得やう為にするのではない。私の目的は伶俐に巧みに此世を過す事を余り願はない。私は決してそれで満足は出来ないのである。

今は過渡の時代である。そして私の頭脳も亦過渡期にある。如何に生活すべきかは日々繰り返さるる問題である。外界は限りなく広い。森羅万象到る所に充ちて居る。幾億の現人、多種多様の説を称へる。過去の人なる、我々人類の先祖が云ひ遺したこともいかばかり多い事であらう。その中に生存する私の貧弱な頭脳は、その何れを採りいづれを捨つべきか、又如何に対応すべきかに迷ふのである。「如何に生きるか」この問題程、大切なものは私には無いのである。如何にもしてこれに満足な解決を与へなければならぬ。今後三年間の大学生活を空費するも有効にするも私の決心次第である。多くの同胞の望みて得られないこの生活を、我が最善を尽して生活し進み得られる限りどこまでも進めて行かうと云ふのが私の決心である。

〔資料4〕「瞑想ノ目的、及経験／夏季節ノ修養、研究ニツイテノ計画。」

カード三枚 (両面使用) 計五頁 横書 (カードの実寸：縦七五×横一二六ミリ)



(英文は印刷)

Subject	Name
<p>瞑想ノ目的及経験 夏季節ノ修養、研究ニツイテノ計画。</p> <p>1. 瞑想ノ目的 日常ノ些事ニ囚ハレテ、人ト人、人ト物トノ間ニ起ル、取ルニ足ラヌ小問題ノ為ニ、心ヲ悩マシ、痛マシメテ自ラ害フ時間ガ、私ノ日々ノ生活ニ、ドレホド多イ事デアウウ。シカモ之レハ私ノ真ニ要求スル事共デハナイノデアアル。私ノ誠ノ願ヒハ、何故ニ生キ、如何ニ生クルカ、ノ問題ニ対シテ常ニ明快ナ答ヘラナシ得ル日常生活デアリ度イ、即チ根本ニ生キ度イ、ト云フコトデアアル。コノ願ヒガ、ヤ、モスルト忘ラレ勝チニナル、ト云フ事ハ、イカニモ悲シイ事デア ル ソコデコノ心ヲ蔽ヒ曇ラスル此等ノ妄念ヲ去リ真ノ根本ニ帰り度イ、ト云フ目的ヲ以テ、私ハ瞑想スル。根本ニ帰り、我ガ動く原動力ヲ確メ、コレニヨリテ過去ヲ批判シ、同時ニ、未来ニ対シテ、行クベキ道ヲ更ニ、新ニ明カニ意識シテ行ク事が出来ル。根本ヲ忘レタ生活ガ苦痛ノミノ暗イ生活デアル事ヲ私ハ経験シタ。何卒ソレヲ洗ヒ流シテ私ノ生命ノ真髓ニ帰り、力ヲ得、命ヲ進メテ行キ度イト云フ目的ヲ以テ私ハ瞑想シタ。</p>	<p>瞑想ノ目的及経験 夏季節ノ修養、研究ニツイテノ計画。 Name 家政一年 宮澤トシ</p>

経験

経験ガ余リニ貧弱デアッタ事ノミ、私ハ悲シク思フ。真ノ瞑想ノ目的ニ叶ッタ瞑想ヲシタ事ガアルカ。

私ハ今更ニ自己ニ対シテ不忠実不信実ナリシ私ヲ責メラレルノデアル。我ガ凡テヲ投ゲ出シテ打ち俯スベキ絶対者ノ前ニ、語り、ソノ光リニ照サレル事ガ瞑想デアルト私ハ考ヘル。ソノ様ナ経験ヲ曾テシタ事ノナイト云フ事ガ無上ノ悲シミデアル。サレバ私ハ、形ハ瞑想デアッテモ真ノ私ノ望ム瞑想マデハ行ツテ居ナカッタ。今私ハ何故コレガ出来ナカッタカ、ソノ原因ヲ探リツ、アル。集中シナカッタ事、雑多ノ枝葉ノ事ニ余リニ囚ハル、事モソノ原因ノ一デアルガ最モ大キナモノハ、私ノ絶対者ニ対シテ未ダ殆ド研究シテ居ナイ、知ツテ居ナイト云フ事ニ帰スルト思フ。

2.

夏季間ノ修養及ビ研究ニツイテノ計画ト決心

経験ガカクノ如ク、貧シイモノデアルカラ私ハドウシテモコノ儘ニ居ル事ハ出来ス。

コノ時ニ當ツテ夏休ミノ与ヘラレルト云フ事ハ誠ニ絶好ノ機会デアアル。イカニモシテ、コノ休暇中ニ於テ充分ニ考ヘ、瞑想スル経験ヲ豊カニシナケレバナラス。ソレニハドコマデモ真面目ナ真実ナ心ヲ以テ自由ニ我自身ヲ考ヘ、絶対者ヲ知り、此ノ今ノ小ナル私自身ヲ包容スルトコロノ根本ノ力、絶対者ニ是非触レタイ。包容サレ度イ。ソレニヨツテ凡テノ日常生活ヲ営ム事ノ出来ル力ヲ得、ソレニヨツテ生カサレ、大キクサレルソノ経験ヲ是非味ハナケレバナラス、ト計画シ、且ツ決心スルノデアアル。

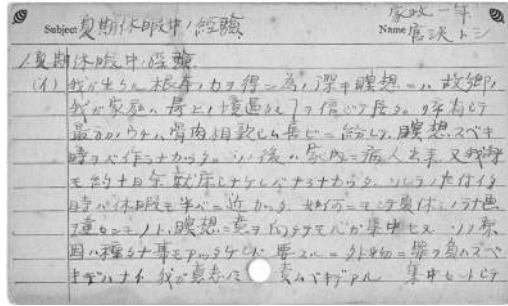
〔資料5〕「夏期休暇中ノ経験」

カード一枚 (両面使用) 計二頁

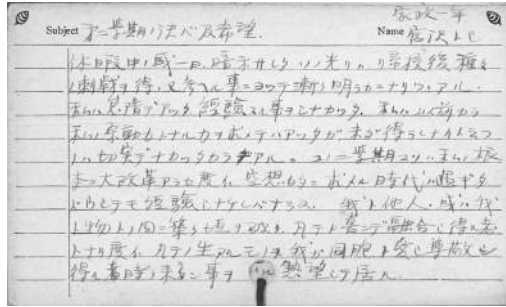
横書

(カードの実寸: 縦七五×横一二六ミリ)

(英文は印刷)



Subject	Name
1. 夏期休暇中ノ経験	家政一年 宮澤トシ
(イ) 我が生クル根本ノ力ヲ得ン為ノ深キ瞑想ニハ故郷ノ我が家庭ハ最上ノ境遇タルコトヲ信ジテ居タ。帰省シテ最初ノウチハ骨肉相親シム喜ビニ紛レテ、瞑想スベキ時ヲバ作ラナカッタ。ソノ後ハ家内ニ病人出来又我身モ約十日余就床シナケレバナラナカッタ。ソレヲノ片付イタ時ハ休暇モ半バニ近カッタ。如何ニモシテ夏休ミノ計画ヲ達センモノト、瞑想ニ意ヲ向ケテモ心ガ集中セヌ。ソノ原因ハ種々ナ事モアツタケレド要スルニ外物ニ罪ヲ負ハスベキデナイ。我が意志ノミ責ムベキデアル。集中セントシテ読書モシタ。ケレドソレヲノ中ノヨキ経験、教訓ハ私ノ前ニハアツテモ我が本体ニハ触レズニ只通過シ終ル。私ハ煩悶シタ。ソシテソノ原因ヲ考ヘタ。私ハ病者デアツタ。私ハマダマダ内省ガ出来テ居ナカッタ。内心深ク自己ノ実体ノ声ヲ聴キ、自発ノ叫ビヲ聴ク事ニヨリテ病ヨリ救ハル、ト信ジタ。コレガ休暇ノ終リニ近い頃デアツタ。今一ツハ或一日偶ナクモ敬愛スル兄ヨリ或暗示ヲ得タ。ソノ形ハ定カデハナカッタケレド僅カニ光明ヲ認メテ帰校シタ。	
(ロ) 具体的ノ経験トシテハ自然ニ親シミ、親族ニ親シミ又家事ノ手伝ヒ、料理等ヲシタ。ケレド自信ヲ以テ人ニ語り得ル程ノモノデハナカッタ。	



〔資料6〕「第二期ノ決心及希望」カード一枚（両面使用）計二頁 横書（カードの実寸：縦七七×横一一八ミリ）

（英文は印刷）

Subject 第二期ノ決心及希望 Name 家政一年 宮沢トシ

休暇中ノ或一日、暗示サレタソノ光リハ、帰校後種々ノ刺激ヲ得、又考ヘル事ニヨツテ漸ク明ラカニナリツ、アル。私ハ怠惰デアツタ、経験スル事ヲシナカッタ、私ハ以前カラ私ノ原動力トナル力ヲ求メテハアツタガ、未ダ得ラレナイト云フノハ切実デナカッタカラデアアル。コノ二学期ヨリハ私ノ根本ニ大改革アラセ度イ。空想的ニ求メル時代ハ過ギタ。ドウシテモ経験シナケレバナラス。我ト他人、或ハ我ト物トノ間ニ築ク垣ヲ破リ、凡テト喜ンデ融合シ得ル者トナリ度イ。凡テノ生アルモノヲ、我ガ同胞ト愛シ尊敬シ得ル者ト来タシ事ヲ熱望シテ居ル。

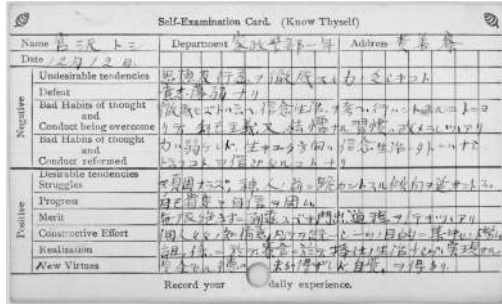
ソシテ多クノ天才ノ為シタ様ニ大空ノ下ノ広い道ヲ囚ヘラレズニ歩ミ度イ。ソシテソレハ鞭モテ逐ハレテスル奴隸ノ如ク、義務的ノ、苦シイ一方ノモノデナク、常ニ絶対者ノ光明ニ輝サレ、ソノ前ニ跪イテ、凡テノ我ガ意志行為ハ、涸レザル泉ヨリ溢レ出ルモノデアリ度イ。

コレガ我ガ決心、希望デアアル。

現在ハ、コノ絶対者ヲ知ラントシテ、ソノ途中ニアル。

〔資料7〕「自己調書」 カード一枚 計一頁 横書 (カードの実寸：縦七六×横二二六ミリ)

表 (英文は印刷)



Self-Examination Card. (Know Thyself)	
Name	宮沢トシ
Department	家政学部一年
Address	責善寮
Date	12月12日
Undesirable tendencies	思想及行為ヲ徹底スルカノ乏シキコト
Defeat	意志薄弱ナリ
Bad Habits of thought and Conduct being overcome	徹底セズトハ云へ、信念生活ヲ考へ、行ハントスルコトニヨリテ、利己主義、又、怯懦ナル習慣ハ改メラレツ、アリ
Bad Habits of thought and Conduct reformed	力ハ弱ケレド、生キユク方向ハ信念生活ノ外ニハナシト云フコトヲ信ジタルコトナリ
Desirable tendencies	頑固ナラズ、神、人ノ前ニ跪カントスル傾向ヲ延サントス。
Struggles	自己肯定シ自信ヲ固ム。
Progress	無限絶対ニ到達スベキ門出、道程ヲ行キツ、アリ
Merit	個人々々ノ知情意ノ凡テヲ統一シ一ツノ目的ニ集中セント努ム
Constructive Effort	個人々々ニ於テ、寮舎ニ於テ、捧仕 ^{トシ} ノ生活少シツ、実現サル
Realization	組ノ係ニ於テ、寮舎ニ於テ、捧仕 ^{トシ} ノ生活少シツ、実現サル
New Virtues	完全セル徳ハ未ダ得ザレド、自覚ヲ得タリ。
Record your daily experience.	

裏(記入なし、英文は印刷)

Read these Words Aloud Daily.

I resolve to be self-reliant!

I am eager for achievement!

I am grateful for life and opportunity!

I am determined to progress!

I must have faith in myself!

I desire daily to grow in courage!

I will succeed in a positive way!

I have set my heart upon truth!

I must aspire to lofty heights!

I am determined to win!

I will do at least one act of kindness to-day!

I will sacrifice all things for love!

I will obey my conscience readily!

I will devote myself to the great cause!

【大正七年度】 家政学部四年

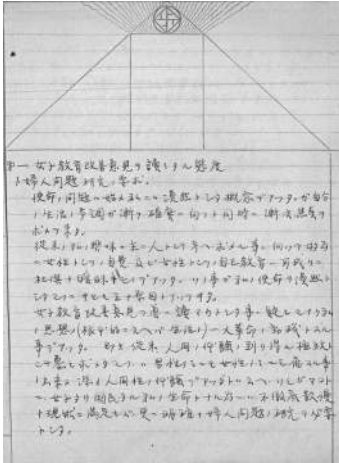
〔資料8〕 『女子教育改善意見』 を読んで

実践倫理ノート* 七枚 表紙・本文一一頁
横書（用箋の実寸…縦二〇八×横一六三ミリ）

（表紙）

実践倫理答案

家政四年
宮澤トシ



第一 女子教育改善意見ヲ讀ミタル態度
1. 婦人問題研究ノ要求。

使命ノ問題ハ始メ私ニハ漠然トシタ概念デアッタ。自分ノ生活ノ歩調ガ漸ク確實ニ向フト同時ニ、漸次焦点ヲ求メテ来タ。

従来ノ私ノ興味ハ主ニ人トシテ考ヘ、求メル事ニ向ツテキタ為ニ、女性トシテノ自覚、及び女性トシテノ自己教育ハ可成リニ杜撰ナ曖昧ナモノデアッタ。ソノ事ガ私ノ使命ヲ漠然トシタモノニサセル主ナ原因トナツテキタ。

女子教育改善意見ヲ真ニ読マウトシタ事ハ疑ヒモナク私ノ思想ノ（根本的ニ云ヘバ生活ノ）一大革命ノ動機トスル事デアッタ。即チ、従来、人間ノ体験ノ到リ得ル極致トシテ慕ヒ求メタモノハ、男性ノミニモ女性ノミニモ属スル事ノ出来又深イ人間性ノ体験デアッタトハ云ヘ、ソレガマコトニ、女子タリ国民タル私ノ生命トナル為ニハ、不徹底散漫ナ現状ニ満足セズ、更ニ明確ナ婦人問題ノ研究ヲ必要トシタ。

私ノ内ニハ矢張り、「女子と小人養ひ難し」ノ訓ヘハ一応ハ肯定シテハ居タケレド、更ニ確實ナ科学的研究ノ結果ト対決サセル必要ヲ感じ、改善意見ヲ読

ンダ。

果シテ我々女子ハコノ二十世紀ノ新時代ノ建設者タリ得ルカ？コノ榮冠ノ同時ニ重キ任務ヲ担ヒ得ルカ？ト自問シ、自ラノ内ニ答ヘヲ求メツ、讀ンダ。

2. 大学生生活ノ反省

人格教育ト専門教育トノ真髓ハ全人生ヲ通ジテノ生活ノ方法ノ基礎トナルベキモノデアル。最モ徹底シタソノ「生活ノ術」ヲ明示サレ教導ヲ受ケタ。ソレハ自然ニ、凡テノ方面ニ於ケル自己ノ学生々活ヲ反省スル事トナツタ。

3. 国民トシテ、時代ニ処スル道ヲ知ル態度ヲ以テ、

此等各々別ニ存スルノデハナイ。

要スルニ女子トシテ、国民トシテ、人トシテノ我々ガ今後如何ニスベキカノ問題ヲ以テ、コノ教育改善意見ヲ讀ンダノデアル。

第二 大学教育法改善案ト女子教育改善意見トノ相違点

1. 立脚点。

大学教育法改善案ハ男女凡テノ大学教育ニ就キテ。

女子教育改善意見ハ女子のみノ教育ニ就キテ、シカ

モ、大学教育ノミナラズ、(勿論大眼目ハ大学教育

ニオキ、高等女学校、小学校ニモ布行ス)

2. 主眼点

等シク賦性發揮ヲ眼目トハシテモ、大学教育法改善案ニ於テハ個人トシテノ個性發揮ニ重キヲオキ、女子教育改善意見ハ特ニ女子ノ特質發揮、女性トシテノ天職遂行ヲ目的トス。

共通点

1. 教育ノ可能能力―天賦性發揮。

2. 教育ノ根本方針―人格教育ト専門教育トノ伴隨。

3. 学校教育ハ学生ノ自動的学習ニ重キヲオク点。

4. 研究材料、学科ノ中心ハ架空ノ事ニ求メズシテ、

実地ノ生活現象ニ求ムル点。

關係

女子教育改善意見ニ表ハサレタ女子大学教育ハ大学教育法改善案ヲ基礎トシ、範圍ヲ女子ニ限り、一層明確ニ、細カク表ハサレテアル。

然シナガラ、彼ノ時ヨリモ、此ノ時ハ更ニ時代ガ推移開展シ切迫シタ。時代ニ対スル正シキ反応トシテ大学教育法改善案ガ応用サレ布行サレタ外ニ、尚方針ヲ家庭中心ニシ、又家政学中心ノ補習教育ヲ授クル等ノ如ク、更ニ一步ヲ進メ、徹底セル改善策ガ女子教育改善意見ニ於テ、創メテ述べラレテアル。

第三 女子教育改善意見ノ骨子

此ノ時代、此ノ国ニ於ケル女性トシテ、日本婦人ガ自覚シ各々ソノ天職使命ヲ果サナケレバナラス。ソレヲ実現スル唯一ノ方法ハ現在ノ女子教育ヲ改善シ、教育ヲシテ今一層有効ナ実生活ノ訓練トスル事デアアル。

識者ハ女子教育ノ重大事タルヲ認メテ、殊ニ其ノ最大根本タル女子高等教育ノ道ヲ開クベキデアアル。女子自身ハ自ラ科学的ニ目醒メテ、自ラヲ卑シマズ、偏見ヲ去リ、現状ニ安ンゼズシテ、コノ重大ナル使命ヲ担フベク、高キ女子高等教育ニ耐エウルモノトナルベキデアアル。

第四 各章ノ要点

第一章 女子教育問題研究ノ態度

世界ノ大戦ハ欧米人ノ思想ト生活トニ甚大ナ變動ヲ与ヘタ。中ニモ、婦人問題ノ重視サレルニ到ツタ事ハ世界ノ事実デアアル。我国ノ女子教育モ、偏見ヲ脱シテ、新時代ヲ建造セントスル明ラカナ国是ノ下ニ内外古今ノ事情ニ鑑ミ科学的基礎ノ上ニ立ツテ、将来ノ方針ヲ定ムルヲ要スル。

第二章 女子ノ人格教育ト良妻賢母主義ノ教育

女子教育ハ、人トシテ、婦人トシテ、国民トシテノ三方面ヨリ行ハレナケレバナラス。人格教育ト女性教育トハ、対象トスルハ女性ナル一人格デアアル故ニ、本来別ノモノデハナイ。サレバ女子ノ性状ヲ科学的ニ研究シテ、ソノ中ニ人格ノ萌芽ヲ発見シテ教育スルノヲ適當ナ女子教育ノ方針トスル。大戦ノ示シタ結果ハ、コノ方針ノ正シイ事ヲ裏書スル。十九世紀ノ男子ノ文明科学ノ世紀ガ残シタ欠陥ヲ補フ処ノ靈界ノ開拓ハ一ニカカツテ、今後ノ女子ノ力ニ俟タレテキル。厳密ナ女性研究ノ必要ナル事勿論デアアル。

第三章 女子ノ人格教育ト専門教育

人格教育ト専門教育トハ両々相並行シ補足シ合ツテ始メテ教育ノ成功ガ期セラレル。ソレハ人ノ動機、思考、実行ノ三要素ヲ常ニ並行シ、伴随サセテ、全人格ノ天職実現ニ導ク健全ナ教育ノ方針デアアル。ソノ方法ハ即チ生活ノ術デアアル。

女性ノ教育ト家庭ト学校トノ連絡

児童ハ家庭ニ対シテ凡テノ興味ヲ集中スル。故ニ学校教育ハ家庭ト密接ニ関係シ学校ヲシテ一家庭タラシメナケレバナラス。而シテソノ実際生活ハ同時ニ学校ヲシテ社会国家ノ縮図タラシムベキデアアル。

思考及科学

女子ノ注意及努力ヲ家庭生活ニ集中サセ、諸学科ヲ家政学ニ連絡統一セシメ、学理ト実地、思考ト実行トヲ連絡セシムルコトニヨリ、効率ヲ高ムルコトガ出来ル。

女子高等教育ニ於ケル家政学ノ位置

諸有技術ト科学トハ悉ク家庭生活ニ応用セラルベキモノデアアル、故ニ集中点ハ家政学ニオカレナケレバナラナイ。

第四章 女子高等教育ノ必要

1. 子女教育ノ進歩ト女子高等教育

家庭教育者ハ学校教育ノ進歩ニ伴ヒ、之ヲ理解シ協同スルノミナラズ、学校教育ノ欠点ヲ補フヲ要スル。特ニコノ過渡期ニ於ケル母タルモノ、資格ハ現状ヨリモ更ニ高等ナ教育ヲ要スル。

2. 家庭生活ノ進歩。趣味ノ向上、科学ノ発達ニ伴

ヒテ進歩スル家庭生活ノ経営ノ任ニ当ルベキ準備トシテ女子高等教育ヲ必要トスル。

3. 女子教育ノ普及徹底。

(a) 近年、女子ノ中等教育ヲ受クル者ノ増加著シク、之ニ伴ツテ高等教育希望者ノ数ノ増加スベキ事ハ当然ノ勢デアアル。

(b) 且又、高等女学校教育ノ根本的改善ノ為ニモ、又、中等教育ヲ受ケタ多数ノ女子ノ指導者養成ノ為ニ

モ、女子高等教育ノ必要ハ明ラカデアアル。

4. 男子ノ進歩。女子ハ社会的ニハ男子ノ協力者タ

リ。個人的ニハ伴侶友朋トシテ男子ノ進歩ニ伴フ為ニハソノ資格ヲ高等教育ニヨリテ得ナケレバナラス。

5. 女子職業ノ発達。社会ノ事務的分化ト生存競争

ノ激烈トニ原因シテ女子ノ社会活動ハ増加シツ、アル。コノ方面ノ要求ヨリ女子高等教育ノ必要ナル所以ハ

(a) 多数ノ職業婦人ノ上ニ立ツベキ女子ノ指導者養成ノ機関ノ必要

(b) 学者、専門家トシテ立ツベキ婦人養成機関ノ必要トナル

6. 国家ノ発達。国民ノ人格ニ於ケル女子ノ影響ノ

大ナル事ヲ認ムル以上ハ国家的見地カラ女子高等教育ノ進歩ガ必要デアアル。

7. 社会ノ進歩。鞏固、円満ナル社会組織ニヨリテ

社会ノ進歩ヲ来ス為ニハ男女ハ略々同程度ノ思想感情ヲ以テ、全員理解融通ガ行ハレナケレバナラス。女子ニコノ資格ヲ与ヘル道トシテ、高等教育

が必要デアル。

8. 戦後ニ於ケル世界ノ形勢。戦後ノ世界ハ更ニ激烈ナル活動、競争ノ状態トナルデアラウ。特ニ欧米婦人ノ社会的活動ノ拡大ハ女子ノ人格技能ノ発達ヲ来スト共ニ一方男子ヲ助ケテ、偉大ナル新文明ヲ産出スベキ傾向ハ明ラカデアル。我国婦人ノミガ依然旧態ニ留マル事ハ女子ノ不幸ニシテ国家ノ不幸デアル、之ヲ救フノ道ハ女子ノ高等教育デアル。

9. 交戦諸国ノ婦人状態及女子教育ノ新傾向。彼国婦人等ノ自覚セル活動、ソノ努力、悉ク、今ヤ女子ノ時代タラントスル事ヲ証明スルモノデアル。

10. 小結 女子ノ社会的発展ニ伴フ弊害ヲ恐レテ旧態ニ止マル時デハ最早ナイ。弊害ハ積極的ニ更ニ女子ノ進歩ヲ確實ニスル事ニヨツテ救ハレルデアラウ。女子高等教育ノ発達ハ社会各方面ノ要求デアリ、文明必然ノ趨勢デアル。

第五章 男女共学問題。

宇宙ノ理想ハ一言ニ云ヘバソノ両極タル男女ノ両性ノ調和ニアル。女子教育ノ方針及目的ハ女性ノ使命ヲ完ウシ完全ナ人格ヲ作ル道ヲ示導スルニアル。今後我国ノ女子高等教育ハ一方特立ノ女子大学制度

ヲ設ケテ、徹底セル女性教育ノ道ヲ開キ、他方ニ於テハ一定ノ制限ノ下ニ、男子大学ノ門戸ヲ開放スル事ヲ以テ最モ適切ナル方策トスル。

第六章 女子ノ高等教育ノ可能性。

1. 精神の可能性。現代ノ知識ハ女子ノ特性ヲ認め『本能の二人類ノ獲得セル諸有後天的善ヲ保存シ一段ノ高所ニ於テ新要素ヲ同化シテ社会ヲ向上セシメントスル資質ヲ有スルモノ』ト結論シテ居ル。女子ハ男子トソノ發展ノ方面ハ異ニスルモ、人格トシテハ同様ニ永久ノ進化ヲ示スモノデアル事ハ疑モナイ事デアル。女子ノ能力ヲ疑フ者ノ論拠ハ多ク科学的研究ノ結果デハナイ。

2. 身体的可能性。今日ノ学説ニハ、女子ノ生理的心的発達ヲ遂ゲルニハ二十三才以後デアル故ニ、ソレマデ適切須要ナル教育ヲ与フベシトノ意見ガ多ク持タレテキル。而シテ、本校ノ示ス实例モ、不完全ナガラ可成リ満足ナル結果ヲ示シテキル。

第七章 我国ハ今後如何ナル女子大学ヲ要スルヤ

ソノ方針ハ我帝国ノ婦人特殊ノ使命カラ立ツラルベキデアル。

1. 家政学科。直覚的神秘的賦性ヲ健全ニ發展セシ

メ科学的の頭腦ノ啓発、無情的の勢力ノ善導ニヨリ諸種ノ重大問題ヲ以テ社会ニ貢獻シウル所ノ知識技能ヲ養成セン事ヲ期シ之ガ為ニ家政学ヲ中心トシテ理科、経済学科、農科、商科、人類学科等ヲ連絡ノ分科トシテ開設ス

2. 宗教科。 国民精神生活ノ後天的の美ヲ保存醇化シ信念ヲ覺醒又涵養シ、社会事業ノ指導者ヲ養成セシテ為ニ宗教科ヲ設ケ、之ニ関連シテ文科、社会学科、教育科、美術科、音楽科等ヲオク。

3. 医科。 女子ノ稟性發揮ノ一ツノ道トシテ、医科ヲ中心ニ体育科、薬学科、病人食物及栄養科、人種改善科等ヲ之ニ関連シテオク。即チ女子ノ総合大学ヲ建設セントスルモノデアル。

第八章 女子教育改善策

1. 学校ハ家庭及社会国家ノ連鎖トナリ女子ノ国民教育ヲ徹底セシムル事。

2. 男子ガ兵役義務ヲ負担スルト同様、女子ニモ国民トシテ小学校終了後一ヶ年以上ノ補習教育ヲ受ケシメ家政学ヲ中心トセル実務教育ヲ授クル方針ヲ取ルベキコト。

3. 家政学ニ重キヲオキ、家庭生活ニ対スル思想、興味、実行ヲ中心トシテ他学科ヲ之ニ連絡統一スベ

キコト。

4. 高等女学校ハ修行年限ヲ五ヶ年ヲ本則トシ五年以上ノ高等女学校ハ上級ヲ分科のトナシ選択ノ自由ヲ与フルコト。

5. 高等女学校卒業後ノ者ノ入学スベキ女子高等学校ハ修行年限ヲ二年又ハ三年トシ基礎トシテ修養教育ヲ授ケ、上進スルニ從ヒ適切ナル部門学科ニ集中学習セシメル。

6. 女子ノ天職ノ自覚ニ確信ト興味ヲ得セシムル専門的知識技能ヲ授クル為ニ女子専門^{専門}学校ヲオク。程度ハ女子高等学校ニ準ズル。

7. 女子大学ハ家政学科宗教科医科ヲ中心トシタモノヲ女子総合大学トシソノ一分科ノ上ニ研究科ヲ有スルモノヲ女子単科大学トスル。男子大学トモ連鎖スル事ヲ要スル。

8. 女性人格教育を徹底セシムルコト

9. 女子体育ヲ徹底セシムルコト

10. 女子視学ヲオクコト。

第五 全体ノ要領

1. 女子教育ニ対スル態度ハ積極的ニ科学的の女性研究ノ結果カラ出ヅベキデアル。

2. 女子ノ人格教育ト女性教育ト国民教育トガ別々ニ離シテハ行ハレナイ事ヲ知り、コノ時代ニ最モ適応シタ女子ノ使命ヲ果サシメル為ニハ教育ヲ如何ニスベキカノ問題ニナル。
3. 教育ノ根本方針ハ人格教育ト専門^マ教育ト相並行シ伴随スル事ニアル。女子教育ニアリテ最モ自然ノ行キ方ハ家庭ト学校トノ連絡ヲトツテ学校ヲ生活ノ訓練ノ場所トスルト共ニ、諸学科ヲ家政学ニ連絡統一セシムル事ニアル。
4. 女子高等教育ハ子女教育ノ進歩ノ上カラ、又家庭生活ノ改善進歩、女子教育ノ普及徹底、男子ノ進歩、女子職業ノ發達、国家ノ發達、社会ノ進歩ノ上ヨリ見テ必要ナルコトハ勿論、当然之ニ伴ヒテ進歩シナケレバナラス。戦後ノ世界ノ形勢ヲ察知シ又交戦諸国ノ婦人状態ト教育ノ傾向ヲ見ルモ、女子高等教育ノ發達ハ必然ノ趨勢デアアル。
5. 而シテソレハ徹底セル女性教育デアリシカモ他方ニハ男女共学ノ道モ開カルベキデアアル
6. 女子ノ高等教育ハ精神的ニモ身体的ニモ可能デアアル。
7. 我国今後ノ女子大学ハ女子ノ稟性發揮ヲ目的トスル、家政学科、宗教科、医科ヲ中心ニ、其他之ニ

関連スル諸科ヲ設ケタル一大総合大学デナケレバナラス。

8. 女子教育改善策トシテ、国民教育ノ徹底、国民補習教育ノ創始、家政学中心制ニヨル女子普通教育ノ徹底の統一、高等女学校制度ノ改革、女子高等学校及女子専門^マ学校ノ設置、女子総合大学及単科大学ノ新設、女性人格教育ノ徹底、女子体育ノ徹底、女子視学ヲオク事、等デアアル。

第六 批評及確信

コノ書ハ婦人問題ノ最新ノ解決デアリ、時代ニ処シテ婦人ノ赴クベキ所ヲ示導サレタ明燈デアアル。我国ノ女性ニ与ヘラレタル一大覚醒ノ警鐘デアアル。此ノ書ヲ生カシ、危機ニ迫レル国ヲ救フノ道ヲ講ゼントスルカ又ハ、猶現状ニ俊巡シテ、之ヲ単ニ先覚者ノ予言トシテ終ラシムルカハ一二之ヲ受クル婦人自身ノ態度ニアアル。

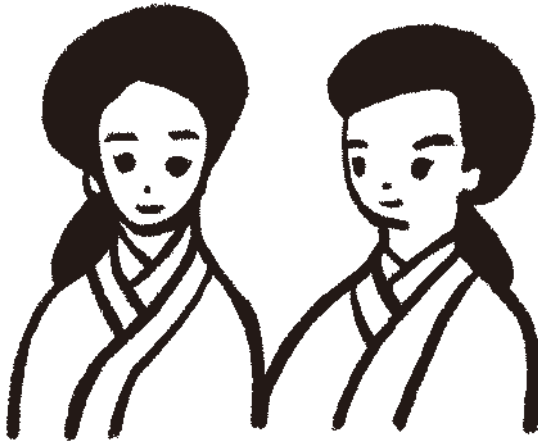
科学的研究ノ結果ヲ信ジ自由ナル人格トシテ立ちウルクトハ何タル大歡喜デアラウ。各自ノ働キ場ヲ見出しテ、開拓ノ手ヲ待ツ広野ノ前ニ立ツ我等ニハ大ナル希望ガ湧イテ来ル。

現実ノ我ハ余リニミスボラシク小サイ。シカモソノ

我ヲ提ゲテ、何処マデコノ重任ヲ尽シ得ルカ自ラ試ミ、自ラ一歩ヲ始メヤウトノ覚悟ハ既ニ出来タ。
女子大学ノ建設ハ我々ノ共同ノ責任デアアル。

研究方面ニ、精神方面ニ、体育方面ニ、大学生活ガ如何ニアルベキカ、而シテ現在ハ如何ナル状態デア
ルカ、コノ反省ハ私ヲ奮ヒ立タセル。ソノ各方面ニ
一層ノ努力ヲ進メルコトニヨツテ、大学建設ノ共同
責任ヲ負フニ相応シキモノニ自ラ成リ度イト希フノ
デアアル。

*実践倫理ノート…成瀬仁蔵が実践倫理講話のために考案したノート。上部のマークの○はDeity（神）、+はSelf-Identity（本体）、□はHumanity（人間性）、△はTrinity（三位一体）を表し、のちに本学の校章に取り入れられた。



日本女子大学と私

上代先生と

日本女子大学合唱団

大竹 洋子

憧れの上代先生

前方を歩いていらっしやるのは学長の上代先生だ。泉山館一階の廊下である。私はものすごく急いでいた。先生を追い越したいがそうはゆかない。しかしとうとう堪りかねて突っ走った。「失礼します、申し訳ありません」。駆け抜けた私の肩がごとと掴まれ、しまった、と思うまでもなく上代先生の笑顔が見えた。「何をそんなに慌てているの」、上代先生は、私の髪の毛を直し始められたのである。ポニーテールは私のトレードマークだったが、このポニーテールは時間が経つにつれ、後れ毛と

なって襟足にたれさがってくる。それを先生は丁寧にしてくださり、ボンと背中を叩かれた。「行つてよろしい」。今も冷汗が出るような思い出である。上代先生は、生徒が髪ふり乱して走っているのがおかしくて仕方がないというふうだった。

その日より少しあとだったと思う。私が属していたコーラス部、日本女子大学合唱団の練習風景をラジオ局が取材したことがあった。これを耳にされた上代先生から、録音が終わったら学長室に来るようにという伝言が秘書室を通して届いた。ところが私は取材が済んだ頃にはすっかり忘れてしまい、あつと気がついた時には夕闇が構内を包み始めている。学長室に飛んできたが、もうドアは閉まったままである。どうしよう、先生のお宅へお詫びにあがるしかない、そう思い立って仲間と二人で成城方面へ向かった。どの辺りが先生のお住いなのか全く判らないまま、住所を頼りにやっど探しあてても先生はまだお戻りではない。留守番の方にくどくどと説明し、本当に済みませんでしたと頭を下げてとほとぼ家路についた。

その夜は殆ど眠れなかった。翌日登校すると、コーラス部の部屋に学長室からお使いの先生がみえた。上代先生は放送局の方にお礼を申し上げ、お茶を差し上げた

かった、でも私になかなか現れないので外出なさった、とのことである。私たちがお宅にうかがったことをご存知の先生は、「あなたたちがちゃんと用件を話さないから、生徒に余計な心配をかけてしまった、悪いことをした」と、秘書の先生をお叱りになったそうである。私はいよいよ申し訳なく、しかし生徒を気にかけてくださる上代先生にいろいろ懂れた。

合唱団にかけた青春

一九四八（昭和23）年四月、私は日本女子大学附属中学に入学した。日本の敗戦からまだ三年も経っていない頃である。クラスは三年間を通して東組、この間に私の基礎が培われていったと思う。一二歳から欠かさず眺めた建学者の三綱領は「ごく自然に身につくとき、この三つの教えからはずれたことは今もってない」と言い切ることができる。大勢の優秀で善良な級友たちとの付き合いは、絶えることなく七〇年近くも続いている。一九五一年にはそろって附属高校へ進学し、西生田通いが始まった。あまり勉強はしなかったが、手当り次第に本を読んだ。西生田の自然は美しく、とりわけ雪の朝の光景は忘れられない。すでに進みゆく道を決めていた友もあつたが、私はあれもこれもと好奇心を募らせる毎日だった。

一九五四（昭和29）年、新制八回生として日本女子大学文学部国文学科に入学、再び目白のキャンパスに帰ってきた私が、まず行動を起こしたのはコーラス部に入ることだった。新入生歓迎会で歌った四年生の格好よさにつられて、四〇名もの八回生がコーラス部に雪崩れ込んだのである。部室は講堂（現・成瀬記念講堂）の屋根裏にあり、私たちは一日の大半をそこで過ごした。心をこ



コーラス部の仲間と（中央が筆者）

めて歌うことがいかに大切かを教えてくださったのは、指揮者の木下保先生だった。

日本女子大学合唱団の始まりは一九三二（昭和7）年に遡る。当時の校長・井上秀先生のお勧めで合唱団は生まれ、東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）教授、澤崎定

之先生を指揮者にお迎えした。澤崎先生のお供や時に代理で来校されたのが、門下生の木下先生である。澤崎先生亡きあと、木下先生は半世紀にわたって合唱団の指揮者であり指導者だった。「最初に接したほぼ三〇名の部員は技術的には幼稚だったが、文化人としての誇り高い学生たちだった」と、先生は後に述べておられる。さらに「この伝統と教養と気品に満ち、近い将来、立派な社会人になる人々の合唱団には、事情の許す限り蔭の力になりたい」とも記してくださっている。

学外演奏会の実現

合唱団が学外で演奏会をもてるようになったのは一九五六年からだだった。その年、上代たの先生が第六代学長に就任された。それまでにコーラス部員たちは弛まらず練習を重ねていたもので、外部の人々にも聴いてもらいたいという思いは年毎に高まっていた。しかし学校の方針で願いはなかなか叶えられなかった。ところが学生たちの希望はただ素通りしていた訳ではなかった。教授会、桜楓会、学生自治会など、学園全体の協力態勢が徐々に整えられていたのである。

成瀬仁蔵先生生誕百年祭の前年にあたる時期と、上代新学長就任が相俟って、ついに長年の夢が実現した。



第1回演奏会

一九五六年五月三十一日、日本女子大学合唱団第一回演奏会が、神宮外苑の日本青年館で幕を上げたのだ。三年生

だった私は四年生の奮闘を目のあたりに、下働きの仕事を懸命にはたした。上代先生は「学生達は美しい合唱芸術の中に自己を成長させ、更に大きな調和を生み出すことに精進をづけてまいりました」と、第一回のプログラムに書いてくださった。当時の学生新聞によれば、上代先生のお考えの基本は「皆といっしょにやることだった。それは私たちに

とってかけがえのないものだった。みんなと一緒に歩く喜びと充実の時を求め、翌年には日本初演の曲も加えて第二回演奏会を挙行、以来昨二〇一四年までに五九回の定期演奏会が行われている。男声か混声か主流の合唱界に女声に分け入り、まだレパートリーも少ない女声合唱の世界に新しい分野を開拓した、という評価に勇気づけられ意気込みも新たに、営々と歌いつづけた何代にもわたる部員たちの努力の結晶である。現在の部員数は時代の推移につれてぐっと少なくなつた。しかしその澄んだ歌声は変わることがない。

一九六四（昭和39）年には木下先生の還暦を契機に、OG部員が力を合わせて桜楓合唱団を結成、昨年一〇月に発足五〇周年を迎えた。桜楓会専属の合唱団ではないけれど、みんなで名称を考えていると、ごく自然にこの名前が出てきた。桜楓合唱団の指揮者も、一九八二年に逝去されるまで木下先生が務めてくださった。私は草創期を担った一人ではあるが、現在はB会員（サポーター会員）となつて先輩後輩に声援を送っている。

高野悦子さんのこと

人生の転機が訪れて一九七五（昭和50）年の夏、私は岩波ホールのドアを叩き、映画の仕事に携わること

なつた。総支配人の高野悦子さんが母校の先輩と知つたのは、入社してからである。私は運がよかつたのだ。ある日、岩波ホールでばつたりお会いした中谷貞子先生は、私たちを親身になつて守つてくださった合唱団のアドバイザーだった。そして高野さんの学生時代の寮監であり、保証人でもあつた。学外の研究活動で帰りが遅くなる高野さんを、中谷先生はいつも提灯をかざしながら、寮の門前で待つていてくださったという。小柄な中谷先生と長身の高野さん、それに夜更けの提灯の淡い光、まるで映画のワンシーンを見るようだ。こうして同じ恩師をもつ高野さんと私の、二人三脚の長い歩みが始まつた。

岩波ホールの名画発掘上映運動（エキブ・ド・シネマ）も、一九八五（昭和60）年にスタートさせた東京国際女性映画祭も、大学時代の延長のようなものだった。同じ方向をむいて、みんな一緒に脇目もふらずにやるのだ。もつとも、大学の卒業式が終わり、長い行列をつくつて校庭で保護者と共に先生がたにお礼を申し上げたとき、上代先生もクラスリーダーの青木生子先生も、他のどの先生も私を褒めてくださるのはコーラスのことばかりで、学問については何もおっしゃらなかつた。母はすこぶる機嫌が悪かつた。でも仕方がないだろう。私は日本女子大学コーラス部卒業なのだから。

高野さんが他界して二年が経ち、私も長老の域に近づきつつある今、しかし周りを見渡せば母校の後輩たちのなんと多くの女性が活躍していることか。岩波ホールでは中学、高校、大学国文科と私の直系の下級生、二五回生の石井淑子さんが頑張っている。映画界には私が最大の期待を寄せる女性監督が生まれた。住居学科五二回生の石山友美さんである。「成瀬先生の教え、特に「共同奉仕」を刷り込まれたかいがあってか、異様に結束力が強いのが日本女子大生の特徴」と書いた石山さんの文章をみつけた時には思わず笑ってしまったが、全くその通りである。昨年の暮から二カ月余り（小さなホールの物語―高野悦子のシネマライフ―）という素敵な展覧会が、竹中工務店ギャラリーエークワッドで開催された。ギャラリー主任学芸員の岡部三知代さんが、住居学科で学んだ三九回生と知った時の嬉しさもまた一人だった。心のゆきとどいた手づくりの催事だった。六四回生で現在、大学院史学専攻二年目の是恒香琳さんも、私が囑望してやまない一人である。正義感の固まりのような是恒さんは、斬新かつ真つ当なエッセイを女性誌に毎月発表している。

われらが先輩・平塚らいてうは、いっさいの女性運動は平和運動をもって完結する、と述べたスウェーデン

の心理学者エレン・ケイの思想に天啓を受けたという。青木生子先生を製作者にお願いし、（平塚らいてうの記録映画をつくる会）を学内外の女性たちみんなで組織して、「元始、女性は太陽であった 平塚らいてうの生涯」（羽田澄子監督）を完成させたのは二〇〇一（平成13）年九月のことである。製作資金を集めるための事務局は史学科の六回生、山田よし恵さん（故人）のお宅だった。沢山の人々から寄付申し込みの電話がかかってくる。よし恵さんの夫の山田洋次監督が、電話口で応対してくださることもしばしばだった。女性が力強く前進する足音を聴きながら、らいてうは心ひそかに呟く。「よしとえそれが担々と一筋に続く解放の道でなく、どんなに困難に試されることがあろうとも、私は永久に失望しないでしょう」。らいてうの言葉で映画は終わる。上代先生にお目にかけたかったとしみじみ思う。

（一九五八年文学部国文学科卒業 おおたけ ようこ）



Bloom as a leader.

時代を切り拓く卒業生

桜楓会託児所保母主任 丸山千代

山中 裕子

はじめに

忘れられない出会いから、すでに一年半ばかりが過ぎた。

その日、私は本学住居学科の平田京子教授から、卒業指導に当たっている四年生の竹中庸子さんを紹介されることになっていった。やや緊張した面持ちの彼女は、私との面会の主旨を丁寧にご説明した。卒業論文のテーマが「桜楓会¹と日本女子大学が行った関東大震災発生後の救援活動の研究」であること。この救援活動、特に児童救

護所の設営に素早くしかも的確に対応した人物と思われる。桜楓会託児所保母主任丸山千代（明治42年卒業、教育学部六回生）について、是非詳しい話を聞かせて欲しいということであった。

保育のパイオニアとして、かつて桜楓会託児所を背負い社会的に活躍した丸山千代だが、今その名を知る卒業生は少ない。まして学生なら尚更である。だが思いがけず学生の竹中さんから、忘れられたその名を聞かされた。

思えば、ちょうど三〇年前の『桜楓会八十年史』編纂

のため古い資料を漁っていた時に、『家庭週報』(以下「週報」)に掲載されていたのが時代に先駆け、桜楓会が貧民街に開所した託児所のニュース、そして保母主任の丸山千代が拓いた貧しい子供達の託児教育とその現場を綴った「託児所の日記」の記事であった。それらは、私自身の桜楓会に対する評価を根底から覆すきっかけとなり、以後、千代の生き方に無関心でいられなかった。貧民あるいは細民とよばれた人々のために、我を忘れ身を粉にして託児事業に献身した姿を、卒業生に知ってもらいたいと願うようにさえなつた。

細々ではあるが、こうしたある種の使命感をもって千代の足跡を追う私にとつて、一年半前のあの日、竹中さんが示した千代への強い関心は、とりわけ意味深い格別の感慨だった。やがて二〇一四(平成二六)年に完成した卒業論文で、彼女は関東大震災直後の母校や桜楓会の突出した救援活動の陰には、桜楓会託児所での豊富な経験を持つ丸山千代の先導的存在が不可欠であったことを、実証した。数ある千代の功績の中で、新鮮な着眼と成果であったのは言うまでもない。

丸山千代の活動は、前半の桜楓会託児所に勤務した時代と、後半の聲唾教育が中心の福祉事業家としての時代にはば二分され、この移行期において桜楓会や千代が時

代に翻弄された事実を探つてみた。世の中に千代の活躍を紹介した文献は数冊あるが、残念ながら偏つた事実認識のものも散見する。一方、本学社会福祉学科が纏めたものは数点、現存する資料を多く持つ桜楓会は、意外にも皆無にひとしい。このレポートは学内に残る貴重な資料を掘り起こし拾い上げて、特に前半の二〇年余りを桜楓会と共に未踏の道を歩んだ丸山千代の希望と栄光、だが苦節の半生を紹介するものである。

増え続ける貧困層に無策の現実

(略) 彼等の巢窟に入る。殆ど光線も入らざるべき路地長屋は、往々三畳一間に五、六人も住まう有様なり。かなたの家には、髪まばらに、骨と皮ばかりなる老婆むしろの上に寝ねたるかとみれば、手足片輪なる男の、板の間にいざるあり。(略) うすぐらき片隅にうすくまる女、土に這う乳飲み子、泣き声、怒鳴る声、呻き声、鼻をつく臭い、誠に生きながらの地獄なり。(略) 『週報』で紹介された「世のさまざま 貧民窟の半日」は、上野に近い東京市下谷区万年町の貧しい暮らしを綴つたものである。こうした厳しい暮らしは明治末期には市中のあちらこちらにあった。当時の日本は日清、日露両戦争に勝利して富国強兵を掲げ、産業を奨励して一

挙に近代国家を目指した時代だった。貧しい農村から都会へ、職を求めて人々は大都会に集中したが、戦争の不況は失業者を急増し、瞬く間に貧富の格差を生み出したのである。桜楓会は巢窟の惨状を重大な社会問題と捉え、慈善事業の必要性を留岡幸助の話として『週報』に連載するなど、会員の関心を促して対策を模索した。そこまでするなど、貧民救済に力を入れるのには、実は訳があった。

少し時を遡るが、本学創立者の成瀬仁蔵が一八九〇(明治23)年に留学した米国で見聞したものは、この社会的格差が生み出した悲惨な状況を、まさに救済する事業であった。恩師タッカー牧師が設立に関与したアンドーバー・ハウス、シカゴにあるジェーン・アダムスのハル・ハウスなどでは既に救済の慈善事業が行われ、滞米中の成瀬がこうした施設を視察したことは日記からも推測される。留学中の日記に成瀬は、「吾天職、教員にあらず、牧師にあらず、学者にあらず。社会改良者なり。女子教導者なり……」(一八九一年二月二〇日)と書いている。さらに一年後には「吾生涯の目的」を「日本社会を救ふにありとす」とし、その準備として「女子教育、社会改良、結社、貧民救助……」(一八九二年一月一四日)を挙げ、自国の貧困にたいする強い危機意識をもって、ひそかに期する思いを記している。

留学から戻った成瀬の驚くほど精神的な行動は、それから僅か一〇年後の一九〇一(明治34)年の本校創立を實現させた。だが、日本社会の貧困は何も解決されないどころか、野放し状態であった。同窓会とはいえ、社会貢献の使命を自らに課す桜楓会が、もはや待たなしの決断を迫られるほどの惨状だったのである。折しも欧米視察より帰国した井上秀桜楓会幹事長は「家計が苦しくても、手足まといの乳幼児があり、出るに出不らぬ労働者の妻の共稼ぎ」を支援しなければ貧困は解決しないと述べ、社会部の仕事として託児事業に乗り出す決意を固める。そして保母主任の白羽の矢は、突然丸山千代に当たった。その時千代、二五歳。桜楓会も千代も、使命感が先行する不安と覚悟の船出であった。

恵まれた生い立ちから没落へ

丸山千代は一八八七(明治20)年五月二八日、山形県米沢市で生まれた。

父丸山孝一郎と母ほのとの間の六人兄妹の三女であったが、両親が血族結婚だったことから五人姉妹のうち姉まつと妹いとは生まれながらに聾啞の障害を背負っていた。物心付いた頃に、千代は本能的に自身の天職を悟ったようだ。耳の不自由な不幸な姉妹達の杖になると

心に誓い、子どもらしく歌うことも音楽を聴くこともしなかった。たとえ姉妹であつても、決して平等ではない残酷な現実を幼いながらに自覚したのでろうか。後年、幼くして貧困と向き合う子供の世界に身を投じた誘因は、千代自身の重い宿命と無関係ではなかった。

父孝一郎はなかなか進取の氣に富む才人だつたらしく、維新後は欧米の学問を修め教育事業を興し、更に米沢藩直営の米沢製糸機械会社の社長に就任。国会が開設されるや初の議員に選ばれている。千代の斬新な獨創性や時には頑固な指導性は父ゆずりといわれ、それゆえに父は最も千代を信頼し、互いに良き理解者であつたという。ところで、丸山家は代々が米沢藩主上杉家に仕える家臣であつた。千代を良く知る牧賢一の記述に「先生は幼少の時から厳しい父母の膝下で武家の家風である質実剛健、質素儉約、勤勞第一のしつけを受け」たとあり、千代は貧しさにめげぬ辛抱強さを持ち、だが時には贅沢が許される生い立ちであつた。恵まれた家庭、そして後に学んだ日本女子大学校の一流の教育、この双方から千代は何が本物かを学び、その影響は託児所での質の高い教育の実践に繋がつたといえよう。

利発な千代は米沢高等女学校を卒業し、父の勧めもあつて一九〇六（明治39）年に理科系の教育学部を新設

した日本女子大学校に進学する。入学した教育学部第二部（通称博物科）¹³は教員養成を目指した学部で必修科目には生理衛生や心理学があつた。かねてより聲啞教育を目指す千代は特に人体の機能に興味を持ち、入学時から目標を見据えた真剣な勉学の日々であつた。普段は口数が少なく、どちらかといえば無口で人付き合いが苦手な千代が、姉妹のための将来については周囲に熱く語つており、それだけ一途な真剣さが伝わる。上級になると保育教授法、教育学、児童研究の授業が加わり、後に予想もしなかつた保育事業に係わる千代の学問的素地は、この時の勉学にあつたと思われる。

千代の運命を定めたものは、無論不幸な姉妹の存在だったが、他にもう一つ、それは創立者成瀬仁蔵の教育であつた。成瀬が初めて「大学拡張」の言葉を用いて、その何たるかを明確にしたのは、第五回卒業式（明治41年）の告辞である。「卒業は始業である」、まさに今日の生涯学習を先取りした言葉に続けて、次のように語つた。「今後の大学は貴賤貧富の別なく、男女の区別なく、すべての国民に拡大せらるるものである」¹⁴。すなわち「今日まで本校で養い来たりし大学生生活を家庭に、社会に、学校に拡大する事が出来なければ、到底その望みを達する事は出来ぬ」と、授かつた教育を社会に生かす道、実

踐することの大切さを説いた。列席した千代には、殊に身近な問題として心に響いたことだろう。不幸な姉妹に捧げる人生の目標は、社会に向けて拡張されてこそ意義があることを教えられたのだ。中寫邦著『成瀬仁蔵』によれば、「大学拡張の実践の場として託児所を開設した」^{〔16〕}とあり、成瀬はこの時、すでに数年後の託児事業を視野に入れていたのだろうか。その大事な担い手になるうとは思ひもなかった千代、二年生の春である。

翌一九〇九（明治42）年、女子教育の重みと希望を抱いて千代は六回生として卒業した。級友大橋広^{〔17〕}が勧める一般小学校での経験が必要との忠告に従い、逸る気持ちを抑えて逗子小学校に奉職した。しかし僅か三ヶ月で腎臓病を患い、やむなく米沢に戻る。この疾患は持病となつて千代を悩ませた。



丸山千代（1909年）

やがて癒えた千代は、父が社長^{〔18〕}の米沢製糸機械会社に働く女工二五〇余名の、取締役としての再就職する。

一九一一（明治四四）年の『桜楓会通信』^{〔19〕}三八号に掲載された千代の手記は、無知と貧困の中で育ち、過酷な労働に従事する女工達と進んで寝食を共にし、その生活改善に取り組む自らの姿を綴っている。人間らしい「同情心、公德心」に欠ける彼女達の精神面に気を配り、「夜でも都合のつく限り、部屋に招いて雑談の内に種々な教育を試み」、その結果「有志相集つて夜学を開き、且つ雑誌（少女世界、婦女界、家庭）を喜んで読みます」と、大学拡張の教えを早くも実践した自信を覗かせる。この体験は後の託児教育の貴重な下地となり、原点でもあった。

それから数年後、千代の身の上に思いがけない運命が訪れる。それは政治家として多忙な父の突然の死であった。そして思わぬ借金が丸山家に残った。父と意見が合わない兄はすでに家を離れ、母と姉妹三人の面倒と家計の重荷は若い千代の双肩にかかった。恵まれた人生が一転、住む家もない没落の境遇に千代自身が身を置くことになる。

折も折、どん底の千代の許に届いたのが、桜楓会託児所主任の要請だった。聲啞事業の希望を捨てきれない千代は、辞退を決定して米沢から上京するが、幹事長井上秀や大橋広の再三の説得に抗しきれず、やむなく受諾す

る。託児教育も聾啞教育も共に社会の弱者救済であることが、千代を納得させたのだろうか。年号が変わった大正元年一月、千代は単身上京して直ちに場所選定などの任務に就き、目白幼稚園でオルガンの練習や千代紙の折り方などを教わり、そして慌しく迎えた託児所の開所であった。

貧民街にできた桜楓会託児所

時は一九一三（大正二）年六月二十七日、場所は小石川区久堅町八九番地にある氷川下細民部落の庭つき長屋一軒（六畳二間、四畳、三畳）の借家が、初の桜楓会託児所であった。主任丸山千代、助手一名を保母として設備も人手も未だ不十分なスタートであった。

開所当時の主な規則を要約すると、

- 1) 当所は桜楓会が監督し、子供が手まといの為に働くことの出来ぬ人々の子供を預かり、お守をして上げる所です。
- 2) 預かる子どもの数は、当分の内二〇人を限りとします。
- 3) 預かる子どもの年齢は、満二歳以上六歳以下とします。
- 4) 預かる時間は毎日夏は朝六時、冬は朝七時から。

夕方は夏冬共に六時まで。

5) 毎月一日と一五日は休み。外に盆と正月が休みです。

6) 預ける時は、連れてくる人が金一錢五厘とお弁当を持ってくること。当所は此の内五厘を児童の貯金にして他を「おやつ」代とします。

7) 子供を頼んでいる人の為に毎月一回一日に会を開くので、成るべく出てくること。

千代は「託児所の日記」〔週報〕二二二一（号）に開所の日の様子を次のように書いた。

「この様な有難い事はありません、これからは助かります、一錢五厘持つて参りましたが外にいくら程……」「いいえこの外にはありません」と答えると内儀さん達はさもさも不思議な人助けとでも感じたらしく互いに顔見合わせる。（略）どうぞお頼み申しますと丁寧に挨拶して内儀さん達は帰って行った。さあ、子供等は泣くわ泣くわ。中にも体格の弱そうな子供は尚更母親の後を慕って止まない。（略）二、三の子は数時間殆ど泣き通しであった。

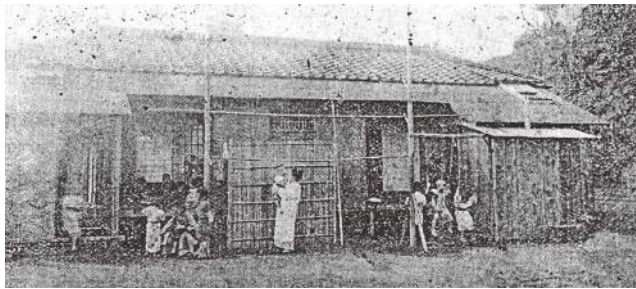
当時、全国の公営託児所はゼロ、私営でも二五ヶ所程で、この種の事業は日本に於いては未だ稀であったばかりか、注目すべきは規則1が示す、開所当初から女性の

就労支援を目的の第一に据えた点にあった。そこには成瀬が目指した家庭改良から社会改良への明確な展望があり、単なる一時的子守り託児とは違う教育的構想は、開所早々から世間の期待とその行方に関心が寄せられたのである。²²²規則6のおやつ代一銭は当時でも破格に安く、その日暮らしの親が買いい食いする子供に毎日与えていた五〜六銭より少額となり、無料で等しい託児所に母親達は大喜び、まずまずのスタートであった。

手探りの日々が始まる。まず銭湯など減多に行けない子供達の汚い手足を洗って家に入れ、毛虱が一杯のボサボサの髪をすき、耳垂れの膿を拭き、トラホームや腫れ物に薬を塗ってやるのが日課となる。子供達は生まれてから絵を描いたことがなく、一般の子が好むお絵かきや唱歌に興味を示すのは数人、赤色以外の色も知らない。障子の棧によじ登り、ハダシのまま家にながり、下水にわざと足を入れたり、ボートラをしゃくつて口に入れようとす。粗相の始末と汚れた衣類の洗濯に掛かりきりの日もあった。が、千代は忙しい合間も日記を書き綴っている。次に掲げるのは、その中の一文である（『週報』第三八一号）。

「秀ちゃん、元禄の着物はどうしたのと言うと、あのね、父さんが雨が降っているのでお金儲けて来ないのよ。元

禄の袂の着物はね、お倉に入っているの。アタイのおべべはこれきりなの、と言って毎日汗と垢ににじんだなりで来る」。また、病気の夫を抱え子連れで行商する母は、とうとう田舎に戻る決心をし、「：何とお礼を申し上げて



小石川区久堅町の託児所（1913年）

よろしいか、決してこのご恩はわすれませんが、と二円五〇銭の貯金を手にして、五厘ずつのが、まあ、こんなに沢山になりましたのですか」と信じられない様子。着替えもない境遇に「：さぞ肩身がせまいだろう。弟嫁からなんと言われるだろうと想像するさえ悲しい」とその行く末を案じ、託児規則の日々の貯金が一家の困窮に役立った、と記した。こうした事業の成果を報告するのには、次のような事情が推察される。

つまり、この託児事業は貧困に喘ぐ人々のための急務であり、事業者である桜楓会の年間予算の他に多くの同情と寄付を授かることが初動時から頼みの綱であった。千代は小まめに日記を投稿し、託児所の様子を報告して感謝すると共に、さらなる協力を仰いでいる。『週報』だけでも五〇余編を数え、多忙な千代の熱意と努力が窺える。また寄付依頼の記事が頻繁に載る一方で、金品寄贈者の芳名一覧も併せて紙上や総会議事録に掲載されている。大口の篤志家三井寿天子^{（三）}やその他大勢の桜楓会員・支部・回生などが定期的に支援、また大人に混じって、寮生や附属の生徒達のカンパが度々散見される。奉仕の精神は本校の教育には顕著にあり、学園一丸の支えが不可欠な事業だという事を、千代自身が一番認識していたのである。

開所から一年、「母校の製菓部^{（四）}から送って頂いた甘いパンの屑を子供達は珍しげにおいしい、おいしいとって頂く。甘いよ、先生も食べてご覧と無理に口に入れてくれる」。お昼になると「姉さん兄さん達は豆まめしく、ご飯の世話をしてくれる。あたし独りでとけたの、と自慢しながら（お弁当の）風呂敷とる子が段々多くなるのが楽しみである」。千代と幼子のほほえましい情景、だが千代の嫉はなかなか厳しかった。自分の事は自分でや

る習慣を付けさせるためには、下働きのおばさんの手助けを抑え、独りで出来るまで心を鬼に見守った。この頃の日記には、独身で育児経験のない千代が、幼子のあどけないしぐさや優しい気持ちに和まされ、日増しに愛おしさが深まる様子が、行間から溢れている。

思いきってモンテッソリ式保育法を導入

子ども達は心身共に見違えるように活き活きとしてよい子になった。千代は「仲間に同情したり人になついたりする処は普通家庭の子どもよりも勝っておりますから、教育の致し方でどんなよい人にもする事が出来るだろうと信じます」と、豊明幼稚園が取り入れたモンテッソリ式保育法^{（五）}を開所僅か一年で始める。画期的保育法を日本で最初に導入した託児所として世間の注目を浴び、その功績は高くそして永く評価された。

この導入には武市綾子^{（六）}の助言と協力が欠かせなかった。二人は共に教育法を熱心に研究していたことから、積極的に取り組む。一九一四（大正三）年七月、広岡郁子より二五円のモンテッソリ教具一式が寄贈された。だが知識や感情表現において「貧兒と中流社会の児童との相違」が危惧され、未知の挑戦への不安は拭えなかった、と武市は記す。結果は「貧兒が特別に欠陥がある点や特



モンテッソリ教具の応用 (1914年)

別に発達している点を見出すこと」は出来なかったが、「独立心が習慣的にできている」ことに気付く。放任され他に依存するものがないための遅しさをだるうが、一方でこの子達が規則正しく教育法のプログラムを持統できるかが懸念された。しかし「心配は徒勞に過ぎなかった」

ばかりか、一般と比較して「倍ないし二倍の長時間の作業に従事して、猶興味の尽きぬ有様」であった。この経験は、千代に貧しくとも子供に本性の違いがないことを確信させ、一般幼児並の教育をスタートするきっかけとなった。後年知能検査も行い、可能性への期待はさらに増大する。

一九一四(大正3)年九月一四日、突然の水害に襲われた。近くの川が氾濫、千代は啾嗟

に託児所を避難民に開放して芋や着替えを提供した。一方悪臭の汚水の中を託児の安否を尋ね、みやげのビスケットを持って尋ね歩いた。千代の捨て身の行動は称赞と共にたちまち遠方にも広がり、生活困窮者からの入所申込みが絶えない状況が続く。

桜楓会は託児所の増設を迫られ、井上幹事長は未だ財政的な不足、不備の中で一時は会の基本金を借用する覚悟をしたと明かす。その矢先「昭憲皇太后陛下の諒闇に際し、御大葬に使用された代々木葬場殿の一部を御下賜の恩命に接したので、畏れ多いことながらこれを託児所に使用する事となり、東京府下巢鴨宮下町1602番地に建築する事となった」⁽⁴⁾。が、改築費は難しい。桜楓会は「慈善事業とは言え、いつ迄か社会の同情者の寄付にばかり俟つことはわが会の本意とする処ではありませぬ」⁽⁵⁾、何故なら「わが会が経験にも経済にも乏しい力を割いてこの託児所事業を経営したのも、この救いの泉を求むる人々が日々に多く、日々に生い立って行く次代の国民がその生活の苦しい為にあたらそこなわれて行くのを見逃すことが出来なかつた為であります」^(3,2)との決意を示し、会員の善意を仰ぐ。そこで開かれた慈善音楽会は錚々たる一流の洋楽、邦楽の演奏家を招いて一九一四(大正三)年一二月一二、一三日の両日、上野の奏楽堂で盛

大に挙行された。成功を実感した成瀬は次の巻頭言「希望ある門出」を『週報』二九九号に寄せている。

(略) この催しが動機となつて、従来の託児所が発展するばかりでなく、今後、將に我が国に必要となるべき労働者児童教育、及びその家庭改善の事業が益々擴張せられて、そこに桜楓会の大なる使命が全うせられることと、(略)益々こういう事業に興味を向けられて、その発展を助力せられんことを希望するのである。
(略)

精力的な活動を近隣にも拡大

新築の桜楓会巢鴨託児所は府下北豊島郡巢鴨字宮下町一六〇二番地の長屋部落に完成した。一九一五(大正4)年五月三〇日のことである。借地一三〇坪に六三坪の建物、建材は総て御下賜の用材が使われ、工費は先の音楽会の収益を当て、会は自力で用意することができた。この年、東京府より恩賜金が下付され(以後継続)、初めて公に認められたことで事業に弾みがついたのはいうまでもない。定員は二〇人から八〇人に増えていった。そんなある日の光景を日記から紹介しよう(『週報』第三四九号)。国ちゃんの兄ちゃんは弟を託児所に送り届けてから、一度帰つてまた戻つてきた。



巢鴨託児所 (1919年)

(略) 兄ちゃんはわかめのような着物を着てブランコに捕まってニコニコしている。「何故学校休むの」と聞くと唯笑っている。母が死んだ後は着物の手入れをしてくれる人がない。(略) ついこの間大橋様から頂いた袖なしのちゃんちゃん、大急ぎで呼んで下のボロボロをからげて上に着せた。(略) 兄さんは俄かに威勢が出た。さあ、学校へいらっしやい、なまけるとあなたの好きな軍人になれませんよ、と言つて聞かせるど、反り身になつて走つて行く。

兄ちゃんのように学校に行かずにはぶらぶらしている

子、兄弟の子守りで学校に行けない子、家のために働かされている子、こうした未就学児の増加を肌で感じる日常に、千代は託児の兄弟も、その友達も、いや貧しい子総ての未来を気遣うようになる。それは紛れもなく母親の目線である。果たして活動は次第に託児所以外にも、豊かな広がりをもせ始める。

子供達は唱歌や遊戯を上手に披露し、「コドモ会」には近所の友達を招待するようになる。千代は「親の会」を作り、衛生的で健康な生活指導をする一方、医師による健康相談、週二回の入浴、寄贈のミシンを使った簡易服の縫製など、親代わりの助力を惜しまない。身の上相談や代筆も引き受けた。さらに公開講座を開き、理学博士を招いてハエが媒介する伝染病チフスの予防を指導し、またある時は逋信省の役人による「簡易保険の話」を聞かせ、自前で用意した貯金箱を銘々に渡して貯蓄の大切さを教えた。こうした教育的指導の他に、娯楽に乏しい人々に健全な楽しみも提供している。例えばそれは活動写真の上映会やクリスマス会だったり、また会員からの寄贈本を親達に夜間貸し出す、読書倶楽部の開設であったりした。格安の古着バザーは人々をこざっぱりした身なりに変え、評判を聞いた近隣住民は託児所の催しに積極的に参加するようになる。

こうした付帯事業は託児家庭だけに止まらない、周囲の貧困層にも波及する隣保事業に発展拡大し、千代は独創的な発想を次々に具体化していく。人々に寄り添う積極的な活動はやがて行政の知るところとなり、新設の東京府慈善事業協会から千代は「保育分科会の主査^{（主査）}」に任命された。一步も二歩も先んじた民間の事業従事者としての重用は、託児事業への高い評価の証だった。国は貧民対策にやっと着手し始めたのである。

一九一七（大正六）年一〇月一日、東京を襲った有名な大暴風雨は死者・行方不明合わせて一二〇〇名の惨事であった。桜楓会は東京府慈善協会に協力して深川など四ヶ所の罹災地に臨時託児所を設置した。三年前の洪水で活躍をした千代は直ちに救援の指揮を任せられ、会は奉仕と金品の寄付を呼びかけた。この素早い行動は世論を喚起して、中央省庁の厚い信頼を確実なものにしたのである。託児所の要望が益々高まる中、桜楓会は第二託児所建設に踏み切った。東京府は臨時の助成金の他に多額の補助金を、内務省からは奨励金（以後継続）が支給され、一方会や地方支部は著名なピアノスト久野久子の慈善音楽会などを開催し、学内外が一体の協力体制で臨んだ。が、託児事業に大いなる希望と期待を抱いていた成瀬は、着々と準備が進む一九一九（大正八）年三月四日、

完成を待たずついに永眠。貧困下に生きる人々の明日を、娘達に託して旅立った。

慈善事業の理想と現実

明けて一九二〇（大正9）年一月六日、桜楓会第二託児所として府下日暮里元金杉下り一五九二番地に日暮里託児所が完成した。東京府慈善協会が救済事業で建設した日暮里の長屋式小住宅の一角、二一三坪を優先的に借り受けた。巨額の建築費をかけた六六坪の理想的な建物に見学者は絶えず、実際全国でも四指に入る優れた託児所の一つに数えられた。幸いにも、隣保事業を行う公共の愛隣館が近くにあり、図らずも経費の軽減に繋がり、千代は両所の主任を兼務した。

翌一九二一（大正10）年九月、開校時の成瀬案が「時期尚早」として退けられた社会事業学部は、その遺志を継いだ第二代校長麻生正蔵の手で創設が実現した。託児所は学生の實習の現場となり、児童保全科卒業生は後に派遣されて就職し千代を助け、以後保育の世界で保母として活躍した者は多い。

同じく一〇月、巢鴨託児所内に東京支部と新卒の一八回生が協力して桜楓女子夜学校が開校する。これは桜楓会の年度目標である「児童問題」研究について、東京支



日暮里小住宅開所式の日（1920年1月26日）



建設中の日暮里託児所（1919年10月）

部が貧児は障害児と同じ特殊児童であり、特別の救済が必要であると結論。そこで、辛い労働を強いられる女工や女中奉公の少女達に、教養の場を与えたいとして実現に漕ぎつけたのである。翌年の三月には託児所出身者に中学志願者一名、女学校志願者二名、そして夜学校入学者数名を出し、開校に向け中心的役割を果たした千代は「託児所を出てからも指導し、一人前になるまで見届けねば、託児所の働きも徹底しない」と、生涯学習を視野に新たな意欲をみせる。だが理想に対して現実は厳しく、揺れる心境が窺える千代の記述がある。

(略) 数年前はただ美しき精神的情緒のもとに、給料など元より眼中になく、しかも一人半前も二人前も朝から夜まで黙々として従事してきた者も、やはりその使命を全うするには研究も必要、休養も相当にし、しこうして精神的食餌も取らねばならぬ。(略) これらの自分の生活と研究と仕事と、この三つの調和を計るには、自然、人を増やさねばならぬ。(略) この問題を、これからの保育経営者は如何取り扱うべきだろうか。

(略)

これは一九二一(大正10)年一月号の『幼児教育』に掲載された「託児所の実際」の一部で、慈善事業の現状と心身の行き詰まり、その対策を「単に、従事者の自ら開拓せねばならぬとは言うものの、社会の世論によって、一層、適切に解決せられねばならぬ」と指摘。活動に意欲的であればあるほど経営難に陥る慈善事業への、事実上の警鐘である。もはや善意や同情だけでは解決不能な現実を厳しく捉え、社会事業で欧米に遅れた日本の行政が、現場の千代たちに粉骨碎身を押し付けている現状、その事実をきわめて印象付けるレポートといえる。

いつも髪を無造作にひっ詰め、質素な木綿の着物姿で篤志家を訪ねて金策に苦勞する千代には、その飾らぬひたむきな人柄に魅せられた、多くの善意の支えがあり、

なかでも西園寺新子は強力な賛同者であった。本校評議員であり公爵西園寺公望を父に持ち、五歳で佛英和女学校の寄宿舎に入り、後に本校附属高女に転入、聡明な近代女性として期待された。彼女は託児事業を深く理解して物心両面で惜しみない支援をした篤志家の一人でもある。六人の子供と共にしばしば託児所を訪れ、一九一九(大正8)年のクリスマス会には、父公望に同行した欧州視察の疲勞もあつて体調不良のところ、風邪を引いた長女に代わって楽しい余興を用意してみんなを喜ばせた。それから僅か二週間後、風邪から肺炎を併発、帰らぬ人となった。享年三四、『週報』五四九号は三ページを追悼号に割り、千代は手記「託児所の慈母」を綴って衝撃の喪失感に涙した。師成瀬を失い、今また最大の理解者を亡くし、敬愛する二人の死は、千代にとって深い絶望と苦難の前兆にも思えたことだろう。果して、厳しい試練の時代が待ち受けていた。

関東大震災後の託児所

一九二三(大正12)年九月一日、関東大地震が東京を直撃。千代は急ぎ巣鴨託児所に駆けつけ子供達の安否を確認。発生から四日目にやっと日暮里に辿り着く。被害が大きい建物は避難民で溢れ、直ちに子供達の消息を尋

ね歩く。一方発生から一九日目に桜楓会は、東京市に協力して上野の山に児童救護所を設営。昨年本誌で発表された未発表資料「震災善後録」によれば、「井上氏、出野氏、丸山氏は市の社会局へ救護事業の打ち合わせに出向」と記され、会役員と行動を共にする千代の姿があった。体験を買われ、大いに活躍した事実は、先の竹中さんが卒論で明らかにしている。

千代の日記「震災後の託児所」に、こんな記述がある。「実に此の度深く感じたのは、役所に婦人が入っておつたらと思つてあります。親切な手もつと早く行き渡つておつたらと思つてあります」。鋭いこの指摘に耳を傾けた役人が、いただろうか。女性蔑視の社会への厳しい眼差しは、男性に負けない能力で行動する千代の意見だからこそ、価値がある。大胆な行動に比べてはにかみ屋といわれた千代がみせた的確な批判は、とりわけ頼もしく思えるのである。

暫くの間、千代は親を失くした幼児を託児所に引き取り、不眠不休の日々を過ごす。やがて近隣の強い希望で巣鴨託児所は何とか託児を再開する。働き手の長屋の母親達にとつて、今や託児所は家計を支える必要不可欠な存在となり、本格的な復興修理が急がれた。

震災の翌年、大掛かりな修理が終わつた日暮里託児所

が再開する。その次の年には新たに隣接した土地一〇八坪を借入した巣鴨の増改築一一一坪が完成した。巨額の費用捻出のために会は後援音楽会をはじめ映画会、舞踏会（日舞と邦楽の昼夜公演）を次々に主催し、他に宮内省など政府機関の援助にも助けられて以前にも増して快適な建物が完成した。とはいえ、震災の物価高騰で、累積赤字が続く中での土地借入の理由は何だつたのだろう。完成後の巣鴨の付帯事業が以前より一段と活発化したことからみて、おそらく隣保事業の拡充を視野に入れた計画だつたと思われる。

震災で入学希望者が激減して一時閉鎖した桜楓女子夜学校は、少女だけでなく広く勤労男女のための桜楓会巣鴨夜学校として、震災から二年後の一九二五（大正14）年に所内で再開した。主任に内務省社会局の牧賢一を迎え、教師には大学の若手の先生ほか、常に三〇〜四〇名のボランティア学生が協力し、働く若者に学ぶ場が与えられた。かつて成瀬は学寮で働く少女達に「夜学会」を作つて提供したが、その理念が時を経て形を変え、所内に継承されたのは意義深い。

付帯から隣保事業、そしてセツルメントへ

千代は、就学した託児のために復習会を開き、日曜学校を作つて開放し、あらゆる対象を貧しい地域住民に拡大して隣保事業を展開していく。激務に伴い千代の許には支援の青年達が集まつてきた。東京帝大、慶大、早大、東洋大、美大、日女大など多くの学生ボランティアは子供達や夜学生の面倒を引き受け、また、かつて世話になつた託児所出身の若者達、夜学校在学の労働者までが、千代の「信念に溢れた捨て身の活動に魅せられ、鞭撻されて情熱的に働いた」^{38,39}。

帝大生の中原賢治³⁹が中心の復習会は多い時は九〇名近くが参加した。勉強以外にも明治神宮、戸山ヶ原、植物園等に度々遠足を行い、また「野村はな子氏より蓄音機とレコードの寄贈を受け」、託児所は最高に居心地の良い棲家となり、地域を中心ともなつた。千代は「みんな託児所を我が家のように親しみ、懐かしがつております」と桜楓会総会で報告するが、実際に子供達の中には「不良性のもの変態性のもも入つて来て凶暴に近い位に暴れ廻り、喧嘩は絶えず、器具や硝子は壊す」有様でもあつた。が、どんな時も、誰にでも「何とかしてやらねばならぬ」と一心の千代は、手が掛かる暴れん坊の子供達を見ずてなかつた。「先生方には毎晩が涙と闘い」であり「挫

けんとする心を鞭うつて祈つており」、なかでも環境がそうさせる「いけない子ほど可愛いものです」と心の内も覗かせ、「おもいがけない魂のみりを見聞きする時には、託児所の経費不足という苦いことも忘れる程」とひたすら子供の成長だけを信じている。⁴⁰

こうした巢鴨の隣保事業は、前述した市営隣保館が近くにある日暮里とは違い、近隣の貧困層を丸抱えする、それだけ忍耐力と資金を要する活動だった。しかし学生や働く若者の真摯な奉仕に支えられ、彼らを中心に地域のための本格的なセツルメントの体制を整えていったのである。後述する巢鴨託児所の理不尽な閉鎖は、あるいは彼らの活発な行動が誘発したのだろうか。治安維持法の発令による、当時の極めて厳しい思想取締りが、実は気付かぬ内に忍び寄つていたのだろうか。だが、それが間もなく現実となる日を、誰が予想しただろう。

震災から四年目のある日、二〇坪の災害用簡易組立式ハウスが篤志家から寄贈された。日暮里の改築、巢鴨の増築に多額の出費が高んだ桜楓会は設営費を出す余裕がなく、そこで学生や若者達は僅かな所持金を出し合い、七百円余の借財と寄付を調達して多摩川縁にキャンプ小屋を建て「西窓洞」と名付けた。別荘のような憩いの家の完成は、みんなの心に家族以上の連帯感を育み、同時

に計画の成功は自ら切り拓くことの大切さを教え、堅い結末の親睦会「西窓会」の誕生に繋がった。やがて組織化された「西窓会」は、託児所での附帯事業に「自己の生命を見出してよき働きをしたい」と願う、意欲的な集合体に成長する。

一九二八（昭和3）年四月六日付の『週報』は驚きをもって報じた。東京市社会局が市営の大塚託児所建設の土地決定を、近接した巢鴨託児所に極秘にした上、局長以下の真相説明がいずれも曖昧な責任逃れであった事実、そして一方的な市からの通告で桜楓会が託児事業の変更を余儀なくされる上に、事実無根の「損害賠償なし補償」の要求があつたとされた事実、さらに日刊紙に「誇大なる誤謬の記事が掲載された為に」会の名譽が傷つけられた事実、これら一年余りの市当局との交渉を『週報』九三一号は一頁を割いて詳細に報告し、会員の公正な理解を求めた。

（略）同一地区内に公私重複してこれを設くるが如きは、市経済の上から申しましたが、また、社会政策の上から申しましたが、的を逸したものであり、単に、桜楓会託児所一箇の問題ではなく、今後、広く一般民間社会事業に関すること、すこぶる大なるものある（略）

と国策にもたじろがぬ異例の抗議文である。直ちに会は善後策を講じたが、市の回答はのらりくらりと定まらず、やむなく提示した「職業婦人の寄宿舎」の譲歩案も宙に浮いたまま進展せず、次第に閉鎖に追い込まれていく。

上記の日刊紙の事実無根や誤謬の記事は、一九二八（昭和3）年三月一日付の東京朝日新聞や東京日日新聞など各紙が一齐に掲載した。主な見出しは「一度も使用されず 建腐れの大塚託児所 桜楓会からの文句に恐れをなして」井上女史の一にらみに 大弱りの不開の家「七萬円の託児場を 開放して立腐れに 女子大学の井上秀子女史に脅され」等、市当局の計画ミスの攻撃先がいつの間にか桜楓会に向けられている。記事の内容は「若し大塚託児所を開所するなら損害賠償を要求する、とまで開き直る始末に、…相手は女であると持て余し」、「桜楓会の如き営利的に経営せるものに何の遠慮を要するぞ、寧ろ挑戦して開所すべし、との強硬論が盛ん」等々。会の慈善事業を営利的経営と誤認するような、お粗末な市予算委員会だったようだ。

一方事情を知った託児所内の「西窓会」に集う青年達、そして近隣の親達からは閉鎖に反対する猛烈な抗議と嘆願が桜楓会に寄せられた。存続を希望する彼等は、会が成り行き不透明な現状を考慮して一時中止した夜学校の

生徒募集を再開、現場の千代は当然両者の板ばさみに
なった。「千代先生は、桜楓会側からは完国奴かの如き
非難と叱責を受け」たとの牧の記述もあり、千代の苦悩
の程はいかばかりか。無償で働く青年達が掲げる学問の
一灯を、決して消す訳にいかないとの思いに加えて、若
者の一途な真情は千代を一層奮い立たせたのだろう。非
難にも中傷にもたじろがず、千代は総会で彼等の熱意を
懸命に説明して理解を求めた。その後「西窓会」の青年
達からは、託児事業と既に生徒を募集した夜学校の事業
をそのまま引き継ぎたい旨の強い要望があり、会は事情
やむなしとして翌一九二九年二月まで、建物の無償貸与
を誓約した。が、さらなる延期申し入れがあり折衝は困
難を極め、混迷が続いた。

波紋を投げた巣鴨第一託児所の閉鎖

一九二九（昭和4）年四月一二日の第二六回総会は、
巣鴨託児所をすでに前年七月末日をもって閉鎖した、と
報告した。建物使用の代替案が示されないままの突然の
閉鎖であった。「西窓会」との交渉の行方についての説
明も要領を得ず、「いづれ決定の上御通信申し上げ度く」
の言葉で報告を終えている。一九四二（昭和17）年に刊
行された『日本女子大学校四拾年史』には「昭和三年巢

鴨第一託児所に近接して東京市設託児所が設置される事
になったので、当託児所はその目的を変更し、専ら職業
婦人の寄宿舎として指導に当たる事として、一時閉鎖し、
日暮里第二託児所に合併」とある。

閉鎖後の千代は一九三三（昭和8）年に引退するまで
日暮里託児所の保母主任を引き続き務めた。引退に際し
桜楓会は「一時閉鎖中の巣鴨旧託児所と金一封を贈った」
と発表したが、一九二八（昭和3）年から五年間も閉鎖
中とは、俄かに信じ難い。そこで、昭和八年当時の『週
報』（第一一八二号、六月一六日）を丹念に読むと、興
味深い事実が浮かんできた。千代が六月七日の送別会席
上で贈呈された巣鴨の建物は間違いなく「一時閉鎖中の
もの」だと但し書きが添えられている。ところが、千代
は引退にあたり「巣鴨に於ける現在西窓学園が社会事業
を営みつつあります旧桜楓会託児所の建物を頂戴致すこ
とになりました（傍点筆者）」との挨拶状を各方面に出
しており、建物が閉鎖中でないのは明白である。さらに
その挨拶状は、牧によって翌七月の一般誌に公表され、
半ば公然の事実となった。建物使用を巡る両者には事実
上の大きな差異があるのが判明したのである。どちらが
正しいのか、その答えは思いがけなく明かされた。

一九五七（昭和32）年に本学から刊行された『社会福

社」第四集に、巢鴨託児所閉鎖後「：地元の要求に応え、千代氏は中原氏やその他学生と共に桜楓会に運動し、麻生第二代校長の理解を経て一切の事業を継続し西窓学園と名づけた」とする井上秀桜楓会理事長談話がそれである。なぜ真相が永く語られなかったのか。

理由の一つは、総会で売国奴呼ばわりされたこともある千代への、一部桜楓会内部の批判を避ける必要があったと推察される。それというのも千代は物欲に淡泊で経理に頓着がなく、熱烈な支持者がいる一方で、事業を思いつきで拡大し、桜楓会の財政まで圧迫して、遂には若者たちの言いなりになり、屋台を乗っ取られた、との批判もあった事は想像に難くない。

社会事業部を開設した校長麻生は、千代の業績を高く評価していたに違いないが、当時は成瀬の遺言である総合大学の新設に心血を注いでいた。多額の募金は不況にもかかわらず卒業生の熱意で達成されたが、逆に託児所への関心は薄れていった。苦境の千代を気遣う麻生の気持ちは温情となり、千代による個人的な西窓学園経営を認めた上で、その事実を公表しない事が内外に余計な刺激を与えないとする判断があったのではないか。孫の麻生誠氏によれば、祖父は恩師新島襄に似て、思想問題で官憲に追われている学生を自宅に入れて共に生きる道を

話し合うような熱血教育者だったと、いみじくも語っている。

推察される理由の二つ目は、一九二五（大正14）年に公布された治安維持法や一九二八（昭和3）年の特別高等警察機関（特高）の新設に代表される不気味な力の存在である。同じ昭和三年には東京女子大生六人が秘密結社員と目され取り調べを受ける事件があり、力の制裁は学生にまで及んでいる。特にロシア革命による労働者階級の台頭で、学生や夜学校の勤労青年達が多く出入りする巢鴨託児所は、危険分子の温床と誤解され、当局にマークされたとしても不思議ではない。西窓学園でも千代を補佐した主事の牧は「帝大セツルメントなどと共に社会運動と赤色弾圧の旋風に流される」体験をしたという。^{（4）}思想取締りを強化する国策が、東京市営の託児所建設に便乗して、巢鴨託児所の閉鎖を画策したのではないか、という疑念が生じる。そう考えると好意的だった市社会局のまるで掌を返したような不誠実、不明瞭な先の対応の説明がつくし、『週報』が交渉の行方を記事にできなかったことの説明もつく。

最後にもう一つ、井上談話では閉鎖の原因を「経済的運営が成り立たなかったといわれる」としている。確かに託児所は累積赤字を抱えていたが、一方の母体である

桜楓会は一九二〇（大正9）年に「社団法人」格を取得、会計士を置く健全な事業体であったことは、現存する総会の収支報告書や出納帳からも判然とする。従って託児事業が破綻を視野に入れる程危機的だったとは考え難い。他方、牧の記述によれば「詳しいことを云うのは憚るが、昭和三年、桜楓会が種々な内部理由によって巢鴨託児所の閉鎖を宣言した」とあり、先に述べた会内部の一部千代批判も含め、種々の理由があった、にもかかわらず全てが経営難に集約されて今日の通説となつている。金融恐慌の世に経営難は、誰もが容易に納得できる理由だったに違いない。

様々な内部事情に揺れる中、桜楓会は信頼する千代と学生達に運営を一任することで託児事業の継続を図つた。すでに閉鎖から八七年、混沌とした記録を透かして見えてきたのは、荒々しい時代の潮流に巻き込まれた託児事業の存続を第一にした苦渋の決断のために、真実が語れなかった時代の怖さである。

報道「孤老、スラムの母」の叙勲

「心身共に疲れたから暫く休養の時を与えられたい」との千代の日暮里託児所主任引退を報じたのは、一九三三（昭和8）年の「丸山千代子さんに感謝しましょう」⁽⁴⁵⁾

の記事であった。「去りゆく姉を惜しむ者はひとりわが桜楓会のみではなく、二十年間姉を慈母と仰いだ労働まちのおかみさん達、そして姉に育てられた沢山の兄妹達であろう」とその献身に対し、桜楓会は先の記述の通り元巢鴨託児所の建物と金一封を贈り、永年の功績に深謝した。苦楽を共にした母も聲啞の姉もすでにこの世を去り、四六歳になった千代は、残った妹いとのために「ろうあ婦人の家」をその後創設し、障害者の職業教育にも取り組むが、経営は常に苦しかったという。そして第二次世界大戦は千代の夢を容赦なく打ち碎き、学園は一九四五（昭和20）年、戦火により日暮里託児所と共に焼失。幸い難を逃れた千代は、数名の聲啞女性を連れて故郷の米沢に帰る。が、すでに安心して身を寄せる所はなく敗戦の一年後に焦土の東京に戻る。

悲願の学園再興を期して縁者を尋ねまわる日々、ある日訪問先で意識を失って倒れ、社会福祉施設「浴風園」に入園。そして七七歳になった一九六四（昭和39）年に勳五等宝冠章を授与された。一月三日付朝日新聞は、叙勲の喜びを病床で語る千代を「孤老、スラムの母」の見出しで紹介した。私財を投じて社会事業に尽くした千代が、今は生活保護の医療扶助を受け「大部屋のベッドに起き上がるのがやっと」の不遇な身である、との報



叙勲の日（1964年11月3日）『社会福祉』No.15より転載

道は社会にショックを与えた。

手許に荣誉ある叙勲の日の写真がある。病とはいえ車椅子の千代の顔に笑顔はない。喜びの表情も窺えない。そのこわばった不屈の面差しは、一体何を語ろうとしたのだろうか。それから僅か三年後の一九六七（昭和四二）年四月一二日、朝日新聞夕刊の訃報記事は「丸山ちよさん、元社会事業家、十一日午後六時四十分、杉並区浴風園病院で肝硬変のため死去、七九歳」と伝えた。敬慕するミス・フィリップス⁽⁴⁶⁾の影響で、困難に直面した時は必ず祈りに救いを求めてきた千代は、在園中にカンリック⁽⁴⁷⁾に入信した。告別式は神父の司式により好きだった賛美歌が流れるなか、多くの教え子に見守られ、妹いとが眠る多摩霊園に葬られた。

その苦難の人生を思う時、苛酷な時代が際立つ。僅か

七歳で日清戦争、その生涯で四度、うち二度の世界大戦に遭遇した。そして関東大震災や世界大恐慌による経済の困窮、さらに労働運動、思想弾圧、軍国主義などの激動下を、必死に生き抜いた千代。その千代が遺したものの、それは弱者への無償の愛と救済の道であった。千代は行政に先んじて活動を牽引したが、時代は慈善から公的救済事業へと転換した。しかし、慈善の枠を遥かに超えた千代のセツルメント的取り組みにこそ、新たな社会事業の萌芽があったことを忘れてはならない。桜楓会あつての千代、だが、千代なくして託児所の発展はあつただろうか。師成瀬の委託に応えた、身を削るような無私一筋の一生であった。

おわりに

この街でおおくの子らの母であった、丸山ちよ先生⁽⁴⁸⁾

灘尾好吉⁽⁴⁹⁾の筆による千代の顕彰碑は、昔懐しい都電荒川線の通るJR大塚駅の側の、細い路地をくねくねと曲がりながら進んだ小さな小さな遊び場、「南大塚



顕彰碑

一丁目児童遊園」の一隅にあった。「この街」とはこ
東京都豊島区南大塚一丁目、一〇〇年前に桜楓会巢鴨託
児所があった辺りだ。碑は千代が永眠した二年後の秋に、
文字通り母と慕った託児所や西窓学園出身の教え子らの
手で建立された。

碑から遠くない若草保育園に、創立者の「あいちゃん」
こと九七歳の武居あい子を訪ねたのは七年前のこと、彼
女は「千代先生が歌の好きな私の才能を認めてくださっ
た」と声を弾ませて話してくれた。「先生から有名な兼
常清^{（1）}佐先生を紹介され住み込みで働き、ピアノの手ほ
どきを受けたお陰で保育学校の試験に合格した」という。
「私も先生のようになろう」と決心したのは、言うま
もなく「千代先生のひたむきな生き方を目の当たりに
育ったから」と少女のように目を輝かせた。

そのあいちゃんも、三年前に没した。二人の魂は、顕
彰碑がある遊び場で今も昔と変わらず元気な幼子の声を
聞きながらきつと、語り合っていることだろう。愛する
子供達の夢を奪う戦争も、貧困も決して許してはならな
いと…。

（一九六一年文学部国文学科卒業 やまなか ひろこ）

（1）日本女子大学校・日本女子大学の同窓会だが、校長成瀬
の教育を具現化し、親睦だけに止まらない社会的視野と
実践を目指した活動体。一九〇四（明治37）年四月一
日、第一回卒業式の翌日に第一回総会を開く。会長は成
瀬校長。

（2）桜楓会の機関紙として一九〇四（明治37）年六月二五日
に創刊。第一回卒業生をはじめ刊行はすべて女性の手に
より、半世紀にわたり文字通り週刊紙として貴重な情報
を提供した。終刊は一九五一（昭和26）年、一六三三号
をもって『桜楓新報』にバトンを渡した。

（3）千代が託児所について書いた日記は『家庭週報』第二
三一号（一九一三年七月一八日）から断続的に掲載され
ている。記事のタイトルはまちまちだが、本稿ではすべ
てを「託児所の日記」に統一した。

（4）①『日本女子大学校桜楓会託児所と丸山千代女史』『社会
福祉』第四集（日本女子大学家政学会・社会福祉学研
究会、一九五七年）②社会福祉学科50年史編纂委員会「日
本女子大学社会福祉学科50年史（一）―前史―『社会福祉』
第15号（日本女子大学社会福祉学科、一九七二年）③『桜
楓会託児所とその実践』『日本女子大学社会福祉学科五
十年史』（日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員
会、一九八一年）。

- (5) 『家庭週報』第二五号（一九〇五年六月三日）、四頁。
- (6) 留岡幸助談「公益事業と社会の発展」『家庭週報』第二〇〇号〜二〇三号（一九一二年十一月一日、一五日、二九日、二月二三日）。留岡幸助（一八六四—一九三四年）、クリスチャン。同志社大学卒業後渡米。帰国して巢鴨に家庭学校を開校して不良少年の教育に専心。代表的著述『慈善問題』（明治31年）は社会事業の古典といわれた。
- (7) William Jewett Tucker（一八三九—一九二六）、成瀬が滞米中、最も恩顧を受けた師。社会学者・神学者としてアンドーバー神学校の中心的人物であり、社会改良の先導者。
- (8) 成瀬は一八九〇（明治23）年から一八九四（明治27）年まで、米国に留学。世界的視野に立つ人生の目的探しの日々を綴った、貴重な日記を遺す。その一部は翻刻され、『成瀬仁蔵著作集第一巻（日本女子大学、一九七四年）及び『成瀬先生伝』（桜楓会出版部、一九二八年）に収録されている。
- (9)（一八七五—一九六三年）。本校第四代校長。家政学部一回生として卒業。桜楓会初代幹事長に選出され、一九二〇年の社団法人改組以降は理事長。
- (10) 『井上秀先生』（社団法人桜楓会出版・編集部、一九七三年）、七四二頁（『女性教養』より転載）。
- (11) 桜楓会研究部の一つ。会員は家庭部・教育部・社会部のいずれかに所属し、テーマを決めて研究を続けた。他に事業としての実業部も置かれた。
- (12) 牧賢一『丸山先生の生涯』（一九六九年）、二頁。牧賢一（一九〇四—一九七六年）。社会事業家。一九二五（大正一四）年に桜楓会巢鴨託児所に就職。一九二八（昭和三）年から千代を助け、主事として西窓学園に勤務。一九三五年中央社会事業協会に転じ、戦後は全国社会福祉協議会初代事務局長。「シャキョウの神様」といわれた。
- (13) 一九〇六（明治39）年四月二七日、六五名の入学者を迎えて開校。既にあつた家政学部、国文学部、英文学部に次いだ。
- (14) 青木生子『いまを生きる 成瀬仁蔵—女子教育のバイオニア』（講談社、二〇〇一年）、二〇一頁。
- (15) 成瀬仁蔵『大学拡張』『家庭週報』第一四〇号（一九〇八年四月二〇日）、二頁。
- (16) 中寫邦『成瀬仁蔵』（吉川弘文館、二〇〇二年）、一五九頁。
- (17)（一八八一—一九七三）。本学第五代学長。英文学部卒業後、千代と同じ教育学部第二部博物科に進学。千代と同期の六回生として卒業、直ちに桜楓会幹事に就任。
- (18) 一九〇五（明治38）年から一九一三年まで発行された桜

楓会機関誌の一つ。支部の情報、会員の消息をより多く詳細に伝えた。

(19) 次女は既に嫁ぎ、聲唾の姉妹と末の妹うめの三人。

(20) アンパン、豆腐が一錢、大福が五厘(明治末から大正初め)。

(21) 河合隆平・高橋智「戦間期日本における保育要求の大衆化と国民的保育運動の成立―保育要求のなかの保育困難児問題を中心に―」『東京学芸大学紀要 第一部門 教育学 第五五集』(二〇〇四年二月)、四八七頁。

(22) 大塚楠男「託児場の開設」『新女界』第五卷七号(一九一三年七月一日)、六九頁。

(23) (一八六五―一九四一年)三井三郎助の継室。創立発起人の一人で、一九〇五年の桜楓館建築費を寄付。桜楓会託児所の育成・運営に尽力した篤志家。

(24) 桜楓会事業部の中の実業部六部(雑貨、書籍、銀行、製菓、園芸、牧畜)の一つ。当時珍しかった菓子パンは売れ行き上々、託児所に時折差し入れがあった。

(25) 丸山千代子「桜楓会託児所にて」『桜楓会通信』第四四号(一九一三年一〇月一日)、八〇頁。

(26) イタリアのマリア・モンテッソリによって考案された教具や教育法に基づく幼児保育の総称。教師は環境を整え、子供をよく観察しながら自由な自己活動を援助すること

が大切であるとした。『週報』が初めて紹介したのは麻生正蔵「モンテッソリ―女史教育法『児童の家』」第二〇七号―二一〇号。本稿での呼称「モンテッソリ」は『日本女子大学園辞典』に準じた。

(27) (一八八九―一九四二)。愛媛県出身。附属高等女学校、英文学部六回生として卒業後は、桜楓会教育部でモンテッソリを研究し、短期間だが保母として豊明幼稚園に勤務。開所した桜楓会託児所で丸山千代を補佐した。幼児教育についての翻訳、『家庭週報』への投稿多数。『青鞥』にも作品を発表。結婚(吉賀姓)後は、理想の「私立家庭幼稚園」を創設するが、五一歳で没す。経営者は変わったが綾のビジョンに賛同する者たちに引き継がれ、世田谷区の最も古い幼稚園として現存。

(28) 丸山千代子「託児所より」『家庭週報』第二七九号(一九一四年七月一七日)、六頁。広岡郁子は広岡信五郎・浅子(本学創立発起人・評議員)夫妻の姪、一九二三(大正二)年家政学部卒業、後に本校評議員。

(29) 武市綾子「桜楓会託児所に於ける経験」『家庭週報』第二九六・二九七・二九九―三〇三号(一九一四年二月四日・一日・一八日・一九一五年一月一日・一日・二二日・二九日)。

(30) 『日本女子大学校四拾年史』(一九四二年)、四八八―四

八九頁。

(31) 『桜楓会慈善音楽会趣意』『家庭週報』第二九五号(大正三年一月二七日)、二頁。

(32) 同右、巻頭言「泉へ導け」。

(33) 「畏き恩賜金の用途 わが託児所の光栄」『家庭週報』第三五四号(一九一六年二月一八日)。ご即位ご大礼記念として全国府県に下賜された恩賜金のうち、東京府の交付先として救済事業七八団体の一つに選ばれた。以後毎年二月一日には名目を変えつつ増額され、公的資金の助成は続いた。

(34) 牧賢「スラムにおける保育所の誕生と発展」『保育の友』(一九五九年六月号)、一九頁。

(35) 注4①、九〇頁。

(36) 「託児所より」『家庭週報』第六五四号(一九二二年三月一〇日)。

(37) 丸山千代子「震災後の託児所より」『家庭週報』第七二五号(一九二三年一〇月一九日)、一三頁。

(38) 牧賢「丸山先生の生涯」(一九六九年)、六頁。

(39) 元井上秀校長秘書、日本女子大学名誉教授。学生時代から託児事業に関心を持ち、ボランティアとして千代を助ける。巢鴨閉鎖反対を仲間と共に直訴するため井上校長に面会。その後校長秘書として採用され、永く日本女子

大学に勤務。

(40) 『桜楓会総会報告』(大正14年度・15年度)。野村は女子(一八八八—一九六八)一九一〇年教育学部卒業、野村胡堂夫人。親友の上代タノ第六代学長を助け、図書館建設などで多額の寄附。人望厚く教育に関心が高かった。

(41) 『家庭週報』九三二号では、日刊紙の掲載日を三月一日としているが、正しくは三月一日。

(42) 牧賢「丸山千代女史を語る」『幼児の教育』七月号(フレーベル館、一九三三年)、五五頁。

(43) 同右、五一頁。

(44) 前掲牧賢「スラムにおける保育所の誕生と発展」、一七頁。

(45) 『家庭週報』第一一七九号(一九三三年五月二六日)、七頁。

(46) Elinor Gladys Phillips (一八七二—一九六五)。英国で牧師の娘として生まれ、ケンブリッジ大学卒業。一九〇三年から四〇年近くを本校英文学部教授として、また暁星寮の寮監として指導に当たり、特にキリスト教についての影響を千代に与えた。『週報』で母国女子大学生の奉仕活動やロンドン市のセツルメント事業を紹介している。

(47) 丸山千代には、ちよ、または千代子の署名があるが、本

稿の記述では『日本女子大学学園辞典』に準じ千代に統一した。

(48) (一八九九—一九九四)。政治家。全国社会福祉協議会会長として、社会福祉の充実に努める。その関係で牧賢一と親交が深く、顕彰碑の揮毫を引き受けたと思われる。

(49) (一八八五—一九五七)。音楽評論家。『家庭週報』に「音楽の聞き方 芸術の世界に入る心の予備」第三九二号(一九二六年一月一七日)、『ピアノの詩人(フレデリック・ショパン)』第三九三号(同二四日)など西洋音楽の解説を執筆。



成瀬記念館収蔵資料のうち成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡は、夫信五郎との連名のものを含め、これまでに二〇通が確認されている。『成瀬記念館』No.27（二〇一二年七月一日発行）に掲載した一通に続いて、ここでは未発表の広岡浅子書簡のうち、一八九九（明治三二）年三月三十一日付および四月一二日付の二通を掲載する。この二通を含め、二〇一六年一月より広岡浅子および加島屋関係の書簡等を紹介する「女子大学校創立の恩人 広岡浅子展」の開催を予定している。書簡の翻刻に先立ち、その背景となる広岡浅子と成瀬仁蔵および日本女子大学校創立について概説する。

広岡浅子とその時代―日本女子大学校への夢―

吉良 芳恵

はじめに

日本女子大学の創立に大きな足跡を残した広岡浅子は、数多くの文章を『日本女子大学校学报』『家庭週報』『婦人新報』『婦人週報』『婦女新聞』『新女界』『花紅葉』などに書き残した。こうした資料をもとに、古川智映子氏は『小説 土佐堀川―女性実業家・広岡浅子の生涯』¹⁾を、さらに高橋阿津美氏は「実業家 広岡浅子―日本女

子大学校の援助者―」²⁾『大正期の女性雑誌』、「実業家 広岡浅子―日本女子大学校の援助者―」³⁾『成瀬仁蔵研究会 活動の記録（16）』を発表された。古川氏の著作は、小説仕立ての形で、明治・大正期を力強く生きた女性実業家広岡浅子の人生を描いたものである。また高橋氏は、三井文庫の資料等を用い、広岡浅子の生き方、すなわち女性の自立を訴え続けた姿が、三井家の家族関係に根ざすものであったことなど、貴重な考察を行い新たな浅子

像を提示された。しかし浅子の生き方や人物像にせまるには、経済人としての分析、とりわけ大坂の豪商として名高い加島屋に嫁いだ浅子が、幕末維新期の家業の不振等（大名貸しの処理問題等）にどのように対処し、その立て直しに邁進したか、また危険を承知で「冒険的事業」である炭鉱（筑豊の潤野炭鉱（後の二瀬炭鉱））を買収しどのような経営を行ったのかなど、重要な課題を明らかにする必要がある。広岡浅子の経営能力の分析が進めば、その中で培われた彼女の人生哲学（思想）と、女性の変革や女子教育の実現をめざした彼女の闘いがどのような関係にあるのか、明らかになるだろう。

現段階ではこうした課題に答えることはできないが、本稿では来年一月に予定する展示の準備として、彼女が生きた時代やその中で形成された女性観を中心に、彼女が日本女子大学の創設にどのような夢をもち、その実現にむけて成瀬仁蔵に協力したのかなどについて考えてみたい。

豪商の家に生まれる

広岡浅子は、一八四九（嘉永二）年一〇月一八日、京都油之小路出水の豪商三井家（小石川三井家）六代当主

三井高益の四女として生まれた（幼名は照、以下浅子と記す）。二歳で大坂土佐堀の両替商兼諸国取引米問屋加島屋久右衛門正饒の次男広岡信五郎の許嫁となり、慶応元年、一七歳で嫁いだ。幕末維新の変革の中、浅子は大坂で第二の人生を歩むことになったのである。

嫁ぎ先の加島家は、大阪一、二の豪商で、維新後も米の取引を行い、明治天皇の江戸行幸では、三井八郎右衛門・小野善右衛門とともに、金穀御用（会計方）を引き受けている。浅子の夫信五郎は加島屋の分家として商事部門（広岡商会）を担当していたというが、能や文楽などを愛す趣味人であったようで、経営は手に任せることが多かった。こうした中、浅子は維新期の経済変動に伴う加島屋の立て直しに奔走、加島銀行の経営に携わり、さらに大同生命保険会社の創業に参画した。夫信五郎も後に大阪株式取引所の理事や尼崎紡績会社の初代社長となるが、浅子がそれを実質的に支えたことはいうまでもない。二人の間の一人娘亀子は、東京帝国大学出身で子爵一柳家の次男恵三と結婚、一九〇四（明治三七）年、恵三は浅子から経営（大同生命第二代社長）を引き継いでいる。

ところで浅子は自身を語る際、学問はないと記すことが多い。しかしこれは男子のような学問を受けられな

かったという意味で、三井家の娘はお稽古ごとなど一通りの教養は身につけていた。とはいえこうした稽古ごとには浅子の肌にならなかったようで、兄弟達の書物(「大学」「論語」等)をよく読み、また広岡家に嫁いだ後も、漢学儒学などを勉強したという。一三歳の時から、「男のする事をしてはいけ」ないという風潮に疑問をもち、後年、男女の「脳力や胆力」に格別の相異はないと断言するなど、浅子は独学で学問をしつつ、男女間の差別に挑み続け、その力をつけていった。⁽⁵⁾

浅子のさまざまな女性観

そこでまず始めに、浅子が新聞や雑誌に発表した女性観など、彼女の考え方をアトランダムに列記してみよう。⁽⁶⁾

- 家庭に入る女性は、一種の犠牲者であることを自覚すべきである。
- 子供は「国民」として教育せよ。
- 主婦に一番欠けているのは経済思想で、社会経済や国家経済の現状を知らない
- 女性には高等教育が必要である。奴隷扱いされてきたのは「無智」のためであり、「台所番・小守・従順」

であればよいというのは誤り。物品扱いされ、軽蔑されないためにも、実力と品性をみがぐためにも、経験談等を交換すべきである。

- 婦人の「屈従生活」や「籠城生活」は、結果として「国家」の発展、進運を阻害する。

- 第一次世界大戦中の西洋婦人の活躍に比較して、日本婦人には独立した人格と価値と自由があるか疑問である。

- 富豪や高位高官と結婚する女性の「寄生生活」は男子の力を減殺する。

- 婦人は「親や夫によつて価値」が定まるわけではない。「智徳」を磨いて、自らの人格を高めなければならぬ。

- 男子と競争するのではなく、女子の長所(細かい注意が行き届くことなど)を発揮し、婦人として「社会国家」に貢献すべきである。

- 「賢母良妻」というのみで「社会国家」に貢献する人は少ない。

- 婦人問題や婦人の教育においても、婦人自身は対岸の火災視し、男子が論じていて恥ずかしい。

- 英国の婦人参政権運動は過激暴挙、しかし信仰の上に築いた精神で獲得しようとする努力したものである。

アメリカでは数州で参政権を得ている。

●キリスト教は他の宗教と異なり、婦人を認めている。などなどである。

こうして並べてみると、矛盾するところが無いわけではないが、総じて、女性が一段低い者とされてきた不合理に立ち向かっていった気概が感じられる。おそらくこうした姿勢は実業界で男子と競いあうことにより育まれたものと思われる。

ところで、浅子の性格について、日本女子大学校評議員であった大隈重信はその追悼文で、「其の境遇にあまり満足しなかつたといふ事は事実でありました。殊に当時の風俗習慣は浅子夫人の趣味、思想にあはなかつた事でありませう。けれども一旦親の定めた約束に従つて其の婚約のある広岡家に嫁して後は家のため、良人のため、母として子のために実に世間稀有の賢婦人でありました。又其の成したる仕事は実に男子も及ばぬ偉業でありました。．．．或る一部分の人からは多少誤解も受けましたが⁽⁷⁾と述べている。大隈夫人が浅子のよき理解者であったことを考え合わせれば、大隈は浅子の真情を理解する一人であり、それゆえの忌憚ない追悼文であったといえよう。

浅子と成瀬仁蔵、そして日本女子大学校創設

加島家の経営の中心となつていた浅子のもとには、数々の人が学学校設立計画への助力を求めてきたようである。しかし浅子は「主義」が異なること断り、一八九六(明治二九)年に「ある人」(奈良の豪農土倉庄三郎)の紹介で来訪した梅花女学校校長の成瀬仁蔵から『女子教育』の惠贈を受けた。もともと女子教育の重要性を認識していた浅子は、少なくともこの本を三回読み、感銘をうけたという。おそらく浅子は、国家の進歩發達に女子教育が必要であることを認識し、女子高等教育機関の創設を計画していた成瀬と響き合うところがあつたのだろう⁽⁸⁾。こうして浅子の支援が始まつた。

成瀬との出会い後の姿は、成瀬記念館に収蔵されている二〇通の広岡浅子書簡にみる事ができる。日本女子大学の「發起人組織」の急務について記した一八九六年(明治二九)六月一日付の書簡は、『成瀬記念館』No.27(二〇一二年)にすでに翻刻・掲載したので、本稿では、一八九九(明治三二)年三月三十一日付と同年四月一二日付の書簡を末尾に翻刻・紹介する(翻刻協力・北野剛)。なおこの二通の書簡からは、大同生命保険会社設立にいたる過程や、成瀬の紹介で入社した社員の勤務

報告、娘亀子の婿養子の紹介を成瀬に依頼したことなど、これまで知られていなかった事実が判明する。浅子と成瀬は種々の相談がなされるほど信頼関係を築いていたのである。

ところで日本女子大学の創立において、浅子の実家である三井家の協力が多大であることはいうまでもない。浅子は、仲のよかった義弟三井三郎助や三井家総代から多額の援助や学校用地としての目白台五五〇〇坪の土地の寄贈を引き出している。

一九〇〇（明治三三）年、日本女子大学の東京での開校が確定し、一九〇一年に創立をみたが、浅子が評議員になるのは一九〇五年のことである。ちなみに他の評議員は、岩倉具定、岩崎弥之助、蜂須賀茂韶、土倉庄三郎、大隈重信、大倉孫兵衛、岡部長職、樺山資紀、成瀬仁蔵、村山龍平、久保田謙、児島惟謙、麻生正蔵、西園寺公望、北島治房、三井八郎右衛門、三井三郎助、渋沢栄一、広瀬実栄、森村市左衛門、住友吉左衛門で、女性は浅子一人である。また浅子は、成瀬の理想に基づいて、卒業生の団体である桜楓会の組織化を指導し、有給役員を置いて基本金を募集するなど手腕を発揮^⑩、一九〇六年に桜楓会補助団の発起人となっている。その後も幹事をつとめ、さらに軽井沢三泉寮の設立でも援助をおしまず、

名誉寮監となった。

そこで浅子が大学の創設資金として寄付した金額を『学報』（第一号）、『家庭週報』（第二五号）、『日本女子大学校寄付金簿』から追ってみよう。如何に高額の寄付をしているかがわかるだろう。

● 創立運動開始より一九〇三（明治三六）年六月二二日まで…五五〇〇円

※この間は広岡信五郎名義で寄付をしている。六段階の創立資金寄付金総額は一八万五四七七円六五銭で、最高の寄付金額は三井家総代三井八郎右衛門の三万二四四八円である。

● 一九〇四（明治三七）年…三〇〇〇円
● 一九〇六（明治三九）年…二万円
● 一九〇九（明治四二）年…一万五〇〇〇円（五ヶ年賦）

なお、日本女子大学の創立後は、実践倫理や教育学などを聴講したようである。その中で最も面白かったのは、商売をしてきた関係もあり心理学であったと記す^⑪。しかし晩年は東京で暮らしたにもかかわらず（特にキリスト教受洗後）、以前ほど女子大学校へ足を運ぶことはなくなつたといふ^⑫。

愛国婦人会と浅子

次に浅子は愛国婦人会の運動にも参画し、『婦女新聞』に寄稿するなどその論陣をはっていたのでみておこう。^⑤なお愛国婦人会とは、一九〇一(明治三四)年に奥村五百子が設立した、軍事後援や軍隊慰問を目的とする団体で、上流階級のサロンの性格が強かったといわれる。日露戦争開始の一九〇四(明治三七)年、五六歳となった浅子は家督を女婿岡田三に譲り、愛国婦人会の授産事業や矯風会、青年会等社会事業に邁進した。^⑥

この頃の浅子の女性観は次のようなものであった。従来の女子の職業は遊戯に属するものが多く発展がないと指摘し、職業とは男子の領分であり、婦人の職業はその補遺、内職とする考え方が強いとみていた。たとえば愛国婦人会の実業部計画でも、雑貨部・書籍部・銀行部・園芸部等を設置しても発展がなく、顧客等に甘んじた休眠状態にあると批判し、次のような婦人の職業論を展開した。従来女子は工場なら工女(手足)として、工業物産の過半が女子の手になってきたが、今後は教育ある婦人が事業の計画者になることが大切で、意匠の案出など「頭」が必要であるとし、さらに、不明瞭な家政学等を詰め込み、社会を見る眼もなく、物の価値を判断する知

識も乏しいようでは、夫の事業の助け手としても不適當であるとして、数の觀念を養うために実務に携わることの重要性を説いた。その例として、一〇年前に大阪愛国婦人会で遺族のための授産場を設置した際、遊戯にないようにならないうに注意し、「進歩発展」させたことを紹介した。遺族にミシンを習わせ、巡查や郵便局、電気局、軍人等の服を商売人と競争して請け負ったこと、裁ち屑の利用方法や日常の賄の買い方を研究し卸買をすることで相應の資産をつくったこと、授産場で拵えたものは持ちがよいく品質が確かだと信用を得るようになったことなどを具体的に説明したのである。また「無学」の女性には、毎朝就業前の三〇分、算術・読み方・修身等を教え、貯金などをさせたという。さらに上州や信州での養蚕調査をふまえ、朝鮮での養蚕事業の展開を考えて土地の選定もしたという。朝鮮在住の日本婦人や朝鮮婦人等に働く場所を用意しようとしたのである。浅子は、婦人が殖産的になることは「富国の原因」となり、婦人の知識養成にもなると考えていた。帝国日本という枠の中での発想ではあるが、浅子の立脚点が女性にあったことは確かであろう。^⑦

国家、社会、挙国一致

ところで近代日本の歴史において、人々の心を最も縛ったのは、国家という概念であろう。また、日本が国際社会の中で自立化するためにも国民意識を強化する必要がある、浅子もその意識を強くもつようになったと思われる。その一端は、日露戦争時に、人や社会を動かし婦人の改良を計ることによって、「国」への義務を果たそうと考えたことに現れている。また日露戦争後は欧米の強国と「商売」の戦いなることを予想していた。さらに世界戦争への序幕認識ももっており、列強国に對し劣っているのは軍備や商工業ではなく、婦人の知識、地位であるとして、婦人の教育の必要性を説いた。帝國日本にとって必要なことは、浅子が生きる経済社会、つまり物質的なことではなく、女性力であるとして、理想的な配偶者を育てて国家社会への貢献を期待したのである。さらに第一次世界大戦中での女子大学講義録の発刊に際しても、会員に、「進歩」に取り残されないように訴え、「国家」は若者、男子、女子、老年だけでなく、全員が責任を分かつことができれば「挙国一致」の実をあげることができる⁽¹⁸⁾と説いた。

ここには浅子の国際認識の一端がみえる。浅子の女性

の自立観は、その時代と連動し変転し、国家への収斂度が高くなったといえよう。

「新しい女」の登場と浅子

浅子は、一九一四（大正三）年四月三日の『読売新聞』に、女性の生き方を三区分した文章「大別した三種」を載せている。「婦人付録」の登場を記念して編集された「発展記念号」欄に掲載されたのであるが、この記念号には浅子のほかに、大隈重信「喜ぶべき進化」や中川謙二郎「上流の婦人に」、島田三郎「分を乱るな」、花井卓蔵「男性化の傾向」、浮田和民「自制忍耐の徳」、三谷民子「意義ある生活」、宮田修「心身の充実」、鳩山春子「力の自覚」、島村抱月「自由に大胆に」なども掲載された。成田龍一氏は『大正デモクラシー』⁽¹⁹⁾の中で、この企画が女性達に新たな家庭像を「中流」と重ねながら提供したと分析する。これより以前の一九一一年九月、平塚らいてうは『青鞥』創刊号に「元始、女性は実に太陽であった」で始まる評論を発表し、青鞥社には日本女子大学の卒業生達が参画するようになっていた。そして一九一三年一月、「新しい女」が『中央公論』に発表され、「良妻賢母」主義との闘いが始まる。浅子の文章は、こうした

動きに対する彼女なりの対応の一つであったと思われるので、左に紹介しておこう。

まず日本の女子は古い習慣を繰り返し、進歩しようとも発展しようとも考えていないが、少数は三方向へそれぞれ歩みを始めていると記した。三方向の第一は、「欧化熱、所謂ハイカラ主義」で、精神的な欧化を無視し、物質文明を主張するなど、深いものがない。第二は、「飛上がり主義」で、「新しき女とか囚はれざる女」といつて「自由を叫び」「男女同権を主張」する女性達である。しかし「進化した思想ではなく、退化した人生である。極端なる自然主義の崇拜者にして、人間としての徳も、婦人としての価値も無視したる野蛮の状態、即ち動物化」といふべき様で、「各自進歩的女性であると高慢する者等である」と激しい口調で批判した。第三は、「改善主義者」で、男子の我が儘や社会の腐敗を憂え、家庭社会の改善や子女の養育のために忍耐をしている。しかしその努力は狭い範囲に止まり、「社会にも国家にも何等の影響を及ぼす事が出来」ず、改善事業も何ら効果がないと断じた。さらにこの三方向はいずれも、世界の婦人に比較して「幼稚」であるため、現代婦人はもう少し積極的な方面に覚醒してもらいたいとして、敬虔の念、宗教心、信仰の確立が必要であると説いた。浅子は既にキリ

スト教を受洗していたためか、信仰心による進歩を説くのみであった。⁽²⁰⁾

民本主義とアジア観

ところで第一次世界大戦が終了する前浅子は、男女間の競争が起こると予測している。その背景には、大戦中の英仏等で、後方勤務として国内に残った婦人があらゆる職業に進出していたことがある。こうした状況を「見えざる一つの思潮」ととらえ、低い地位に甘んじていた婦人が、人間として男子と同等になる一大思潮に触れることの重要性を認識し、ドイツの敗戦もこの視点からとらえた。さらにアメリカのウィルソン大統領が唱えた一大思潮を、軍国主義ではなく、民本主義（互いの幸福を増し、公平な神の恩寵を受ける）ととらえていた。浅子は、婦人にとつての民本主義を、軍国主義より理解されやすく婦人が世に行うに適わしい思潮と理解していたのである。そこには、教育の要求や政治上の権利獲得も必要だが、権威を振るうためではなく、常に全人類の幸福を増進し、和平維持の愛の事業の手段であるべきだとするキリスト教の影響が見受けられる。浅子がこうした一大思潮に婦人界の曙光をみたことは確かである。⁽²¹⁾しか

し、もう一つの思潮である階級への視点はみられない。

一方一九一九（大正八）年一月の論考では、日米間で重要なことは、中国に対する日本の態度であるという視点を提示している。世界各国が中国への「誘掖指導」に尽力しているのに対し、日本は「恰も高利貸しのやうな不親切な事が多く、只無尽蔵の彼の地の天産物を掘り出さうとか」、中国人を圧迫して「その権利や土地を我が物にしやうとか急せるのみ」であると批判し、こうした対応は第一次世界大戦のドイツと同じであり、このまま「我利の念」が増長すれば米国はだまっておらず、「恰も人類の敵、民本主義の敵と云つて、独逸に宣戦したやうに、我が国に向つて最後の手段」に訴える可能性がある」と述べた。その上で、日本人は米国の制裁を恐れる前にまず恥とすべきであり、中国内地に入り込む「野心満々たる男」や「チャンコロ」などと蔑称を用いる日本人を非難した。⁽²⁾ 浅子は中国への日本の侵略を認識し批判していたのである。キリスト教に受洗したことにより、ナショナリズムの弊害に陥ることから逃れ、国家の枠を超えうる可能性をもっていたのかもしれない。

評価をめぐる

一九一九（大正八）年一月一日、浅子は麻布区材木町の別邸で亡くなった。六九歳（満年齢）であった。『基督教世界』（一月二三日号）は、二二日に執行された神田青年会館における告別式での宮川輝輝牧師の追悼辞を掲載した。その中で宮川は、浅子が一九〇九（明治四二）年頃より一切の私交を絶ち修養を続け、受洗後の変化には驚くべきものがあつたと述べたあと、直らなかつた点が二つあると披露した。第一が「すききらひのあることなり。すけば全くすき、きらへば見向きもせざること」、第二は「人を批評することなり」として、「この二つは如何に忠告するも容易に之を取り去ることを得ざりき」と、その個性が紹介されたのである。その後遺体は大阪に送られ、二三日土佐堀青年会館で葬儀が執行された。⁽³⁾ 成瀬仁蔵の紹介で宮川牧師に師事していた浅子は、一九一一年（明治四四）二月、大阪教会で受洗し、その後は「溫柔円満」な人になつたといわれたようである。宮川牧師とは、女子教育者としても知られる熊本バンドの一人で、日本組合基督教会の指導者である。海老名弾正、小崎弘道と共に組合教会の三元老の一人といわれた。⁽⁴⁾

『婦人週報』も小橋三四子の追悼文を掲載、浅子を次のように評した。剛情で世間や人を恐れず、善悪正邪の意見を直言するため、言葉が心より過激に失することがある。しかし心情は公明正大で私心がなく、「国家と人類」のために身を挺して働き、キリスト教に入信してからは修養の重要性に気付いた。しかし浅子の真情を理解する者はおらず、また一種の「狂気」があったため迫害を受けたこともあり、世に迎合できない言語動作は事勿れ主義の人々を脅かした、とその個性への愛惜の辞が述べられたのである。この「狂気」とは、炭鉱業に進出した際に「狂人」扱いされたと浅子自身が述べたことを意味しているのかもしれない。⁽²⁵⁾

『婦女新聞』も一月二四日号の社説で浅子の死去とその功績を報じた。まず、浅子の社会事業への貢献として、第一に、日本女子大学校創立に際し成瀬仁蔵の最初の後援者となったこと、第二は、愛国婦人会大阪支部を事業的に独立させたことをあげた。そして「女史は有名なる剛情の人であった。一たび言ひ出した以上は誰が何と言つても貫かないでは止まなんだ。此の剛情は、時に癡癡となつて破裂し、時に幼児の駄々を捏ねるが如く傍人を困らせた。天下に恐るべき人も憚るべき人も無い女史は、如何なる場合にも自我を立て通すことを得て、之を至当

の権利と信じて居た。この剛情なる自我心、負けじ魂、強大なる意志力は女史をして、事業をも成功せしめたのであるが、然も奮闘時代を過ぎてから後の女史は、意力のみでは満足することが出来なんだ。剛情を立て通した後に却つて寂寥を感じるに至つた」と、その人柄を述べ、キリスト教との出会いで「剛情比なかりし一老嫗は神の前の従順なる婢と化し、普通の場合には殆ど別人の観あるまでに至つた」と追悼した。また福島貞子は、浅子自身が「私の過去は全く家の犠牲だつた。私個人としては不幸な淋しいものです」と述べていたことを紹介した。女性が家の犠牲になることに反対し続けた背景には、こうした自身の境遇への思いがあったことを披露したのである。⁽²⁶⁾

また同年六月二八日、広岡浅子の追悼会が日本女子大学校講堂で開かれたが、その壇上で麻生正蔵も、浅子が自身のことを「一種特別な変りものであるから、普通一般の婦人の手本にはならない」として「男性的の所があつた」と述べている。⁽²⁷⁾

ところで受洗後の『婦女新聞』一九二二（明治四五）年一月三日号には、「ちぐさ」なる人物の「広岡家の後室」という記事が掲載され、「女子大学の母」としての姿が紹介されている。女史は、機嫌のよい時、話題が心に叶つ

た時は、話の切先が鋭く、責め励ます調子も激しく、その人の全身に自分の精神を打ち込まないでは止まない熱烈な様子をみせ、大抵の人は泣かされてしまう、というのである。また思想の幼稚な人や、智識に飢えた貧しい人には女史から何等得る所はないが、学問をしていても「バネの利かぬ人」を刺戟する師となり、世の辛酸をなめ尽くした者の友としては、真に得難い貴い人でもあると述べた。女史の烈しい小言は、身を切られるほどつらく、二度と会うまいと思う事もあるが、そのうち又引きつけられる。さらに何をいつてもダメだと見抜かれた時は浅子は冷かになると、その冷徹さも記した。そして、一年位会わないと懐かしいが、手にするほどには慣れ親しむことはできず、犯しがたい一種の威厳を覚える。君子とか聖人とかいう「徳の人」ではなく、大丈夫や偉傑というべき「力の人」であると、評価した。しかし、男性の中にも女史のような力の人はいくつあるわけではなく、浅子を常に敬服するのは、「誰に師事せられるでもなく、何の宗教にも偏らず、精神的にも物質的にも、真に独立独行で・・・あれだけの人格を練りあげあられだけの困難な事業を成し遂げられた」からであるとし、「長い年月、非常に困難な事柄と時代とに遭遇しながら、何時も正しく自己を守り通して、他の圧迫や障碍に屈せず

遂に其の主義目的を貫かれ」たこと、「女史の皮相だけを見た人は、薄情だとか傲慢だとか」非難するが「決して薄情ではなく、寧ろ天下を憂ひ人類をお思ひになる処は、熱烈なる感情家」で、「女史の情は、固き意志と修養されたる理性とによつて其の焰を収め、偶々情の働きを見る時は、悉く理性の薪によつて燃やしたものの」ゆえ誤解を受けると分析、しかも「人に物質を与へる事を一種の罪悪のやうに思つて」いるようで、様子が傲慢に見えるのは、「怒濤に堪へた大岩のやうな御境遇が然らしめたのと・・・人の意を迎へるやうな事をお好みにならぬ為め、交際を世渡りの一大資格のやうに思ひなれた人の眼に、自らさう映るのであらう・・・大きく太い人格の一部に、細かい人情の機微に突き入るやうな点が付け加へられましたなら、恐らくは明治の女性史を飾るべき一流の婦人」になつたと、浅子を敬服する一人としての複雑な思いを述べた。平塚らいてうが抱いた嫌悪感にみられるやうに、彼女と対峙する立場や性格などによつて、浅子の姿は違つてみえたのであらう。²⁸⁾

また村岡花子の「夏のおもいで」には、「日本女子大学の創立に力をつくした関係上、日本女子大学の卒業生を大変にかわいがつた。秘書も卒業生であり、いろいろな事業をしている人たちなども後援していた。そういう、

連中を夏の休みに二の岡の別荘へよんで講義を聞く恩恵(?)に浴させた」とあり、日本女子大学校との関係に深いものがったことがわかる。⁽²⁹⁾

おわりに

以上、広岡浅子が残した文章などをもとに、彼女が明治・大正期という時代にどのように生き、どのような思想を育んだのか、概観してみた、人は自身が生きた時代や境遇等からさまざまに制約あるいは影響を受ける。浅子もその例にもれず「国家」、そして「国民」という枠の中で生きざるを得なかった。しかし、彼女は女性自身を変えたいという強い意志をもっており、時代の変化に対処し続けたことは確かである。その特徴をまとめると次のようになるだろう。

まず第一は、封建遺制である家父長制の中で、男女間の差別と闘い続けたことである。とはいえ、一八九八(明治三二)年施行の民法により、家父長的家族制度(いわゆる「家」制度)が成立したことなどに対しては何も書き残していない。第二は、日露戦争前後は「国民」意識が強く働いていたが、キリスト者となってからの第一次世界大戦期には、中国への侵略について自覚するなど一

定の国際的認識をもち、女性の権利についても新たな地平を開く可能性があったということである。とはいえ総力戦時代の到来を予想し、「挙国一致」を説く人でもあった。第三は、徹底的に実務経験や経営観念の重要性を説いた女性だということである。この姿勢は、愛国婦人会や桜楓会の運営方法にも現れており、「新しい女」達とは異なる点かもしれない。第四は、進歩、発展史観の人だったということである。彼女の残した資料からは、時代という制約の中で、女性が自立して生きることの困難さと、それゆえにこそ、その克服に立ち向かった人の強さが伝わってくる。

(成瀬記念館主事 史学科教授 きら よしえ)

(注)

(1) 古川智映子『小説 土佐堀川―女性実業家・広岡浅子の生涯』潮出版社、一九八八年。

(2) 高橋阿津美「実業家 広岡浅子―日本女子大学校の援助者―」『大正期の女性雑誌』近代女性文化史研究会、大空社、一九九六年。

(3) 高橋阿津美「実業家 広岡浅子―日本女子大学校の援助者―」『成瀬仁蔵研究会 活動の記録(16)』(一社)日本女子大学教育文化振興桜楓会、二〇一五年。

- (4) 邦光史郎「ピストルを懐に坑夫と起臥した女傑広岡浅子」『歴史読本 伝記シリーズ15 明治・大正を生きた15人の女たち』新人物往来社、一九八〇年四月。
- (5) 広岡浅子「余と本校との関係を述べて生徒諸子に告ぐ(明治三十六年二月講話)」「日本女子大学校学報」第一号、一九〇三年七月。
- (6) 広岡浅子「家庭部員の猛省を促す」『花紅葉』第六号、一九〇八年。「家庭部大会・広夫人の御話」『花紅葉』第八号、一九一〇年。広岡浅子「磨かれた二つの人格 国家中堅の覚醒を促す」『婦人週報』第三卷第四二号、一九一七年一〇月。広岡浅子「信仰と婦人」『新女界』第七卷第六号、一九一五年六月。
- (7) 大隈重信「天性偉大な広岡夫人」『家庭週報』第五二四号、一九一九年七月一日。
- (8) 前掲「余と本校との関係を述べて生徒諸子に告ぐ(明治三十六年二月講話)」。
- (9) 『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校、一九四二年四月。
- (10) 井上秀子「頻々と至る死の教訓 嗚呼広岡浅子刀自」『家庭週報』第五〇一号、一九一九年一月二四日。
- (11) 広岡浅子「余は女子大学講義を如何にして学びつゝ、あるか」『家庭』第一卷第四号、一九〇九年七月。
- (12) 広岡恵三「一言御挨拶に代へて」『家庭週報』第五二四号、一九一九年七月一日。
- (13) 前掲「ピストルを懐に坑夫と起臥した女傑広岡浅子」。
- (14) 守屋東「吊故広岡浅子女史」『婦人新報』第二五九号、一九一九年二月一〇日。
- (15) 広岡浅子「女子の職業に就ての卑見」『新女界』第四卷第五号、一九二二年五月一日。
- (16) 「來賓演説 広岡夫人のお話」『花紅葉』第一号、一九〇五年五月。
- (17) 「広岡浅子氏談片」『家庭週報』第九号、一九〇四年一〇月一五日。「会員は社会の感化力たれ 広岡夫人の御話」『花紅葉』第二号、一九〇六年二月。「談叢 広岡浅子氏の談」『家庭週報』第八九号、一九〇七年一月一九日。
- (18) 前掲「余は女子大学講義を如何にして学びつゝ、あるか」。
- (19) 成田龍一「大正デモクラシー」岩波書店、二〇〇七年。
- (20) 広岡浅子「大別した三種」『読売新聞』一九一四年四月三日。
- (21) 広岡浅子「これからの勝利者 愛を以て互に仕へよ」『婦人週報』第五卷第二号、一九一九年一月一〇日。
- (22) 広岡浅子「隣邦支那に対する日本婦人の責任」『婦人週報』第五卷第三号、一九一九年一月一七日。
- (23) 「噫、広岡浅子刀自」『基督教世界』第一八四〇号、一九

一九年一月二三日。「広岡浅子女史永眠」『婦女新聞』第九七五号、一九一九年一月二四日。

(24) 広岡浅子「一人一評」『婦人週報』第二卷第九号、一九一六年二月二五日。前掲「吊故広岡浅子女史」。

(25) 「天国は近づけり」広岡浅子刀自を悼む』『婦人週報』第五卷第三号、一九一九年一月。

(26) 社説「奮闘的女傑広岡女史」『婦女新聞』第九七五号、一九一九年一月二四日。福島貞子「耳に残る御声―広岡後室の御霊前へ―」『婦女新聞』同第九七五号。

(27) 麻生正蔵「広岡浅子刀自を憶ひて」『家庭週報』第五二四号、一九一九年七月一日。

(28) ちぐさ「広岡家の後室」『婦女新聞』第六〇七号、一九二二年一月三日。

(29) 村岡花子「随筆 夏のおもいで」『父母教室』第八号、全日本教育父母会議、一九六四年。



一、漢字は原則として常用漢字を用い、ひらかな、カタカナは原文通りとした。

一、あて字については原文通りとした。
一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。



書簡1 一八九九(明治三二)年三月三一日

文略候。日々御繁務之事奉存候。岩崎、土倉氏出京無之ニ付未開會無之由、岩崎氏帰京之后早々御開會相成候趣、就ては大坂之諸氏へ御相談之必用にて御上坂之由御手續キ之次第ハ拜顔之節拜承可仕候。○当方各事業モ未視ルヘキ結果ハ無之候得共漸々改良ヲ加え進取之方針ニ向ツ、有之候。松本、白神へ過日書面ヲ以テ方今当家諸般之事業之模様予メ申遣シ、併シテ東京之方針ヲ尋遣、尚両人之異見并彼レ等ノ欠点ヲ申遣し候(氣永クシテ進取ノ氣乏)。未何等之答も無之候。一応其書面御読ニ相成候ハ、方今ノ模様予メ御承知被下候事と存候。

○養子之義ニ付御繁務中種々御配慮之段奉厚謝候。○先生御世話被下候人員ハ何レモ皆今日之処ニテ結果宜敷候。

中川右欠点モアレトモ兎ニ角責任ヲ以テ事ヲ為シ、只一部分之事ノミナラス全般之事常ニ頭ニアリ、今日ニテハ我意志ヲ了承シタルガ如シ。

宮崎実ニ勉強人熱心人ナリ。商売好ナリ。少シ間モ休マズ表裏ナシ。只ヲシムラクワ学力ナキ為メ秩序立たズ纏リ悪キガ欠点ナリ。是レモ追々欠点ヲ改メ候様可致候ハ、亦得難キ一人之ハタラクキ手ナリ。

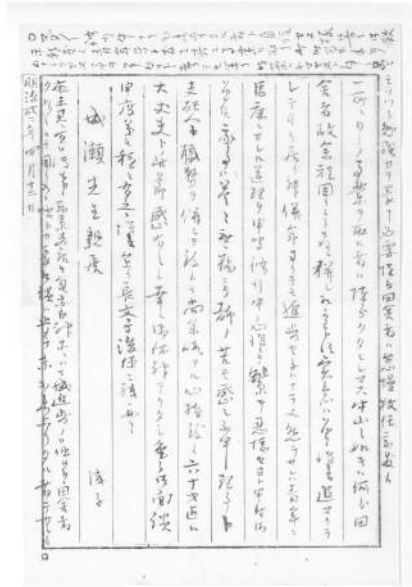
候。方今ノ御座候。今日ニテハ商
 売氣モ余程出来我意志モ了解セシ様子ニテ一般之事ニ氣
 ヲ付候様相成、追々申聞候ハ、開明ノ商人ニ相成ヘキカ
 ト樂居候。只欠点ハ苦勞シラズ故金遣アラク（自分ノ手
 元）シテ何事モムダナ事多カラント存候。是レモ追々金
 モウケハ中々六ツケ敷物ト云フコトヲ知り候ハ、改心出
 来候事ト存候。兎ニ角當時ハ責任ヲ重シ人ノ事トセズ熱
 心ニ注意致居候間御安神被下候。
 新田ハ追々勝手モ分り忠実ニシテ一部ヲ任スニハ実ニ欠
 点無之候様相成候。併シ意見ニ至リテハ極小サシ。一部
 之主任タルベシ。
 右四人共多少欠点ハ有之候モ兎ニ角何レモ信用出来各其
 長所ヲ仕用セバ将来望アリ当家ニ於テノ利益少ナラスト
 存候。
 予テ先生御心配之件ニ付予メ今日之処ノ成跡ヲ御報告申
 置候。幸ニ御休神被為在度候。
 方今ハ小子取り居候処ハ毎日午前八時ニハ必出店、午后
 四時或ハ五時ニ帰宅、夜ニ入り教場へ折々出掛ケ居候。
 不精神者ハ嚴重ノ大目玉ヲ食ハシ、忠実者ハ能愛シ亦賞
 与ス。此半季間ニハ店員ノ氣風ヲ一新シ得ルノ考ニ御座
 候。○商業学校生今度四人雇入れ候。何レモ成跡宜候ニ
 付追々実地ニ馴候ハ、大ニ利益ト存候。○予テ御承知之

日ニテモ高直買金事モ分りおまへ心モ分り解
 せし候。一總トシテ分り候。我ハ改心ニ申上
 ン。南ノ商人ニ改心ヘキカト亦分り候。欠点ハ
 昔ノ方ニテ全無アラク（自分モ亦）シテ何レモ
 ムツケテ多少カラント存候。望しモ改心ニ申上
 ン。六ツケ敷物ト云フコトヲ知り候ハ、改心出
 来候事ト存候。兎ニ角當時ハ責任ヲ重シ人ノ事トセズ熱
 心ニ注意致居候間御安神被下候。
 新田ハ追々勝手モ分り忠実ニシテ一部ヲ任スニハ
 實ニ欠点無之候様相成候。併シ意見ニ至リテハ極小サシ。
 右四人共多少欠点ハ有之候モ兎ニ角何レモ信用出来各其
 長所ヲ仕用セバ将来望アリ当家ニ於テノ利益少ナラスト
 存候。
 予テ先生御心配之件ニ付予メ今日之処ノ成跡ヲ御報告申
 置候。幸ニ御休神被為在度候。
 方今ハ小子取り居候処ハ毎日午前八時ニハ必出店、午後
 四時或ハ五時ニ帰宅、夜ニ入り教場へ折々出掛ケ居候。
 不精神者ハ嚴重ノ大目玉ヲ食ハシ、忠実者ハ能愛シ亦賞
 与ス。此半季間ニハ店員ノ氣風ヲ一新シ得ルノ考ニ御座
 候。○商業学校生今度四人雇入れ候。何レモ成跡宜候ニ
 付追々実地ニ馴候ハ、大ニ利益ト存候。○予テ御承知之

且、後モ相違ハシテ御事務ニ情シテ御座ル大ニ校務委員會
 未御開成ニ申上候御座ルニ、其後モ御座ルニ由御座候事
 未御開相成不申哉。岩崎氏モ土倉氏モ既ニ在京之由御報
 道有之候得共、各自要用モ御座候事故未御手順相付不申
 ト存候。爰ニ大阪ニテ有ル学校長（私立ニテ学識モ無愚
 者、予御察アラン）此比有法方ヲ以テ、奇附金募集之計画
 アリ。其法タルヤ五ヶ年間ニテ三拾万円集ル法ノ由、承
 リタル処ニヨレハ略ホ小子出案ニ似タリ。併シ返済或ハ
 花クシ等ノ法ニアラズシテ先構金ノ如キ仕組にて、出金
 者ハ一文モ損セズ出金仕安キ法ノ由、未発表セサル故原
 案書ノ如何ナル哉ハ実見セザルモ、友人ヨリ承リタル処
 ニヨレハ速カラス募集ニ着手ノ由ニ御座候。追々色々考
 候者モ御座候ニ付後レテハ如何ト存候。万々御如才モ無
 之義ニハ候得共、折角御熱心種々御苦心ノ御事業余リ
 延々ニ相成テハ愚者ニ先ンゼラレル恐レアラサルカ、小
 子之意見ハ元来先生トハ取ルベキ法方ニ付テ異ナリ候ニ
 付只先生ニ御任セ申上候故今更彼是申上候義ニハ無之候
 得共、聞込候ニ付御算考迄ニ愚意申上候迄ニ御座候。○
 井上秀子ヨリ承り候御事務、龜子養子之義ニ付彼是御配
 慮之由御厚意之段奉厚謝候。○御繁用之中当事業ニ付テ
 モ常々御心頭ニ被為置彼ノ横浜縮緬輸出之件御申越戴難

書簡2 一八九九（明治三二）年四月一二日

以熱心種々御苦心ノ御事業余リ延々ニ相成テハ愚者ニ先ンゼラレル恐レアラサルカ、小子之意見ハ元来先生トハ取ルベキ法方ニ付テ異ナリ候ニ付只先生ニ御任セ申上候故今更彼是申上候義ニハ無之候得共、聞込候ニ付御算考迄ニ愚意申上候迄ニ御座候。○井上秀子ヨリ承り候御事務、龜子養子之義ニ付彼是御配慮之由御厚意之段奉厚謝候。○御繁用之中当事業ニ付テモ常々御心頭ニ被為置彼ノ横浜縮緬輸出之件御申越戴難



事業計画の中ナリ。日々報告ヲ以テ夫々打合、電信ニテ夫々命令致候。先生阪地ニ御出之比トナラ当時事業ノ取り方進歩ノ度ハ随分変化致候ト存候。中川モ一寸中帰りセシ時驚キ居候迄皆々ハゲシク勉強致整理相付申候。其かわりニハ随分病人カ出来マス。我事ト一所二日々ノ事業ヲ取ル者ハ随分クタヒレマス。中山之如キハ何分田舎者故余程困リ候ト被存候。併シ相かわらず実意ハ御座候得共追マクラレテ斗リ居リ升。併年ヨリテモ進歩セねハナラヌ、然ラサレハ青年ニ馬鹿ニサレル道理ヲ申聞、修行中ノ心得ニテ繁ヲ忍隠セヨト申付御座候。我事ハ益々無病ニテ聊ノ苦モ感シ不申、理事ト支配人ト職務ヲ併シテ致候モ尚余暇アル心持致候。六十才迄ハ大丈夫ト此節感有之候。幸ニ御休神アリタシ。色々御面談申度義モ種々有之候得共余リ長文ニ付後便ニ残候。匆々

浅子

成瀬先生 親展

麻生君へ宜御伝被下候。東京支店々員亦白神等ニハ可成進歩ノ御咄被下候。田舎者クツクニテ困リ入候。咄トカ長相談ハ止メテ未出来上リタル者テ無イマダク修行中ナリ。出来上リタル者ト自信セ又様呉々御教示願度候。青年等ト友ニ共ニ事業ヲ取り少時間モ手ヲムナシクセヌ



事ヲ御申付被下候。考テモ余リ明案ハ出マセヌト存候。
只々モソツト勉強力ヲ養コト必要、随分田舎者ハ怠慢放
任甚敷候。

〔欄外〕明治三十二年四月十二日

〔註〕封筒表 東京日本橋区川瀬石町十八 白神與七方
成瀬仁藏先生 親展。同消印 三十二年四月十三日。封
筒裏 大阪市西区土佐堀壹丁目 広岡脩竹 四月十二
日。同消印 三十二年四月十四日。

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話二編である。

式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話

1

大学部第二、三学年にて —明治四十四年七月五日—

婦人の生活に対する理想

今日あなた方とは非達して見たい、協力して実現して見たいと思ふのは、我々の生活、殊に御婦人の生活に関

する問題であります。始めに其の理想を申しておくならば、御婦人の生活と云ふものを、も少し幸福に、も少し美麗に、も少し自身に満足の行く様にししたい。

生活には波瀾、進歩が必要である

そこへ行くには、もう少し有効に、もう少し美麗に、もう少し幸福に、そして、もう少しあなたの生活が進歩的でなければならぬ。然るに、長くあなた方と共同生活を経験致しました所によりますと、御婦人の生活は余り単調である。余り繰り返す事が多い。余り感情の上に、動機の上に小さい衝突、細かい軋轢が免れん様である。も少しあなたの生活が有効になり、美になり、多趣味に豊穡になるには、もう少し仕方に高低があり、波瀾があり、進歩があると云ふことが必要であると思ふ。

生活の高調

そこで、私は是れについて自分に試験的に大分行うて見ましたことを、此にて丁度夏お別れする前に、あなた方の御参考に呈したい。あなた方が夏お帰りになるについて、私が「五号」に書きましたことは、生活の調律とでも訳しましよーか。言ひかへれば、生活の高調、若くは生活の高潮と書いても宜しい。併し其の深い考へを、到底短い論文に顕し尽くすことは出来ぬ。故に、其の論文を組み立つる為に使ひました材料、及び生活に実験致

しましたことを述べておく必要があると思ふ。

そこで、其の論文に書いてあることと、所々に使うてある六かしい語について今日少しお話しすれば、生活の高調、及び其の生活の高調に至る道は何であるか、如何にすれば其の高調に達するを得るかと思ふことについて、簡短に述べよーと思ひます。

我々の生活は律動である

我々の生活は律動である。広くは宇内の進化、又は人間の歴史は音調であると云ふことは、学理も音楽も美術も宗教も、同意致して証明する所である。其の証明、其の訳は今日は申しません。寧ろ論文の中に論じてあります夫れよりも奥にある意を話したいと思ふのである。

我々の生活は複雑で、抑揚、高低がなければならぬ

我々の生活は単調ではいけない。複雑でなければならぬ。変化がなければならぬ。其の変化は抑揚、高低、動揺、波瀾が必要である。其の抑揚、高低、動揺、波瀾が、動揺、波瀾が必要である。其の抑揚、高低、動揺、波瀾が、時と空間との関係よろしきを得て、真の人生の調和が起ると云ふことは申す迄もないことである。併し今日最も

私が申したいことは、其の高調と云ふことである。大波瀾と云ふ所にある。此の波瀾と言ひましょか、高調と言ひましょか、強度と言ひましょか、其の最も高く進み、最も深く達し、最も強く緊張すると云ふ、之れがあなた方の生活に欠けて居る。其の為に、も一つの変化、も一つの進化、も一つの向上、も一つの生れかはりが出来ないのである。病気が治らんのも、風が改まらんのも、実力も一つ出来ないのも、生活の高調と云ふことが出来ないからである。之れは、長い間の経験によつて、そゝ云ふ結論を拵へることが出来ます。

高調とは人格の深さと広さが最高度に達したことを言ふのである

そこで此の高調に達する、極度に届くと云ふことが必要である。人間の究極の目的は、其処に達しよと云ふことである。其の高調と云ふことは、之れを人格の發揮とか、力の緊張とか、意志の集中とか、有頂点に達した状態とか、熱心とか、誠心一到とか、いろいろの詞を以て表すのであるが、つまり之れを分類して申すならば、人格の深さと広さとの最高度に達したことを申すのである。之れ迄の解釈によれば、高調とは高度の深さに達し

たことを申すのであるが、併し今日の研究の結果を申すならば、高度と広度との融合を以て出来たもので、之れを我々は、Conscious 意識と言ふのである。

其の意識には様々の階級がある。其の一番上にあるものが人格、或は Conscious の表皮と云ふのである。夫れから其の次の深さ、又其の次の深さと云ふものがある。其の深さを英語で Intensity と申します。Intensity とは、熱ならば熱の非常な高度に達したものを言ふのである。其の拡がりを Extensity と言ふ。我々の Conscious には広さと深さとあつて、其の拡がりは物質である。其の物質の拡がりは、我々の身体にしても神経の末端にある。表皮の一番上にあるものは感覚である。故に此の表面は、人格の末端は、四圍の境遇と接触して居る。直接に反応して居る。之れが人格の拡がり、大きさである。人格の深さと云ふのは、Time の関係である。永続の関係である。寧ろ Intensity とは、長い間の経験が積み上げられたものである。故に、我々の人格の深さは先祖から数代、或は数十年代続いて居る処の力である。故に寧ろ此の Intensity と云ふのは、時間の関係であります。

そこで、今日我々が人格を養成する、又は知識を貯へる習慣を養ふと云ふことは、全く此の人格の深さを強めることと、人格の拡がりを増すと云ふことに過ぎないの

である。横に拡げて行く関係と、縦に深く経験を強めて行くこと云ふ、此の二つの関係に過ぎないのである。

そこで人生の生活は、其の両関係が常に動揺し、常に変化してやまないものである。其のやまない活動、やまない変化の調子が人生である。故に、人生には何時も高低、波瀾が絶えないのである。

何人と雖も、此の高低、動揺、波瀾は免れないのみならず、之れがある可き筈であるが、只其の生活に大波瀾の起こる人と小波瀾の起こる人とある。私が今、高調の経験があると言ふのは、其の大波瀾が起こるよゝな力があると云ふことで、御婦人の生活は小波が起るに過ぎない、表皮の動揺に過ぎないと言つてもよいと思ふ。夫れであるから、大人物が出来ない所以である。御婦人も興味ある生活、も少し幸福なる生活、自分も人も感心する美を發揮するには、も少し大きな波瀾が起らねばならぬ。之れを海に譬ふるならば、上は只海になつて居る。併し此の下は、幾百丈、幾千丈いつて居るかわからないのである。大波の高さは非常に高く大きくうつけれども、其の力は非常に深い所から起つて、深さは測り知るべからざる、当る可からざるものである。

夫れで我々の生活の高調も、全人格の上に其の変化を及ぼし関係をつけることにしないと、浅薄なる人間、薄

弱なる人間に陥つて了うのである。つまり、こゝで Intensity と言へば、情の浅い処は Senses と言ひ、深い処は Emotion と言ふのである。目に見、耳に聞き、口に食する如きは浅いものであるが、情緒とか情操とか云ふことは深い処から出たものである。此の Emotion は長い間、古い経験を積み重ねて出来たものである。そゝ云ふ経験が現場の感じに呼び起こされて、一緒に其処に現れて来るのである。我々が物を見て直ぐわかる、鳥である、虫であるとかわかるのは古い経験であつて、夫れが感情の世界に入つて感ずるのである。

其の感じの強い人が Intensity の深い人である。たとへば愛ならば、ほんとうに熱誠の籠つた深い愛であつて欲しい。面白いならば、其の楽みが非常に深いのが宜しい。其の例を言へば、髪をぬいたよりも齒をぬいた方が痛い。又、夜の行灯の光りよりも、昼の日光の方が強いと云ふ。併し其の刺激ばかりでは、私共の感情 Emotion はきまらないのである。つまり、反応で古い処の感情経験が呼び起こされて始めてきまるのである。又、私共が高調に達すると云ふのは、深い処の感情が其処に動いて、其の感情の熱度が非常に強くなつて来なければ起らぬ。そこで、私共の最も深い処の情が起つて現れて来るものと考えへても、間違ひではないのです。

そこで、私共の日頃から修養し学問して、自分の力を育て、行くと云ふことがも一つ根本に達して行かねば、も一つ高調に達すると云ふことが出来ない。そこで、此の間からの事に結びつけて、力の發揮、人格の救助と云ふことについて考へて欲しい。

記憶力の必要

あなた方の学問、あなた方の修養と云ふことが、只人格の表皮に止まらずして、も少し深い根底に達したいと思ふ。そこで詞をかへて言へば、力の保存、之れに必要なものは記憶力である。あなた方学生として、新知識を貯へ、新習慣を作つて行く上に、此の記憶力と云ふものが非常に大切であります。殊に、日本の人は外国語を学ぶ外にも漢学をしなければならぬ。古い国語をも覚えねばならぬと云ふ訳であるから、覚えねばならぬことが沢山ある。然るに、そゝ云ふものを一番浅い処の表皮の間に貯へてある。之れが非常に不経済である。あなた方は夫れを一番深い所の根に持つて行つて、植えつけておかねばならぬ。あなたの人格の中に、永久保存せらるゝ処に貯へておかねばならぬ。其の永久の蔵は何処にあるかと云ふと、表皮ではない。第二、第三の深い処に關係を

つけて、其の要素と化しておかねばならぬ。

そこに二つあつて、記憶力の Extensity と記憶力の Intensity とある。記憶力の Extensity とは画である、像である。画のよゝな拡がりであつて、之れを鸚鵡的と言ふ。第二の Intensity と云ふ深さのある記憶力は、之れを Habit と言ふ。之れは同化力から出来て居る。私共の中にある処の傾向、銘々の中にある処の天才は先祖からのもので、或る人は之れを人類的記憶力と言ふ。其の人類的蓄積であつて、永く失はれない処の記憶であつて、此の二つに歸するのである。

そこで、我々が日々学ぶ処の新知識を全人格に結びつけて、一度得たならば決して失ふ事のない様に保存しよゝと思ふならば、之れ迄の経験に結びつけて、あなたの学ぶ知識は皆仮説として帰納的方法によつて取らねばならぬ。夫れを一々事実に徴してしなければならぬ。次には比較力である。それから得た概念を比較して、關係をつけたのを推理と言ふ。知識が知識として止まつてはだめである。其の主義、理想が實際に適應されなければならぬ。之れが即ち演繹である。斯う云ふ意識の階段を経て、表皮の像からして、行為の習慣となつて生活に應用したならば、之れは始めて人格的に織りなされた所のものである。そゝして之れがいろいろの感動となるから、

忘れることはありませぬ。一度印象したならば、決して失ふことはない。之れが、我が力として保存することが出来る一番有効なものであります。之れによって、又人格を構成することが出来るのであります。

構成本力の必要

次には構成本力、即ち知識の構成本力である。之れを名づけて、英語では Idea と申します。Idea は、又之れを觀念、或は思想と言つてもよいのである。

此の Idea は「ジー云ふものかと云ふと、つまり形式を拵へたに過ぎない。やはり心に描いた処の一つの画に過ぎないのであります、未だ構成だけでは力にはならぬ。

Knowledge is power

西洋の諺に、Knowledge is power と云ふことがある。此の Idea は何か構成されて筋肉に表はられて来るもの、五官に影響を起して来るものであるけれども、之れは意識の小波に過ぎないものであります。も一つ、之れが深くなつて来なければならぬ。人格の Intensity に結びついて、力とならねばならぬ。其の知識が理想と云ふもの

になつて来なければならぬ。我々の拵へた法則、主義、又は規則と云ふものに鑄込まねばならぬ。向ふにか、つて居る処の形に必ず達して行く、其の階段には必ず自分が達しなければやまない、其の形式に必ず自分がはまり込む、夫れを実現すると云ふ非常な欲望、熱心が起り、精神が活動して来る。夫れをさして理想と言ふ。其処に達しなければ我々の知識は死したものであるから、到底、大波瀾を起すことは出来ないのである。

我々の理想は強度の Intensity とある

そこで理想とは、我々の最も強度なる Intensity の活動する状態を申すのである。其の理想が出来、其の目的に従つて我々が活動して行くことを、人格を発現すると言ふ。品性を養ふと申すのであります。此の理想が、即ち我々の目的であります。

目的は、即ち私共が客観的の外の境遇に向うて居る、我々のはるか向ふにかけて居る処の一種の目的物である。其の目的物に向つて居る所の知識と名づけるものは、私共の深い処、Subconsciousness の中にある。

自尊心の必要

又、其の根にある主観の方から見る所の力が働いて居なければならぬ。夫れを指して、Self-making attitude 自作的態度と言ふべきもの。其の自作的態度の Essence は何かと云ふと、自尊心 Self-respect である。此の自尊心とは、我が中に在る人格的価値、我が真価値を自分で認める力。私は是れだけが出来る、自分は斯う云ふ人間である、是れだけの事が出来ると云ふ価値を認める。是れは、たとへ人から誤解を受けよと、悪く言はれよと、自分にはどれだけの徳があるかと云ふことを認める。是れ程尊いものはない。之れが出来ずに、自分で自分を信ずることが出来ぬのに、人がどして認めてくれよか。自分で自分が認めらるゝ力、自分で自分の価値が認めらるゝ力、是れ程尊いものはない。自分の中に非常に尊いものが潜んで居ると云ふことが認められたならば、是れ程勇気を与へるものはない。是れ程よい暗示を与へるものはない。是れ程深い信仰の起こるものはない。私共が非常に深い大洋のよゝな意識界に大波を起こすものは、一つは高調であるけれども、一つは此の自尊心である。此の自奮力である。之れが、私はあなた方御婦人によほど欠け易い、自分の中にある価値を認めにくい、又、い

ろいろ毀譽褒貶に由つて自分の価値までも消し易いと思ふ。夫れで、私があなた方に望む処は、自分で自分の力を養ふよゝになさること。之れが最もよく力を保存する方法であり、又最もよく力を發展する方法であると思ふ。

理想の二方面

又、理想には二方面あつて、Personal idea と Social idea、即ち人格的理想と社会的理想とがあつて、此の二つが融合致しまして始めて深い人物となるのであります。併し、私は之れをさして、世界的理想と申すのであります。(人格的理想と社会的理想と Subconsciousness と共同して出来たもの)即ち、此の地球のこの3を包んで居る処の大洋の広さ、深さの人格と申します。併し、人間は夫れだけでは満足は出来ません。猶其の大洋を一層深い海に通じて高調に達する。之れを宇内と云ふ、其の宇内の広さに拡げる。之れをさして、宗教的生活と言ふのであります。

今まで申しました理想は、人格的から社会的に拡がりました、其の深さも個人意志から社会意志迄、深入りを致しました。今度は、其の以上の関係であります。即ち全体の関係で、是れ迄のものは部分と部分との関係であ

りましたが、此の上は、部分と全体の関係をつけて行かなければならぬ。其の目的は宇宙の目的で、其の意志は神の意志と同じものである。其の理想は宇宙の真、善、美の極致であると言つてもよいのである。即ち、我々の感情と意志とが融和して出来て居る処の最大の意志、目的に自分を捧げる。其の為に自分を忘れる。之れが即ち、健全なる強固なる意志であり、健全なる強固なる人格である。即ち、宇内と云ふも一層深い処の海に通じたものであり、其の目的にかなふ処の人道とか愛とか云ふ其の傾きに全身を捧げる。其の完全の為に全く己を Devote する。之れが即ち、我々の言ふ処の全人格である。其の愛、其の信、総ての融合して居る処の宇宙の意志に己を Devote する。汝の「御心を成させ給へ」、其の意志に全く自分を Devote する。之れが、昔から数世紀間にをりをり現る、偉人であります。

Self-devotion

此の Self-devotion、己れを捧げる、己がなくなる、只、目的、理想と言ふか、或は全体と言ひますか、我々がつまり自分と最も深く、即ち無限に深い処の Conscious、無限に大きい処の全体と云ふものと関係あることがわか

り、夫れに真に融合する。之れが何も言へない処、殆んど自他がわからない、自分と云ふものが忘れられて了う処の境涯、之れを高調と言ふのである。之れが太陽の high Ether の如き、或は Astral light の如き、深い所の太平洋の波が活動致します。活動の間に来る処の高い波、之れをさして人生の高調と申します。

夫れで、此の深い Consciousness を日頃から養うておかねば、到底深い処へは行かないのである。我々の修養が只表皮の間に止まって居るならば、其の活動は小波の如きものに過ぎないのであります。夫れで、も一つ大きい波を立てる、も一つ高い波を立てる。此の平坦なる国に生れて、此に大波が起こらなければ、将来の進歩、確信を望むわけには行かないのである。

我が国に於て、又我々其の一要素を作らうと思ふ処の、又学生諸君が重んじて居る様な高い波は、あなた方銘々では、一人だけでは到底斯くの如き大波は立てられんと云ふ事である。之れがわかるや否や歴史を研究致しまして、如何なる強さ、如何なる拡がり、斯くの如き波を立てるには、限りなき深さと限りなき拡がりとなければならぬか。つまり一言で要点を申すならば、度々繰り返へされた処の人生に経験され、進歩された高潮からなれる凡ての人類と、今ある処の人類とが最大の

Extensivityである。そ—して、一万年の過去と未来とに由つて出来る処の Extensivity と Intensity とが調和されて、始めて高調をなし得ると思ふ。

我が国にも、我が学校にも、桜楓会にも、銘々其の高調に達する処の生活をしなければ、到底此の大波は起らない。其の時代の精神、宇内の潮流が、も—一層高調に達しなければならぬ。

類似の法則と接続の法則

其の高調を作る一要素としては、過去と云ふものがある。過去は何かと云へば、やはり Intensity と Extensivity とによつて作られ、且つ再現するものである。其の再現には二つあつて、類似の法則と接続の法則とである。此の新らしいものと古いものが結びついた関係が明らかでない、記憶は呼び起されぬ。又、接続の方は、其の時の高調、其の時の自分と、其の時の境遇とが適合したので、其の通りのが保存せられて居る。そ—して現在の知覚と共に呼び起されて、我々の今日の意識が出来る。又、長く続いて居る宇宙と此の社会とが適合する。其の反応である未来とは何であるか。やはり我々の古い経験と現在の実感とが結びついて、之れが創造せら

れて将来の自我があり、将来の境遇がある。其の間の適合が将来である。故に今の力、今の感覚は皆、過去から出来たものである。

其の目的は即ち将来である。故に今日の我々は過去、現在、未来が一つになつて活動して居るのである。其の過去、現在、未来、凡ての自我の協同から出来たものと、此の宇宙との適合から出来た処の思想、感情、情緒、或は喜び、幸福、満足と云ふもの、名状すべからざるものが、之れが人間の真価値である。故に、個人個人ばかりでは出来ないのである。私共が只単に皮相の働きをして居り、又只狭い処の自我に満足して居るならば出来ぬことと、此の広い天と地と又社会と融合して、共通的働きが出来て始めて高調することが出来るのである。此の意味は深重であつて、到底詞には言ひ表せないのであるけれども、凡その処がわかつたならば、銘々で深く研究して、此の高調に達することが、將に十年を終へて十一年を迎へる其の夏の時に於て、誠に大切なことであると思ふ。故に、校の内外にあるに拘らず私共が出来ただけ高調に達して、愉快なる音楽を奏して見たいのである。御婦人には未だそれが出来にくいのである。ど—か、皆さんが野蠻時代から来て居る小波瀾に妨げらるゝことなく、最高調にお達しなされることを希望致します。

第一学年生まとめの会 — 明治四十四年七月九日 —

修養上最も大切なことは自分を知ることなり

皆さんから経験を色々聞くことは出来ませんから、只これだけのことを聞いて、大体の事実を判断したらよからう。先づ修養をするにも、力を養ふにも大切なことは、自分がわかる、自分の価値がほんとにわかる、自分の内にあるもの、又自分の内から出て行くものがほんとにわかると云ふこと。之れが誠に大切なことで、之れが自分の力を出すと云ふか、又自分を圧迫し、きずつけると云ふこともあるのですが、中々見分け悪いのである。其の訳にもいろいろありますが、夫れは今こゝで申さない。

其の現れ方に二つあって、一つを自尊心とか自敬とか言ひ、其の反対の者を自暴自棄とか言ふのである。あなた方の問題に自覚と云ふことがありますが、其の要素

はやはり自尊、自敬である。併し、人に褒めらるゝと云ふことも時には間違ひがあつて、価値以上に思はれることもあります。おあいそうに言はるゝとわかつて居つても、何やら嬉しい様に感ずることもある。又、其の反対に、全くないことを企て、居るよゝに言はれたり、陰で伝はつて居るとか云ふことを大層心配する人もあるけれども、世の毀誉褒貶によつて浮いて見たり沈んで見たり、夫れがために喜んで見たり失望したりすることもある。けれども、たとひ人からあなた方が誤解せられても、夫れは一大事と云ふ程のことではない。ほんとに大切なことは、自分の内に価値があるかないか、ほんとに徳があるかないかと云ふこと。夫れより他に問題は何にもないのである。自分で自分の事を感じし、自分で自分の力を満足する。人に知つて貰ふ必要はないのである。自分は

之れに由つて居る、之れが自分の価値であると云ふこと、之れが一番大切であります。

自分には何も力がないのに心と違つた事を言つて、いろいろ噂を立て、人からちやほや言はれて喜んで居る人がある。之れはうぬぼれである。うぬぼれ、高慢は根治しなければならぬ。何人もに吹聴する必要はない。ほんとに力があるならば、人は自然に尊敬するのである。我々学生の中にありがちな弊はうぬぼれである。も一つ御婦人にありがちな欠点は自暴自棄である。自分で自分を軽蔑し、自分で自分を捨て、居る。斯う云ふことでは力が出よがない。此のうぬぼれにも陥らず、自暴自棄にもならぬ、ほんとに self-reliance が出来たかどーか。其の出来ると云ふことが、完全無欠と云ふ訳ではないが、此の二つを反省なさつて、ほんとの所を聞きたいのであります。

・ 自敬の出来る人は……………

・ 自暴自棄になり易いと思ふ人は……………

・ うぬぼれ心を抑へることに骨が折れると思ふ人は……………

……………

も一つ、実行と云ふこと。会などで団体と共に修養することなどは喜ばぬ人がある。昔から我が国では、高僧と云ふよーな人は深山へ入つて一人で行などをするこ

とがある。之れがほんとーであると云ふよーに思ふことがある。此の点については私、余程申したつもりであるが、私共の実践躬行と云ふことは確かに道德的行為である。之れを二つにして、個人としての行為と、人に対する行為とある。斯う分けて言ふけれども、実際はそー二つに分けられるものではない。人に余り関係のない、只一人ですると云ふことはないものである。

たとへば此の間死にました、数千否数万と云ふ人を動かしたムーデーと云ふよーな人が、会堂へ入る前には三時間或は五時間、人に面会を謝絶して祈つたと云ふ。夫れは何の為めであるか。只自分の為めではない。如何にすれば、人を救ふことが出来るか。此の国、この迷うて居る聖霊、之れを救はんが為めである。人である。人の為に動いて居るのである。クリストも山に登つて、或は人の知らぬ所で深く祈られたのは皆、人の為めであります。

釈尊は自分の大きな宮殿もあつた、奴婢もあつたけれども、夫れを悉く捨てたのは何の為めであるか。遍く天下の衆生を濟度せんがためであります。

団体と個人

私が一人で部屋に居る、一人で修養をして居る、夫れは何であるか。我が国の将来、我が国御婦人、此の多くのあなた方銘々の事、又は共に働いて居る人々のことでもって、頭はみたされて居るのである。自分はないのである。夫れで団体から離れた個人と云ふものはないのである。

知識と実行

も一つ、知識と実行、或は理想と實際、之れが一致しにくいと云ふ考へ、之れは非常な間違ひである。あなたの頭の中に之れをすると云ふ考へなしに、一つの行ひが出来るである。あなた方が大学に入る」と云ふ志なしに、身体が此の校へ来るかど一か。頭に考へなくして出来る行ひはないのである。然らば、精神があつて行ひがないと云ふ筈がない。精神とか理想とか考へとか云ふものは、やはり行ひの一部である。否、精神の要素である。夫れを別々のものに考へるのは誤りでありませぬ。斯う云ふことは、只詞があなた方を迷はせて居りはしないかと思ふ。故にこの三つのことを、よく弁へてお

いて欲しいのであります。

文科

殊に私の喜ぶのは文科である。之れは私が二年にも申しましたが、文科は今年は経済上の都合で外からの募集は致しませんで、普通予科からお入りになった方で一部が出来たのである。

文科と云ふものは、この十年間に、此の学校で言ふほんとの価値をあらはすことが出来なかつた。若しこの力が団体の働きにも個人の行為にも表れたならば、たとひ世間がど一言はうとも挽回することは敢て難くはない。是非ど一してもこの力を養はんければならぬと決心なさつたことは、非常に喜ぶ所であります。

英文科

次に英文科も、今は誠に数の上から小さくなつて居りますが、英文科の一年及び予科と云ふものが責任の重いことを自重なまつて、仮令力は弱くとも母校のために、国のために救ふ所の責任を負はねばならぬと決心して頂きたい。

山縣公、井上公、桂公と云ふよーな、私の国でも小身な人が、あれまでに立身をしたのみならず、何かとり所がある。夫れは何故であるか。己を捧げたからである。

我々も、及ばずながら一身を国に捧げたのである。其の時に力が発揮したのである。学力も確かに其の時進んだのです。日露の大戦に、我が国はどーして勝ったか。殆んど全滅と云ふ時に、乃木大将の率うる軍隊が決死の戦ひをして、旅順を陥れたのである。

英文科が少人数の中で己を組に捧げたから、力がつかぬと云ふのは誤りである。其の為めに、あなたの力はついたのである。人格が磨かれたのであります。故にその決心がついたならば、確かに文学部も英文学部も非常なる力が現はるゝのである。併し一方には、同情に堪へないのである。故に全体が之れを助け、之れを育てゝ、少しのよいことを賞揚し、少しのよいことを自認して、全体が力を合して本校の主義に叶ふてお立ちになるならば、必らず全級が奮ふのである。

殊に喜ぶますのは、予科の泥谷と云ふ生徒は尿毒症にか、つて、昏睡状態に陥つて医師も殆んど匙を投げたので、我々も非常に心配致しましたが、幸に蘇つて救はれました。之れは誠に幸である。どーかお互に身心共に健全になつて、総て組が復活するよーに、皆さんで氣をつ

けて、共同して進みたいと云ふことを希望致します。



成瀬記念館二〇一四年度・活動の記録

- 4・26(土)「ホームカミングデー」につき
 平常通り開館、見学者146名、分館
 見学者53名
- 5・9 西生田記念室、教育学科学生25名、
 教員1名、授業で見学
- 5・14 附属中学校1年生251名見学
 (分館も)
- 5・19 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)40名及び教員1名見学、説明
- 5・22 入学課から依頼のオープンキャン
 パス学生スタッフ51名見学、説明(分館
 は外観のみ)
- 5・23 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)13名及び教員1名見学、説明
- 5・24 銃砲一斉検査
- 5・27 展示オープン(西生田)。入学課
 から依頼の大学見学の高校生(1校)54
 名及び教員2名見学、説明
- 5・28 附属中学校PTA(目白キャン
 パスめぐり委員)4名見学(分館も)
- 5・30 空調機取替え工事
- 6・6 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)20名及び教員1名見学、説明
- 6・10 附属中学校図書室に高村智恵子の
 紙絵の写真12点貸出、6月20日返却。西
- 7・8 西生田記念室、収蔵庫空調機修理
- 4・1 「新任教員の集い」参加者見学(成
 瀬記念講堂も)、主事他説明
- 4・2 西生田記念室、大学入学式につき
 開室、見学者34名
- 4・8 展示オープン(目白・西生田)
- 4・9 桜楓会成瀬仁蔵研究会24名見学
 (分館も)、講師岸本
- 4・16 毎日新聞社、新発見資料「平塚ら
 いてう実践倫理答案」を取材、4月17日
 朝刊に掲載。成瀬仁蔵と「実践倫理」展
 プレスリリース
- 4・19(土) 西生田記念室、創立記念式典に
 つき開室、見学者27名
- 4・22 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)40名見学、説明
- 4・24 ことぶき鍋横会19名見学。図書館
 スタッフ、成瀬文庫の分類変更の週及入
 力開始
- 生田記念室ラウンジ、雨による浸水
- 6・13 展示オープン(目白)
- 6・14(土) 西生田記念室、附属中学校オー
 プンスクールのため特別開室、12名見学
- 6・15(日)「オープンキャンパス」のため
 特別開館、見学者156名
- 6・16 成瀬記念館運営委員会(本年度第
 1回)。分館特別公開プレスリリース
- 6・17 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)12名及び教員1名見学、説明。
 西生田記念室、収蔵庫空調機修理
- 6・20 西生田記念室、防災設備点検
- 6・23(月) 成瀬仁蔵生誕記念日につき特別
 開館、見学者31名。分館特別公開、説明、
 見学者51名
- 6・24 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)36名見学、説明
- 6・30 収蔵資料目録用写真撮影
- 7・4 第4回成瀬記念館分館移築検討協
 議会
- 7・7 入学課から依頼の大学見学の高校
 生(1校)19名及び教員2名見学、説明。
 雑誌『東京人』分館を取材、9月号に掲
 載

- 7・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)6名及び教員1名見学、説明
- 7・10 火災報知器交換
- 7・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)49名見学、説明。空調機修理
- 7・16 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)19名見学、説明。明治大学リバティアアカデミー16名見学、説明
- 7・17 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)47名及び教員2名見学、説明
- 7・28 本年度当館受入れ予定の博物館実習生3名と事前打合せ
- 7・31 消防設備点検(成瀬記念館分館)
- 8・1 電動書架定期点検。消防設備点検(成瀬記念館)
- 8・2(土)「オープンキャンパス」のため延長開館、見学者188名
- 8・3(日)西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開室、見学者306名
- 8・6 消防設備点検(講堂地下倉庫)。
- 首都圏私立公立中学高校理科教員6名見学、説明
- 8・13 秋の展示のため三綱領オリジナルを額装
- 8・19 消防点検
- 8・26(9・2)博物館実習(住居学科1名、文化学科2名)
- 9・4 「日本女子大学コレクション展」プレスリリース
- 9・6(土)附属豊明幼稚園入園説明会、附属豊明小学校学校見学相談会、附属中学校・高等学校説明会のため特別開館、見学者278名
- 9・14(日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者146名
- 9・19 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA35名見学、説明
- 9・20(土)展示オープン(目白)
- 9・25 分館移築前公開プレスリリース
- 9・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)40名及び教員2名見学、説明。展示オープン(西生田)
- 9・30 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため18名見学、説明(分館・講堂も)
- 10・3 文京区区民チャンネル(ケーブルテレビ)分館を取材
- 10・4(土)5(日)西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者合計20名
- 10・10 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)9名見学、説明
- 10・15 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」のため113名見学(分館も)
- 10・16 『収蔵資料目録』2000部納品。「戦時下の青春展」プレスリリース
- 10・18(土)19(日)目白祭につき平常通り開館、見学者合計709名(分館292名)。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計32名
- 10・20 附属豊明小学校3年生115名及び教員2名見学(分館も)
- 10・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)84名見学、説明
- 10・22 次回展示のため会場施工
- 10・25(土)26(日)西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計73名
- 10・28 展示オープン(目白)。NHK、「戦時下の青春展」を取材、3時のニュースで放映、NHK・NEWS WEBにも掲載
- 10・29 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)18名見学、説明
- 10・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)65名見学、説明

- 11・5 入学課から依頼の大学見学の高校
生(1校) 11名見学、説明。東京新聞「戦時下の青春展」取材、11月26日朝刊に掲載
- 11・8(土) 西生田記念室、附属高等学校説明会につき特別開室、見学者4名
- 11・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 38名見学、説明
- 11・15 西生田記念室、附属中学校説明会につき特別開室、見学者6名
- 11・17(月) 博物館実習の授業で施設見学、学生18名、教員1名。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名見学、説明
- 11・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 14名及び教員2名見学、説明
- 11・19 大もみの木航空写真・ビデオ撮影
- 11・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名見学、説明
- 11・27 第5回成瀬記念館分館移築検討協議会
- 11・28 「関口裕子染色作品展」宣伝物納品
- 12・2 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 50名見学、説明
- 12・5 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 5名見学、説明
- 12・8 西生田成瀬講堂運用委員会に出席(岸本)
- 12・13(土) 「入試相談会」のため延長開館、見学者44名
- 12・15 「関口裕子染色作品展」プレスリリース
- 12・17 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 11名見学、説明
- 12・18 文京ミュージズフェスタ2014(於 文京シビックセンター)に参加
- 12・20(土) 「平和の集い」のため延長開館、見学者37名
- 1・5 読売新聞、「関口裕子染色作品展」取材、1月13日夕刊に掲載
- 1・6 毎日新聞、「関口裕子染色作品展」取材、1月9日朝刊に掲載
- 1・7 「関口裕子染色作品展」図録(1000部)納品
- 1・15 展示オープン(目白)
- 1・19 NHK連続テレビ小説「あさが来た」チーフプロデューサー来校
- 1・23 朝日新聞、「関口裕子染色作品展」取材、2月18日朝刊に掲載
- 1・24 西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於 西生田成瀬講堂)につき特別開室、見学者58名
- 1・26 文京区の文化財パトロール、分館家具の所在確認のため来館
- 1・27 展示オープン(西生田)。大同生命広報、NHK連続テレビ小説の件で来校
- 1・29 成瀬先生告別講演記念瞑想会にて主事・吉良芳忠教授講演(成瀬記念館の30年)
- 2・1〜3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計74名
- 2・6 分館移築前撮影
- 2・7(土) 関口裕子さんギャラリートーク開催
- 2・12〜13 分館移築前撮影
- 2・14(土) 関口裕子さんギャラリートーク開催。西生田記念室、附属中学校新入生保護者会につき特別開室、見学者83名
- 2・19 西生田記念室、事務室空調機修理
- 2・23 消防設備点検
- 3・2 消防設備点検(分館)
- 3・4 創立者命日につき特別開館、見学

者33名

3・11 電動書架定期点検

3・20 展示オープン（西生田記念室）。

西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者51名

3・28（土）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者110名

二〇一四年度の成瀬記念館運営委員

佐藤和人館長（学長）、石川孝重家政学部長、永村真文学部長／成瀬記念館担当理事、山田忠彰人間社会学部長、吉井彰理学部長、川上清子家政学部通信教育課程長、伊ヶ崎大理教養特別講義1委員会委員長、佐藤克志教養特別講義2委員会委員長、島崎恒藏図書館長、三神和子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、高頭麻子生涯学習センター所長、真橋美智子附属中高担当理事（副学長）、大場昌子附属幼小担当理事（副学長）、後藤祥子桜楓会理事（6月まで）
蟻川芳子桜楓会理事（6月より）、吉良芳恵成瀬記念館主事、

二〇一四年度成瀬記念館構成メンバー

館長：佐藤和人、主事：吉良芳恵、館員：岸本美香子（主任）、杉崎友美、非常勤・梅原裕香、大門泰子、加藤きよみ、小林芳子（4月～6月）、佐久間妙美（7月より）、高橋未沙、宮内量子、山本文子（5月より）

博物館実習

二〇一四年度の博物館実習（第二五回）は、八月二六日（火）から九月二日（火）までの六日間の日程で行った。実習生は住居学科一名、文化学科二名で、企画展「開館30周年記念 蔵出し 日本女子大学コレクション展」の準備に参加した。実習生は成瀬記念講堂や分館、雑司ヶ谷霊園をめぐる本学の歴史を学ぶとともに、当館設立以来の収蔵品の中から興味ある資料を選びキャプションを作成、展示コーナーの一部分を担当した。このほか、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

業務統計

開館日数 目白 一八〇日
西生田 一四五日
入館者数 目白 約六八〇〇人
西生田 約一五〇〇人

資料提供

学園史関係質問受付および資料提供

出版・映像のための資料提供 九四件
一五件

その他

○『成瀬記念館 2014 No.29』の発行
2000部

○成瀬記念館展示のご案内（2014年度）の制作 3000部

○『日本女子大学成瀬記念館 収蔵資料目録1 旧成瀬記念室資料』の発行2000部

○図録『関口裕子染色作品展』の発行
1000部 ポスター300枚 ポスト
カード2000枚

博物館実習生受入れ（3名）

研修等参加(研究会・全国大学史資料協議
会東日本部会2014年度総会、その他・
文京ミューズネット、展示見学など)
資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一四年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

4・8～6・7

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「実践倫理」展

6・13～7・30

軽井沢夏季寮の生活

―軽井沢たてもの史展

9・20～10・19

開館30周年記念 蔵出し

日本女子大学コレクション展

10・28～12・20

戦時下の青春展

1・15～3・4

シリーズ「創る」(ア)

関口裕子染色作品展

〔西生田記念室〕

4・8～5・20

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「住」展

5・27～7・30

軽井沢夏季寮の生活

―軽井沢たてもの史展

9・24～12・19

激動の時代を生きて

―高良とみ展

1・27～3・3

日本女子大学のおひなさま展



●成瀬記念館(自由)

展示の記録(二〇一四年度)

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「実践倫理」展

2014.4.8(火)
～6.7(土)



平塚らいてう自筆答案

創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は成瀬自身が教鞭をとり、最も重視した課題である「実践倫理」を取り上げた。「実践倫理」は本学独自の課題であり、現在は「教養特別講義」と名称が変わっているが現代まで受け継がれる講義である。学校教育を「生涯進歩発達するための方法を学ぶ場所」と考えた成瀬は、学生に幾度もレポートを課し、自ら考え、意見

を述べることを求めた。展示では、実際の講義を筆記した講話筆記録、最近の資料調査で発見された平塚らいてうや宮澤トシの答案などを紹介した。

軽井沢夏季寮の生活
軽井沢たてもの史展

(自由)
6.13(金)～7.30(水)
および8.7,14,21,28
(西生田)
5.27(火)～7.30(水)
および8.3



展示風景

日本での初めての夏期寮として建設された三泉寮の増改築の歴史を紹介するとともに、軽井沢に次々と建設された東京女子

軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。今回のテーマは、三泉寮の歴史と軽井沢に建てられた学寮。

大学、専修大学、日本大学、東京女学館大学、実践女子大学、東洋英和女学院をはじめとする学寮を紹介した。展示に際し、各大学から寮の写真やパンフレットをご提供いただいた。

開館30周年記念
蔵出し

日本女子大学コレクション展

9.20(土)
～10.19(日)



展示風景

一〇月一八日で開館三〇年となるのに合わせて、通常の企画展では展示する機会が少ない資料を中心にコレクション展を開催した。「三綱領」オリジナルや成瀬の遺品である日本刀、サーベル、鉄砲、森村豊明会の大倉孫兵衛から贈られたオールド・ノリタケ、三綱領の複製のためには撮られ



博物館実習生が担当した展示

ついて調べて解説をつけ、実際にケースに並べて展示を行った。

写真のガラス乾板など、約七〇点を出品した。本展の準備には博物館実習生も加わり、それぞれ自分で選んだ出品資料に

戦時下の青春

一九九五年に実施した「太平洋戦争と日本女子大学（校）学生生活」アンケート調査結果の再分析を基にした展示。「日中戦争期」、「アジア・太平洋戦争期」、「戦時下の学生生活」の三部構成とし、戦時下の写真や本学が中心となって開催した戦時家庭経済展覧会で上演された大人紙芝居、学徒

10.28 (火)
～12.20 (土)



大人紙芝居

る体験型展示を取り入れ、防空壕体験コーナーを設けた。メモを取りながら熱心に見学したり、防空壕の暗さに驚く学生の姿もみられ、盛況であった。

出陣壮行会で持たれた校旗、エプロンもんぺ、戦時下に記された日記、学園に関する防空関係公文書などを展示した。また、本館としては初の試みであ

シリーズ創る(7)ー 関口裕子染色作品展

造形芸術の分野で活躍する卒業生を紹介するシリーズ創る「第七弾」として関口裕子氏の染色作品を紹介した。

2015.1.15 (木)
～3.4 (水)

関口裕子氏は、日本女子大学附属中学校・高等学校を経て、日本女子大学家政学部生活芸術科（住居専攻）に進学（新制一〇回生）。卒業後、絵更紗を故竹田十路に、ロウケツ染め、友禅染めを大澤敏氏に師事。一九九八年太平洋美術会展に初入選、二〇〇五年に会員となり、現在に至る。会期中は、関口氏による二回のギャラリートークを開催。展示では、染色作品約四〇点に加え、代表的な染色技法である「いも版」の作品制作の工程をパネルで展示、作品ができるまでの映像を上映した。繰り返し見学に訪れる人も多く、好評であった。



ギャラリートーク

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「住」

2014.4.8 (火)
～ 5.20 (火)

創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は、大学の住教育に焦点を当てた。

アメリカ留学時代から住環境に関心を抱いていた成瀬は、本学設立時から家政学のカリキュラムに住教育を取り入れた。そこで本展では、その住教育をより充実させた家政学部卒業生の井上秀(のち第四代校長)を始めとする教授陣を紹介、講義で使



明桂寮の台所

れたテキストや図面等々を展示、さらに一九〇一(明治三四)年に建てられた成瀬の住まいであつた成瀬記念館分館を紹介した。

激動の時代を生きて

高良とみ展

2014.9.24 (水)
～ 12.19 (金)

本学卒業生で、平和活動家として活躍した高良とみの生涯を紹介する展示。とみは、インドの詩聖タゴールやジェーン・アダムスなど国際的で幅広い人脈を持ち、敗戦後は女性初の参議院議員として一九五二年、



身の回りの品々

国交未成立のソ連に渡りシベリア捕虜収容所を視察、翌年には中国で在華邦人帰国交渉にあたるなど、世界を股に



タゴール掛軸

かけて活動した。

なお、今回の展示にあたっては、とみの御息女である高良留美子氏より多大なご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

日本女子大学のおひなさま

2015.1.27 (火)
～ 3.3 (火)

毎年恒例となった「おひなさま展」。日本女子大学の学寮や、卒業生宅などで飾られてきた明治・大正・昭和の雛人形を展示した。

七段飾りや市松人形のほか、牛若丸と弁慶、浦島太郎、高砂など、当時ひな人形と一緒に飾られていた人形も紹介。また今回は箆笥、針箱などのお道具類を多数紹介した。



明桂寮のおひなさま

成瀬記念館開館三〇周年特集

成瀬記念館と共に三〇年	井上潤	115
成瀬記念館開館三〇年に寄せて	西山伸	119
開館の頃	青木生子(談)	121
開館三〇年に寄せて	中寫邦	122
「成瀬記念館」1～30(一九八五～二〇一五)		
総目次／執筆者索引／人名件名索引		
成瀬記念館略年表		127
成瀬記念館(目白)／西生田記念室(西生田)展示一覧		135
成瀬記念館刊行物		137
		177

成瀬記念館と共に三〇年

井上 潤

軌を一にする

まずは、開館三〇周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

実は、成瀬記念館が開館してからの三〇年の歩みは、私自身の博物館人としての生活と軌を一にしている。

元々、日本近代史をプロパーとする者でもなく、ましてや渋沢栄一を専門に研究してきたわけではない私が、人物を記念する博物館での事業活動の具体的イメージを持ってないまま、一九八四年四月に、渋沢史料館学芸員として博物館生活をスタートさせたのであるが、この三〇年の年月は、成瀬記念館の成長と共に、貴館からも刺激を受けつつ私自身が成長してきた過程なのである。

共に歩んできたこの三〇年を振り返りつつ、多くの学びの機会をいただいた、その一端をご紹介します、お祝いのメッセージとしたい。

「博物館」としての確認・再認識

一つは、成瀬記念館が博物館相当施設の認可を受ける経緯にあたってのことである。渋沢史料館は、成瀬記念館より少し先行して一九八二年一月に登録博物館としてスタートしているという経緯もあって、博物館相当施設を目指すにあたり、その手続き方法や、その準備をはじめとして、認可を受

けることによるメリット、反対に受ける制約等について問われたのである。司書の秋山俱子さんが来館され、学芸員として対応させていただいた。もちろん大学内で専門的な知識を持った方々による検討もなされていたかと思うが、元々図書館が起点となりスタートしたということもあり、先行する博物館の現場から意見を求められたのである。まずは、その堅実な考え方・進め方に、刺激を受けた。そして、博物館運営について、単に大学での講義からだけでなく、様々な情報等から学び、それなりの知識を持っていたとはいえ、学芸員となつて間もない私を信用し、接してもらえたことは大きな喜びであった。強く責任感を感じ、正確な情報を整理しお伝えさせていただいた経験は、改めて「博物館」というものを追認でき、私自身の成長の大きな糧となつたのである。その後、小橋安紀子さんが、学芸員の資格取得を目指すこととなつたご報告を受け、本格的に動き出したことに、自分のことのように嬉しさを感じたことを覚えている。

また、成瀬記念館は、施設のデザインにおいて日本女子大学のそして成瀬仁藏の理念・精神をよく伝えているが、大学の歴史と同時にその理念・精神を示す基となる資史料を受け継がせる術についても問われた。ただ、空調機器が備えられた収蔵庫ではないが、古来の校倉造りの工法による設備を整え、十分に保存に対する意識が行届いていたことをお聞きしたのと、長年の図書館での経験に加えて、博物館として、資史料をどのように整理、保管するのかを尋ねられたが、その資史料の保存・管理に真摯に立ち向かわれる姿勢に、新米学芸員として、施設・設備より前に、資史料に向かう姿勢、博物館事業に対する一本通つた強固な理念の大切さを再認識させられたのであつた。

当時の渋沢史料館は、旧渋沢邸に残る大正期の建物を主たる施設として運営し、保存環境、整理状況で同様に悩み、模索を繰り返していたので、資料整理・保存のことに関して良き事例としてお話し出来なかつたが、個人的な経験値から、自館でも目指したい方向性等についてお伝えした。少々熱をこめすぎたかな？と、いまだ反省するところである。

戯曲「目白の雪の日」の出来い

次に紹介したいのは、日本女子大学の卒業生・大村嘉代子作の戯曲「目白の雪の日」を、写真を織り交ぜた朗読劇としてビデオ化するにあたり、脚本に目を通し、事実の確認等を依頼されたことである。洪沢栄一についてまだまだこれから学ばねばという思いを強く思っていた時期に、この戯曲を通じて栄一と女子教育との関係の一端を学ばせていただいた。あくまでも創作劇ではあるが、日本女子大学校創立に向けての成瀬、洪沢等の熱き議論から成瀬校長の告別講演翌日までの様子が描かれており、当時の社会における女子教育に対する考え方、学校設立・運営に関係する人々の強い想い、寄宿舎をはじめとして学園生活の様子がよく理解出来るものであった。事実確認のために、改めて関係資料に目を通した上で、この戯曲に触れたおかげで、当時の女子教育の実態が実感こもるかたちで学ぶことが出来たのであった。

女子教育を考え、伝える

お伝えしたいことは山のようにあるが、最後に紹介するのは、二〇〇二年に、私が主担当者として開催した渋沢史料館企画展『女大学』から女子大学へ―洪沢栄一の女子教育への思い―に多大なるご協力をいただいたことである。調査の段階での資料閲覧、貴重な写真・文書類をはじめ、大きな額、教育掛図や、顕微鏡等展示に供する資料のご提供、そして、図録等に掲載するための資料撮影に際しては、資料によっては展示室での撮影をご許可いただいたり、本来ならば無理なお願いであったことにもご快諾いただけただけことは、感謝に絶えないものであった。

関連事業として、成瀬記念講堂と合わせての記念館見学会、ビデオ「目白の雪の日」の上映会、中
寫邦先生の講演会、後藤祥子先生にもご登壇いただいた討論会等を企画し、展示とあわせて、単に女
子教育の歴史を振り返るだけでなく、将来にむけて求められる女性像や、そのような女性を育成する
にあたっての「女子大学のもつ意義」を考える内容とした。これら関連事業すべてにおいても惜しみ
ないご協力をいただいたのである。

近年、自らの講演の中で、洪沢栄一の女子教育について話す際に、日本女子大学校についても、自
然科学や体育の授業に力をいれていたこと等を紹介している。例えば、飛鳥山の洪沢邸で行われた第
一回目の運動会についてなどである。その時の写真やプログラムが残る事実をお伝えしたり、「世に
飛び出す」イメージを強く受けたことで、二〇〇二年の企画展の際には、二つ折りで開けると自転車
に乗った日本女子大学の生徒が飛び出す招待券をつくったこと、実際に当時、自転車競技で使用し
ていた自転車を、展示したいという思いから、各地をくまなく探したエピソードなどをお伝えしてい
る。その時の経験もかけがえのないものであり、良き思い出となっているのである。

以上述べてきたように、私自身、日本女子大学成瀬記念館を通して成瀬仁蔵という大教育者の指導・
薫陶を受けて成長させていただいた。改めてここに感謝申し上げ、締めくくりとしたい。

この先四〇年、五〇年、一〇〇年と発展し続けることをお祈りしている。

（洪沢史料館館長 いのうえ じゅん）

成瀬記念館開館三〇年に寄せて

西山 伸

大学関係者ならば皆知っていることだが、日本の大学は、一九九〇年代以来いつ終わるとも知れない「大学改革」の嵐の中にある。そして、その改革のなかで強調されていることの一つが「大学の個性」である。私がいる大学を含めて、国立大学のほとんどは文教政策の動向に応じて設置されたという事情があつて、もともと明確な建学の理念などを持ち合わせているわけではない。だから、そうした大学にとってみれば今になって「大学の個性」を打ち出すのは簡単ではない。

しかし、日本女子大学については、そうした心配はない。日本で最初の本格的な女子高等教育機関であり、戦後改革期にも初の女子大学設置にあたって中心的役割を果たした。いわば女子高等教育のパイオニアであり、リーダーである。そして唯一無二の存在である創立者成瀬仁蔵と、「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三標語に象徴される建学の理念。これほどはつきりした個性をもっている大学は、それほど多くはないと思われる。

しかし、大学の個性も、伝えていく媒体がなければ年月と共に忘れ去られていってしまう。組織が歩んできた軌跡をしっかりと残し、そしてそれを現在および未来に伝えていく、それこそがアーカイヴズの役割なのだ。

日本女子大学におけるアーカイヴズ、成瀬記念館が開館三〇年を迎えた。心からお祝いを申し上げます。成瀬記念館もまた、大学アーカイヴズの、そのなかでも特に大学史展示の先駆者である。私も、自分の大学で歴史展示を担当することになったときに見学を訪れ、資料の豊富さとよく考えられた展

示内容に感嘆したのを覚えている。

充実した展示の背景には、貴重な資料の蓄積があるのはもちろんだが（その蓄積は、昨年成瀬記念館が刊行した『収蔵資料目録Ⅰ 旧成瀬記念室資料』からも垣間見ることができ）、それぞれの資料についての地道な調査研究が不可欠なのは同業者であればすぐに分かることである。

資料の重視という姿勢も、今も刊行され続けている『日本女子大学史資料集』を見ればよく分かる。少し前のことになるが大学創立百年で編まれた『日本女子大学学園事典』といったユニークな業績も、資料重視あつてのことと拝察する。

私の所属する大学文書館よりはるかに先輩である成瀬記念館に対して、要望など言える立場になりが、あえて挙げるとすれば、沿革史の編纂である。日本女子大学には、戦前以来の沿革史編纂の伝統がある。それに加えて充実した資料の数々。アカデミズムの世界からも頼りにされるような沿革史を編纂できる条件は整っているように見える。

ちょっと蛇足を述べてしまったが、本誌『成瀬記念館』収載の業務日誌を見るだけで、成瀬記念館がいかに学内で重んじられ、また館員の皆さんが多忙であるか分かる。今後ともなお一層の発展を心からお祈りする。

（京都大学大学文書館教授 にしやま しん）

開館の頃

青木 生子（談）

成瀬記念館が創立された三〇年前、私は学長になりたてでした。もう、そんな歳月になるのですね。創立に当たり、記念館は女子大学の中心となることが相応しいと考え、まず、母校愛に燃えている諸先輩のご意見を聞いて歩きました。男性の入館は決して認めない、トイレも作らないとおっしゃる方の中にはいらしたのを思い出します。

母校にとつて、女子教育の研究こそが一番大切であり、突き詰めると前身の「女子教育研究所」に行き着き、そこから発展できると考えました（注・女子教育研究所の前身は「成瀬先生研究会」。広い意味での女子教育研究は、どのような時代にも通用する普遍的なものであり、尽きない問題です。みんなで考える必要があります。大いに議論しなければならぬ課題も多くあります。当時流行のジェンダー論なども、女子大であるからこそ本質論的に深めることが大切でしょう。偏らない女子教育の本質は、女子大の研究に相応しく、その舵取りをして欲しいと願いました。

今も思い出すのは学長時代に、他大学の学長先生方が話された言葉です。「建学の精神はあっても無きがごとし」というのが、大方の学長の正直な本音でした。それを聞いて「うちは違う！」と忘れたい印象を持ちました。「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」——人間として成長するための本質の総てが、この建学の教えに集中しています。本心から私は、記念館の仕事を「自分たちで出来る」「自分たちでやらねば」と思ったのを覚えています。

「建学の精神に立ち帰って明日への飛躍を！」と事に当って私は述べてきました。成瀬記念館が今後もその使命を果たし続けることを願っています。

（第九代日本女子大学学長・初代成瀬記念館館長 あおき たかこ）

開館三〇年に寄せて

中 島 邦

一九八四（昭和五九）年一月一日、成瀬記念講堂で落成式を行い、成瀬記念館の前で開館式が催された。日本女子大学創立八〇周年の記念事業の一つであり、開館まで紆余曲折の御苦労があった青木生子学長のテープカットのお姿を、感慨深く拝見していた。おだやかな光のみちた日であった。

記念館を立ち上げるようになって、記念館をどのような施設にするか、当時はあまり例がなく、手さぐりの状況ではじまった。開館のための展示、さらにその後の活動に、専任の秋山俱子さんを中心にほんの少しの非常勤を加えて、夜おそくまでかかった思い出がある。記念館を、固定的でいつの間にかほこりをかぶって変化がないという場にしたくない、いつも何か生き生きとした雰囲気のある記念館でありたいと願っていた。成瀬記念館では、生花が飾られていて新鮮な豊かな何かしらを得るものを提供したい、附属校から大学まで在校生在學生は勿論であるが、卒業生が母校を訪ねてきて、必ず足を運んでみたい記念館であって欲しいと思っていた。

以来、三〇年の月日の速さに驚くが、初めの願いをこれまでずっと保っていただけにいることは嬉しい。

目白と西生田の記念館及び成瀬仁蔵住宅（成瀬記念館分館）をかかえて、展示や公開を重ねてきている活動が、『成瀬記念館』の冊子には紹介されている。展示は毎年その年の記念となる事項に合わせて、あらかじめ事前に計画をたてていたり、卒業生の中に社会的に活躍されて来た方をとりあげたり、変化に富んだ展開をみせている。この三〇年の丁度その最中に、日本女子大学創立百年があり、

目白と西生田で「創立者成瀬仁蔵と共に歩んだ人々展」を行ったし、成瀬記念講堂を生かして、日本女子大学創立一〇〇周年の特別展を開催している。「成瀬記念講堂―未来を夢見てここに集う」の展示は、新聞でも紹介され、約三千人の見学者が訪れた。同時に記念刊行物として『日本女子大学学園事典―創立100年の軌跡』『年表 日本女子大学の100年』を出版、これらには、全学園をあげて、また関係者や卒業生の多くの方々の方々の助力を得ることが出来、現在も何かと役立っていると聞くと、これにかかわった一員として感謝にたえない。

その他のさまざまな展示が重ねられているが、毎年夏の博物館学芸員養成のカリキュラムに参加する学生の感想をよむと、改めて母校の歴史を再認識していることが語られ、印象深いものがある。学生や卒業生の意見もつと聞いてみたい思いがある。

昨年は春と秋に二つの展示が学外でとりあげられた。一つは成瀬仁蔵の行った実践倫理の講義とそれを聞いた当時の学生、平塚明（後のらいてう）や宮澤トシ（宮澤賢治の妹）らの答案の発見と展示が、四月の毎日新聞でとりあげられ、日中戦争から太平洋戦争下に学生であった卒業生へのアンケートを基礎とした「戦時下の青春」の紹介が東京新聞の一月にのった。それもあつてか学外の方の来館がふえたと聞く。二つの展示とも、今の課題が来館者をよんだと思われる。

その他、記念館の刊行物も多い。資料集や展示に対応する図録などが出版され、研究に役立ち新しい展望が開ける基礎資料である。成瀬記念館のもつ資料の豊かさを感じさせる。

刊行物としては毎年出版を重ねてきた『成瀬記念館』の冊子は魅力がある。日本女子大の歴史のさまざまな歩みとか局面が語られ、紹介され論じられている。

成瀬記念講堂と対置して、正門のすぐそばに建つ成瀬記念館は、日本女子大学のシンボルの一つとして今後も期待されるものは大きい。

その基礎となるのは、建学の精神であり、その継承と発展である。『成瀬仁蔵著作集』全三巻、全

巻併せると三千頁の大冊であるが、著作集に洩れた講話の類も漸次『成瀬記念館』の冊子や別冊で公になりつつある。近代日本にあつて先駆的な教育を主張し、実践した成瀬仁蔵像を問うと、現在は勿論、まだ未来に実現すべき課題が満ちている。さらにその基底に展開する思想も再認識する余地があり、現代において魅力的なものがある。

そして一九〇一（明治34）年の創立以来、百年余の精神の継承も変化も再認識する時であるように思う。

日本女子大学には残念ながら他大学にある資料館や学園史研究を推進する機関がない。成瀬記念館がその役割を担うことが求められている感がある。内なる精神が自ら外に現れる時代を刺戟する記念館であることを願っている。

（成瀬記念館初代主事・名誉教授 なかじま くに）

	刊行物名	発行年
図録	シリーズ“創る” (6) 福井貞子絵画展	2012. 1
図録	故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す 上代タノ	2013. 1
図録	阿部次郎をめぐる手紙展	2013. 9
図録	激動の時代を生きて 高良とみ	2014. 1
図録	シリーズ“創る” (7) 関口裕子染色作品展	2015. 1
ビデオ	女子大学創立八十周年記念式典を迎えて (編集)	1986
スライド	日本女子大学のいまむかし	1986
ビデオ	日本女子大学校寮舎生活・昭和7年 (再編集)	1986
ビデオ	日本女子大学成瀬記念館	1988
ビデオ	丘の春秋 (創立25周年記念映画・再編集)	1988
ビデオ	建物は語る 日本女子大学の90年	1991
ビデオ	日本女子大学の今昔	1993
ビデオ	日本女子大学の今昔 (改訂)	2009
DVD	故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す — 上代タノ	2013
DVD	激動の時代を生きて — 高良とみ	2014
DVD	文京区指定有形文化財 成瀬記念館分館 (旧成瀬仁蔵住宅)	2014

刊行物名	発行年
日本女子大学校資料集 5-4 日本女子大学校規則〔大正4-8年〕	2012. 3. 23
日本女子大学校資料集 5-5 日本女子大学校規則〔大正9-12年〕	2013. 3. 6
日本女子大学校資料集 5-6 日本女子大学校規則〔大正13-昭和2年3月〕	2014. 3. 1
日本女子大学史資料集 6 新制日本女子大学成立関係資料 〔GHQ/SCAP文書を中心に〕	2000. 3. 30
日本女子大学史資料集 7 日本女子大学校 大学本科・高等学部関係資料	2001. 3. 31
日本女子大学史資料集 8 日本女子大学附属高等学校詳細年表(1948-2002)	2003. 6. 30
日本女子大学史資料集 9 日本女子大学校通信教育関係資料	2005. 3. 31
日本女子大学史資料集 10-1 東京都公文書館所蔵 日本女子大学関係資料〔1900-1916〕	2007. 3. 31
実践倫理講話筆記 明治37・38年度	2009. 9. 30
実践倫理講話筆記 明治39年度	2004. 6. 30
実践倫理講話筆記 明治40年度	2005. 3. 31
実践倫理講話筆記 明治41年度	2007. 3. 31
実践倫理講話筆記 明治42年度	2012. 3. 31
実践倫理講話筆記 大正4年度	2001. 3. 31
実践倫理講話筆記 大正5・6年度	2002. 9. 30
日本女子大学成瀬記念館収蔵資料目録 1 旧成瀬記念室資料	2014. 10. 18
図録 大橋了介展—日本女子大学校・パリを描く—	1988. 1
図録 荻太郎展	1990. 1
図録 浮田克躬肖像画展	1993. 1
図録 荻太郎と亀本信子・山口都展	1995. 1
図録 柳敬助・八重夫妻展	1996. 1
図録 シリーズ“創る” (1) 「松江美枝子・ジュウリーの世界」展	1996. 10
図録 「平塚らいてう と その学友」展によせて 無限生成—らいてう・博史—	1997. 10
図録 「平塚らいてう と その学友／らいてう・博史」展によせて 無限生成—らいてう・博史—	1998. 9
図録 シリーズ“創る” (2) 宮地房江・染の粹	1998. 10
図録 「安房直子・メルヘンの世界」展	1999. 10
図録 未来を夢みてここに集う 創立100周年記念特別展示・記録集	2002. 3. 30
図録 女子大生が演じたシェイクスピア劇	2006. 1
図録 シリーズ“創る” (4) 山口都絵画展	2007. 1
図録 シリーズ“創る” (5) 多田牧子組紐展	2008. 1

成瀬記念館刊行物(1985～2014年度)

刊行物名	発行年
成瀬記念館〔逐次〕	1985～
展示と記録〔逐次〕	1992～1996
日本女子大学学園史ニュース〔逐次〕	1998～2005
成瀬仁蔵研究文献目録(女子教育研究所と共同)	1984. 10. 18
麻生正蔵著作目録	1989. 3. 31
年表 日本女子大学の90年	1991. 4. 20
麻生正蔵著作集	1992. 3. 31
成瀬仁蔵著作目録	2000. 3. 31
日本女子大学学園事典	2001. 12. 1
年表 日本女子大学の100年	2001. 12. 1
澤山保羅	2001. 12. 1
写真が語る日本女子大学の100年	2004. 12. 25
あなたは天職を見つけたか	2008. 6. 23
日本女子大学成瀬記念講堂	2008. 6. 23
<i>JWU 1901-2011 A History in Photographs</i>	2011. 11
成瀬記念館講演集(一) 歌に生きる<長澤美津>	1991. 9. 11
成瀬記念館講演集(二) 人形たちとくらし<増淵宗一>	1992. 11. 28
成瀬記念館講演集(三) 浮田克躬の絵を語る —修復者の立場から<山領まり>	1993. 11. 1
成瀬記念館講演集(四) インドネシアの布 —絣を求めて<好本照子>・インドネシアの染と織<小笠原小枝>	1994. 6. 1
成瀬記念館講演集(五) とかしとメッシュ<松江美枝子>	1997. 11. 15
成瀬記念館講演集(六) 平塚らいてうを語る<中罵邦・小林登美枝>	2000. 3. 30
日本女子大学史資料集 1 日本女子大学校創立事務所日誌(一)(二)	1995. 3. 31
日本女子大学史資料集 2 日本女子大学校創立事務所日誌(三)	1995. 8. 31
日本女子大学史資料集 3 日本女子大学校創立事務所日誌(四)	1997. 3. 31
日本女子大学史資料集 4 日本女子大学校創立事務所日誌人名索引	2004. 3. 31
日本女子大学史資料集 5 日本女子大学校規則〔明治33年〕	1998. 3. 15
日本女子大学校資料集 5-2 日本女子大学校規則〔明治35-42年〕	1999. 3. 15
日本女子大学校資料集 5-3 日本女子大学校規則〔明治43-大正3年〕	2011. 3. 10

年度	展示タイトル	会期
2012年度	シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と長州の男たち	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—軽井沢いまむかし展	5月～ 7月
	高村智恵子紙絵写真展※	9月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2013年度	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と自然科学教育	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—戦時下の三泉寮展	5月～ 7月
	故郷を愛す 国を愛す 世界を愛す—上代タノ展※	9月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 2月
2014年度	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と「住」	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—軽井沢たてもの史	5月～ 7月
	激動の時代を生きて 高良とみ展	9月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月

※博物館実習生の実習教材とする

年度	展示タイトル	会期
2004年度	成瀬仁蔵 その生涯展—“帰一”の思想を共にした人々	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—“健康の泉”—展	6月～ 7月
	桜楓会百周年記念桜楓樹の実り展※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2005年度	成瀬仁蔵 その生涯展—生涯学習への取り組み	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—もう一つの夏季寮—展	5月～ 7月
	スポーツの秋！ 日本女子大学の運動会展※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2006年度	成瀬仁蔵 その生涯展—平和への提言	4月～ 5月
	日本女子大学軽井沢三泉寮百周年記念展—大もみの木の下で	6月～ 7月
	附属豊明小学校・幼稚園・成瀬記念講堂百周年記念展 —豊明百年の浪漫展※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2007年度	成瀬仁蔵 その生涯展—教え子から見た成瀬像	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—家庭生活の研究展	6月～ 7月
	日本女子大学と国際交流展※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2008年度	日本女子大学創立者 成瀬仁蔵 生誕150年記念展 天職に生きる（前期）	4月～ 7月
	日本女子大学創立者 成瀬仁蔵生誕150年記念展 天職に生きる（後期）※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2009年度	成瀬仁蔵 その生涯展—永劫（とわ）に生く	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—詩聖タゴールの来訪展	6月～ 7月
	写真展 西生田キャンパスの風景	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2010年度	シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と「食」	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三泉寮と三井家展	6月～ 7月
	人間社会学部開設20周年記念展	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
2011年度	シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と「服」	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—附属豊明小学校「夏の学校」展	6月～ 7月
	日本女子大学の国際交流展※	9月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月

成瀬記念館西生田記念室（西生田）展示一覧 1996年6月（開室）～2015年3月

年度	展示タイトル	会期
1996年度	講堂落成記念特別展 西生田成瀬講堂への道 —西生田キャンパスの歴史（以下略）	6月～
	“三つの泉”を汲みに—軽井沢夏季寮の生活—展	6月～ 7月
	“太平洋戦争下の青春” —日本女子大学卒業生・附属高等学校卒業生は語る—展※	10月～ 12月
1997年度	明治・大正・昭和の雛人形—所蔵品より—展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—出郷・受洗・牧師時代	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—詩聖タゴールと三泉寮—展※	6月～ 7月
	本学所蔵絵画から 歴史を語る肖像画展	9月～ 12月
1998年度	明治・大正・昭和のひな人形—所蔵品から展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—アメリカ留学時代	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—高良とみと三泉寮—展	6月～ 7月
	平塚らいてうとその学友／らいてう・博史展※	9月～ 12月
1999年度	明治・大正・昭和の雛人形—所蔵品から展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—日本女子大学創設運動の時代	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—探訪 軽井沢の歴史—展	5月～ 7月
	安房直子・メルヘンの世界展※	9月～ 12月
2000年度	明治・大正・昭和のひな人形—所蔵品から展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—日本女子大学の開校	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三井家の人々と三泉寮—展	5月～ 7月
	21世紀に飛躍する日本女子大学人間社会学部—10周年記念展※	9月～ 12月
2001年度	明治・大正・昭和の雛人形展	1月～ 3月
	日本女子大学創立100周年記念 成瀬仁蔵を助けた人々展（1）	4月～ 7月
	日本女子大学創立100周年記念 成瀬仁蔵を助けた人々展（2）※	9月～ 3月
2002年度	成瀬仁蔵 その生涯展—明治期の日本女子大学校	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—詩聖 タゴールと三泉寮—展	5月～ 7月
	一つの彫刻から 成瀬先生胸像をめぐって 制作者高村光太郎と写真でみる智恵子の紙絵展※	10月～ 12月
2003年度	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—女子教育研究“毎月会”を起こす	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三泉寮 たてもの史—展	6月～ 7月
	日本女子大学・同志社女子大学 学生交流記念 成瀬仁蔵と新島襄が蒔いた種展※	10月～ 12月
	日本女子大学のおひなさま展	1月～ 3月

年度	展示タイトル	会期
2008年度	日本女子大学創立者 成瀬仁蔵 生誕150年記念展 天職に生きる (前期)	4月～ 7月
	日本家政学会創立六〇周年記念展 日本女子大学 家政学の歩み	5月～ 8月
	日本女子大学創立者 成瀬仁蔵 生誕150年記念展 天職に生きる (後期)	9月～ 12月
	成瀬仁蔵 墨書展	1月～ 3月
2009年度	シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と「食」	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—詩聖タゴールの来訪展	5月～ 8月
	成瀬記念館開館25周年記念展※	9月～ 12月
	館内整備のため休館	1月～ 3月
2010年度	シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と「服」	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三泉寮と三井家展	5月～ 8月
	目白キャンパスの変遷※	9月～ 12月
	『青鞥』創刊100周年記念展『青鞥』と日本女子大学	1月～ 3月
2011年度	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と長州の男たち	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—附属豊明小学校「夏の学校」展	5月～ 8月
	日本女子大学の国際交流展	9月～ 12月
	シリーズ“創る”(6) 福井貞子絵拵展	1月～ 3月
2012年度	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と自然科学教育	4月～ 6月
	同時開催 ミニ展示 タゴールと日本女子大学	4月～ 6月
	軽井沢夏季寮の生活—軽井沢いまむかし展	6月～ 8月
	理学部開設20周年記念展※	9月～ 12月
2013年度	故郷を愛す 国を愛す 世界を愛す 上代タノ展	1月～ 3月
	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と「住」	4月～ 6月
	軽井沢夏季寮の生活—戦時下の三泉寮	6月～ 8月
	阿部次郎をめぐる手紙展	9月～ 12月
2014年度	激動の時代を生きて 高良とみ展	1月～ 3月
	シリーズ「天職に生きる」成瀬仁蔵と「実践倫理」	4月～ 6月
	軽井沢夏季寮の生活—軽井沢たてもの史	6月～ 8月
	開館30周年記念 蔵出し 日本女子大学コレクション展※	9月～ 10月
戦時下の青春	10月～ 12月	
シリーズ“創る”(7) 関口裕子染色作品展	1月～ 3月	

※博物館実習生の実習教材とする

年度	展示タイトル	会期
2001年度	日本女子大学創立100周年記念 成瀬仁蔵と共に歩んだ人々展 (1)	4月～ 8月
	〔同時開催〕 さくらナースリー30周年記念展 (於ロビー)	6月～ 8月
	日本女子大学創立100周年記念 成瀬仁蔵と共に歩んだ人々展 (2)	9月～ 3月
	* 同時に成瀬記念講堂を展示場とする特別展示を開催	
2002年度	成瀬仁蔵 その生涯展—帰一の思想を共にした人々	4月～ 6月
	日本女子大学理学部十周年記念展 (1)	6月～ 8月
	日本女子大学理学部十周年記念展 (2)	9月～ 12月
	館内整備のため休館	1月～ 3月
2003年度	成瀬仁蔵 その生涯展—生涯学習への取りくみ	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三泉寮 たてもとの史展	5月～ 8月
	日本女子大学・同志社女子大学学生交流記念 成瀬仁蔵と新島襄が蒔いた種展	9月～ 12月
	荻太郎 子どもの世界展	1月～ 3月
2004年度	成瀬仁蔵 その生涯展—平和への提言	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活 — “健康の泉”展	5月～ 8月
	桜楓会百周年記念 桜楓樹の実り展	9月～ 12月
	〔同時開催〕 成瀬記念館20周年記念—浦辺鎮太郎展	10月～ 12月
2004年度	シリーズ “創る” (3) All About Paper Toys 安座上 真紀子20年の軌跡展	1月～ 3月
2005年度	成瀬仁蔵 その生涯展—教え子から見た成瀬像	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活 —もう一つの夏季寮展	5月～ 8月
	スポーツの秋！ 日本女子大学の運動会展	9月～ 12月
	女子大生が演じたシェイクスピア劇展	1月～ 3月
2006年度	成瀬仁蔵 その生涯展—不治の病と “死の研究”	4月～ 5月
	日本女子大学軽井沢三泉寮百周年記念展 —大もみの木の下で	5月～ 8月
	附属豊明小学校・幼稚園・成瀬記念講堂百周年記念展 —豊明百年の浪漫展	9月～ 12月
	シリーズ “創る” (4) 山口 都 絵画展	1月～ 3月
2007年度	成瀬仁蔵 その生涯展—永劫 (とわ) に生く	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活 —家庭生活の研究展	5月～ 8月
	日本女子大学と国際交流展	9月～ 12月
	シリーズ “創る” (5) 伝統の美と先端技術 多田 牧子 組紐展	1月～ 3月

年度	展示タイトル	会期
1994年度	写真による軽井沢三泉寮の紹介	6月～ 9月
	〈家庭週報〉の歴史 — ‘桜楓会’ 創設90年にちなんで一展	10月～ 12月
	日本女子大学・住居学科〈絵画デッサン〉教室の現在まで — 荻太郎と亀本信子・山口都一展	1月～ 3月
1995年度	成瀬仁蔵 その生涯展—日本女子大学創設運動の時代 (1)	3月～ 6月
	シリーズ・日本女子大学の卒業生 (1) 上代タノと平和運動—書簡を中心に	6月～ 8月
	写真による軽井沢三泉寮の紹介	6月～ 8月
	戦後50年 戦時下の青春—日本女子大学卒業生は語る— 柳 敬助・八重夫妻—共に歩んだ肖像画家と女性編集者	10月～ 12月 1月～ 3月
1996年度	成瀬仁蔵 その生涯展—日本女子大学創設運動の時代 (2)	3月～ 5月
	“三つの泉”を汲みに—軽井沢夏季寮の生活—展	6月～ 8月
	シリーズ“創る” (1) 松江美枝子ジュウリーの世界展	10月～ 12月
	本館所蔵絵画から—歴史を語る肖像画展	1月～ 3月
1997年度	成瀬仁蔵 その生涯展—日本女子大学の開校	3月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—高良とみと三泉寮—展	6月～ 8月
	シリーズ・日本女子大学の卒業生 (2) 平塚らいてうとその学友 展	10月～ 12月
	館内塗装工事のため休館	1月～ 3月
1998年度	新制家政学部成立の軌跡展	4月～ 6月
	軽井沢夏季寮の生活—探訪 軽井沢の歴史—展	6月～ 8月
	シリーズ“創る” (2) 宮地房江・染の粹 展	10月～ 12月
	絵画の中のキャンパス風景—成瀬記念館所蔵品より—展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展—明治期の日本女子大学校	3月～
1999年度	成瀬仁蔵 その生涯展—明治期の日本女子大学校	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—三井家の人々と三泉寮—展	6月～ 8月
	同時開催 日本女子大学通信教育の50年	7月～ 8月
	シリーズ・日本女子大学の卒業生(3) 安房直子・メルヘンの世界展	10月～ 12月
	“住む”から生まれるカタチ 2000年日本女子大学住居学科作品展	1月～ 3月
2000年度	成瀬仁蔵 その生涯展—「毎月会」の成立	4月～ 5月
	軽井沢夏季寮の生活—詩聖タゴールと三泉寮—展	5月～ 8月
	プレ日本女子大学100周年 歌詞と写真でつづる うた・100年展	9月～ 12月
	プレ日本女子大学100周年 成瀬仁蔵墨書展	1月～ 3月

年度	展示タイトル	会期
1989年度	通信教育のあゆみ— 日本女子大学通信教育の40年を祝って—展（再展示）	7月～ 9月
	附属高等女学校の春秋展 〔ミニ展示〕 本学に学んだ人たち—明星の閨秀歌人・茅野雅子—	10月～ 12月
	萩 太郎展（絵画展）—ヒューマニズムの世界—	1月～ 3月
	成瀬記念館所蔵の墨書展 その二 —成瀬仁蔵・森村市左衛門—	3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（5） —渋谷栄—	4月～ 5月
1990年度	創立90周年記念 新学部人間社会学部誕生 —西生田 その過去と現在—展	5月～ 9月
	日本女子大学の歴史（3）戦時下から戦後へ —井上校長・大橋学長時代—展（再展示）	10月～ 12月
	近代短歌の系譜—日本女子大学に学んだ歌人たち—展	1月～ 3月
	成瀬記念館所蔵の墨書展 その三 —成瀬仁蔵・渋谷栄—	3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（6） —西園寺公望—	4月～ 5月
1991年度	日本女子大学の歴史（4）女子高等教育進展の時 —上代・有賀・道 学長の時代—展（再展示）	5月～ 9月
	女子大学は今 —日本女子大学創立九十周年にちなんで—展 〔ミニ展示〕 写真展・日本女子大学さくらナースリー20周年を祝して	10月～ 12月
	曾祖母からの贈りもの —くらしを伝える雛人形たちと衣裳展	1月～ 3月
	成瀬記念館所蔵の墨書展 その四 —成瀬仁蔵・西園寺公望—	3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（7） —麻生正蔵	4月～ 6月
1992年度	日本女子大学・自然科学教育の90年 —理学部の開設にちなんで—展	6月～ 12月
	心の軌跡—浮田克躬肖像画展	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（8） —森村グループ—	3月～ 8月
1993年度	写真による軽井沢三泉寮の紹介	6月～ 8月
	学寮は語る—日本女子大学寮の92年—展	9月～ 12月
	新収蔵品紹介 好本コレクション 布と面展	1月～ 3月
1994年度	成瀬仁蔵 その生涯展—アメリカ留学時代（1890～1893年）	3月～ 6月
	成瀬仁蔵を助けた人々（9）E. P. ヒューズ —英国女子高等教育のパイオニア—展	6月～ 9月

成瀬記念館（目白）展示一覧 1984年10月（開館）～2015年3月

年度	展示タイトル	会期
1984年度	開館記念特別展 成瀬仁蔵の生涯、創立期の日本女子大 成瀬仁蔵遺墨展	10月～ 12月 1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展	3月～ 4月
1985年度	日本女子大の一回生展—明治37年卒業—	5月～ 7月
	成瀬仁蔵 その生涯展（再展示）	7月～ 9月
	日本女子大の歴史（2） 大正デモクラシー期の日本女子大校展	10月～ 12月
	成瀬記念館所蔵絵画小展 同時展示・長田喜和「校内風景」	1月～ 3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（1） —内海忠勝・土倉庄三郎・広岡浅子—	3月～ 4月
1986年度	祝 創設八十周年 日本女子大附属豊明小学校・豊明幼稚園のあゆみ展	5月～ 7月
	大正デモクラシー期の日本女子大校展（再展示）	7月～ 9月
	日本女子大の歴史（3）戦時下から戦後へ —井上校長・大橋学長時代—展	10月～ 12月
	〔ミニ展示〕 本学に学んだ人たち—宮沢賢治の妹・トシ—	
	日本女子大附属豊明小学校・幼稚園児童・園児作品展	1月～ 2月
1987年度	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（2） —三井三郎助・寿天子—	3月～ 5月
	軽井沢 三泉寮の80年展	5月～ 9月
	日本女子大の歴史（4）女子高等教育進展の時 —上代・有賀・道学長の時代—展	10月～ 12月
	〔ミニ展示〕 本学に学んだ人たち—網野 菊—	
	大橋了介展—日本女子大校・パリを描く—	1月～ 3月
1988年度	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（3） —大隈重信—	3月～ 5月
	日本女子大の歴史（1）黎明期の女子高等教育—本学の創立展	5月～ 9月
	通信教育のあゆみ—日本女子大通信教育の40年を祝って—展	10月～ 12月
1989年度	きものから洋服へ—日本女子大の服装史—展	1月～ 3月
	成瀬記念館所蔵の墨書展 その一 —成瀬仁蔵・麻生正蔵・長井長義—	3月
	成瀬仁蔵 その生涯展 附・成瀬仁蔵を助けた人々（4） —森村市左衛門—	4月～ 5月
	日本女子大の歴史（2） 大正デモクラシー期の日本女子大校展	5月～ 7月

1998年	1月	百周年記念出版物出版準備開始 『日本女子大学学園史ニュース』創刊号発行(第7号<05年6月>まで発行)
1999年	9月	附属豊明幼稚園入園選考説明会につき開館(以後、毎年)
2000年	2月	大学入試期間中、受験生付き添い者向けに開館(以後、毎年)
	3月	『成瀬仁蔵著作目録』発行
2001年	3月	『実践倫理講話筆記 大正四年度ノ部』発行(以後、随時)
	11月	『日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡』『年表 日本女子大学の100年』『澤山保羅』発行 日本女子大学創立100周年記念特別展示<21世紀の教育をひらく>「成瀬記念講堂—未来を夢みてここに集う」展 成瀬記念講堂にて開催。常設展示「講堂—その建築と変遷」/「講堂—歴史の中の人々」企画展示 第1期「掛け図にみる明治の理科教育」第2期「女性史をひらく—本学図書館所蔵の貴重図書より」第3期「一つの彫刻から 成瀬先生胸像をめぐる—制作者高村光太郎と写真でみる智恵子の紙絵」
2002年	1月	<i>Japan Women's University A Centennial History</i> 発行
	9月	(社)日本女子大学教育文化振興桜楓会百周年記念「桜楓樹の実り」展 開催
	12月	桜楓会設立百周年記念式典につき特別開館 『写真が語る日本女子大学の100年—そして21世紀をひらく』発行
2006年	7月	軽井沢町との合同展示、旧三笠ホテルにて開催/三泉寮ロビーに展示パネル設置
	9月	小石川消防署より「消防マル優認定証」交付される
2007年	10月	分館、「文京区指定有形文化財」に認定される 山口県主催「長州・大江戸スタンプラリー」に協力し特別開館
	11月	「文京ミュージズネットフェスタ2007」(於：文京シビックセンター)の合同展示に参加(同年6月の文京ミュージズネット立ち上げから参加)
	12月	桜楓会主催「成瀬仁蔵生誕150年記念講演会」につき特別開館
2008年	6月	創立者生誕150年記念誌『あなたは天職を見つけたか』『日本女子大学成瀬記念講堂』『写真で見る成瀬仁蔵 その生涯』発行/成瀬仁蔵生誕150年記念式典につき特別開館
	9月	現代女性キャリア研究所、成瀬記念館1階奥への移転決まる(場所明け渡し準備開始)
2010年	11月	山口県ひとづくり財団の依頼により山口市長城小学校において成瀬仁蔵について講演
	1月	全国大学史資料協会東日本部会主催「全国大学史展 日本の大学—その成立と社会」(於：明治大学博物館特別展示室)に参加
2011年	12月	文京ミュージズネットミニコンサートを成瀬記念講堂で開催
2011年	11月	<i>JWU 1901-2011 A History in Photographs</i> 発行
2013年	5月	第一回成瀬記念館分館移築検討協議会開催(以後、随時)
2014年	10月	開館30年を迎える。『収蔵資料目録1 旧成瀬記念室資料』発行

成瀬記念館略年表

1980年	4月	桜楓会総会にて母校創立80周年に際し成瀬記念館建設を要望することを決定 学校法人日本女子大学理事会にて創立80周年記念事業実行委員会の設置を承認
1982年	9月	学校法人日本女子大学理事会において成瀬記念館建設大要承認される
1984年	10月	成瀬記念館開館。開館記念特別展「成瀬仁蔵の生涯、創立期の日本女子大学校」開催
1985年	4月	附属中学校一年生見学(以後、毎年)／桜楓会総会につき特別開館(以後、毎年)
	6月	附属中学校保護者見学(以後、毎年)
	7月	附属豊明小学校児童見学(以後、随時)
1985年	8月	夏期スクーリングにつき開館(以後、毎年)
	11月	『成瀬記念館1985 No.1』発行、現在30号まで既刊
1987年	1月	大学史連絡協議会に参加(以後、随時)
	6月	関東地区大学史連絡協議会設立総会に参加。常任校となる(以後、随時)
1989年	3月	『麻生正蔵著作目録』発行
	4月	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会研究会に参加(以後、随時)
1990年	1月	東京都教育委員会より「博物館相当施設」として認可される
	4月	西生田キャンパス九十年館内に西生田展示室開室
	8月	博物館実習生受入(以後、毎年)
1991年	3月	創立者命日(3月4日)につき特別開館(以後、毎年)
	4月	『年表 日本女子大学の90年』発行／創立記念日につき特別開館(以後、毎年)
	9月	『成瀬記念館講演集(一) 長澤美津 一歌に生きる一』発行(以後、随時)
	10月	目白祭につき特別開館(以後、毎年)
1992年	4月	『麻生正蔵著作集』発行／『展示と記録』創刊号発行(5号(96年9月)まで発行)
	6月	ビデオ「建物は語る 日本女子大学の90年」制作
1994年	8月	大学進学相談会につき特別開館(以後、随時)
	7月	教特1委員会より依頼されたビデオ「日本女子大学の今昔」制作
1995年	3月	『日本女子大学史資料集第一 日本女子大学校創立事務所日誌(一)(二)』発行(以後、随時)
	4月	旧女子教育研究所のスペース及び図書が移管される
	3月	西生田成瀬講堂内に西生田記念室を開室。九十年館内の西生田展示室を閉室 ※大学卒業式・入学式・創立記念式等学園行事に際しては、西生田記念室を特別開室
1996年	4月	新任教員の集い、新入寮生オリエンテーション、桜楓会ホームカミングデーにつき開館(以後、毎年)
1997年	4月	オープンキャンパスにつき特別開館(以後、毎回)

山口都

日本女子大学・住居学科〈絵画デッサン〉教室
の現在まで 荻太郎と亀本信子・山口都 展 No.
11 口絵◆記憶の都市を求めて 山口都 絵画展
No.22 口絵

山本欽

「家庭週報」を担った人達—すぎし面影（小笠
原節子）No.13（27～32頁）

吉敷

吉敷探訪（鈴木一夫）No.11（9～11頁）◆夢
塾 成瀬仁蔵を学んだ子どもたち（藤田辰夫）
No.24（6～8頁）

理科教育

顕微鏡・動植物標本器械目録 No.4 口絵◆日本
女子大学の理科教育—葉のスナップ写真から
（今島実）No.10（6～7頁）◆顕微鏡の思い出
（館岡孝）No.4（6～8頁）

理学部

成瀬仁蔵先生の構想と理学部（湯浅明）No.7（7
～9頁）◆自然科学教育の100年 展 No.18 口
絵◆理学部十周年に思う（小尾欣一）No.18（6
～8頁）◆丹下ウメ先生の教えを胸に（村岡全
子）No.22（19～26頁）◆目白の理系女子物語
No.28 口絵◆理学部開設二〇年周年に思う（今
市涼子）No.28（9～11頁）

留学生

日本女子大学と中国（久保田文次）No.14（12
～14頁）◆旧制時代における本学への留学生
附 日本女子大学校留学生名簿（大門泰子）
No.27（49～70頁）

ロックフェラー

家政学研究科設置に向けて上代タノがロックフェ
ラー財団に要請した支援（蟻川芳子）No.27（35
～48頁）

道喜美代

道喜美代先生との出会い（江澤郁子）No.18（23～30頁）

三井家

日本女子大学と三井家—「軽井沢別邸」の保存の可能性の問題と小山市の「小石川三井家資料」（増淵宗一）No.25（41～70頁）

三井三郎助

日本女子大学三泉寮の創設（中嶋邦）No.4（28～40頁）

三井高修

三泉寮百周年を記念して 三井高修「成瀬仁蔵首像」と廣子夫人「成瀬仁蔵肖像画」—没後十年の追悼競作（増淵宗一）No.21（14～37頁）

宮沢賢治・トシ

宮沢トシ「真実ノ為ノ勇進」—日本女子大時代の求道性を中心に—（山根知子）No.11（44～64頁）◆断想・宮沢賢治—福祉と「法華経」（吉田久一）No.12（6～9頁）◆宮沢トシと成瀬仁蔵—「実践倫理講話」筆記録を中心に（山根知子）No.15（25～43頁）◆宮澤トシの卒業証書（山根知子）No.26（14～24）◆宮澤トシの「実践倫理」答案—成瀬校長の導きとトシの心の軌跡・思索の跡（山根知子）No.30（11～41頁）

宮地房江

「宮地房江・染の粹」展 No.15 口絵◆美しいときをクリエイトする宮地先生—「宮地房江・染の粹」展によせて（千葉よう子）No.15（6～7頁）

宮本美沙子

宮本美沙子先生の思い出（黒瀬優子）No.29（8～10頁）

ムーディ

日本女子大学三泉寮の創設（中嶋邦）No.4（28～40頁）◆成瀬仁蔵のアメリカ留学の故地を訪ねて（影山礼子）No.10（84～69頁）

『目白の雪の日』

祖母・母・子三代、女子大学に学んで（出淵敬子）No.1（6～9頁）◆「目白の雪の日」と私たちの歴史（小森美巳）No.24（12～15頁）◆「目白の雪の日」との3年（小森美巳）No.9（8～10頁）

森戸辰男

森戸辰男文庫のこと（上村美紗子）No.16（12～14頁）

森村市左衛門

男爵 森村市左衛門 No.5 口絵◆祖父森村市左衛門の思い出（大島澄）No.5（9～11頁）

柳敬助

成瀬記念館所蔵絵画小展—同時展示・長田喜和「校内風景」— No.2口絵◆柳敬助・八重夫妻 展—共に歩んだ肖像画家と女性編集者— No.12 口絵◆精神的律動の諧和を表す絵 No.28 口絵

柳八重

第一回生 卒業証書 No.8 口絵◆母のこと（柳文治郎）No.8（7～9頁）◆柳敬助・八重 夫妻 展—共に歩んだ肖像画家と女性編集者— No.12 口絵◆柳八重関係資料 No.12 口絵

山川登美子

山川登美子の葉書 No.10 口絵

附属高等女学校

附属高女の思い出（佐野俣）No.6（10～12頁）
◆成瀬仁蔵講話 1 高等女学校修身講話会ニテ—明治四十二年一月十一日 2 第三学年ニテノ御話—明治四十二年一月十三日 No.15（18～24頁）

附属中学校

母校とともに72年 その2・附属中学校設立の頃（河村サダ）No.10（45～52頁）◆附属中学校・高等学校の学校週五日制に寄せて 五日制になって（下村由紀子）No.15（13～15頁）◆附属中学校のクラス授業におけるヴァイオリン教育（横溝修二）No.20（8～11頁）

附属豊明小学校

「祝創設八十周年 日本女子大学附属豊明小学校 豊明幼稚園のあゆみ」展 No.2 口絵◆豊明小学校、成瀬校長の思い出（田中博次）No.1（9～11頁）◆豊明小学校創設八十周年を祝って（友沢桂子）No.2（6～7頁）◆日本女子大学附属豊明小学校 初代主任 河野清丸（友沢桂子）No.3（30～41）◆新校舎のこと—豊明プロポーザル方式—（功刀俊文）No.14（9～11頁）◆附属豊明小学校のリトミック（湯浅弘子）No.21（8～10頁）◆日本女子大学附属豊明小学校・幼稚園 成瀬記念講堂 百周年記念 豊明百年の浪漫（岸本美香子）No.21（62～78頁）

附属豊明幼稚園

豊明幼稚園創設八十周年を祝って（細矢静子）No.2（8～9頁）◆日本女子大学附属豊明幼稚園 初代主任 甲賀ふじ（前典子）No.2（26～41頁）◆土と遊び、土を語らせる—豊明幼稚園の子どもたちの作品から—（西村陽平）No.19（6～8頁）◆附属豊明幼稚園の百周年に思うこと（前典子）No.21（10～13頁）◆日本女子大

学附属豊明小学校・幼稚園 成瀬記念講堂 百周年記念 豊明 百年の浪漫（岸本美香子）No.21（62～78頁）◆附属豊明幼稚園新園舎落成 No.26 口絵◆豊明幼稚園 落成式を前にして思うこと—様々な思いを受け継いで新園舎—（永田陽子）No.26（6～8頁）◆傾斜地に寄り添い、子供の成長に寄り添う建築—豊明幼稚園とさくらナースリーの改築に参画して—（篠原聡子）No.26（25～34頁）

平和

平和のために生きる（高良とみ）No.2（42～49頁）◆平和研究と日本女子大学（杉森長子）No.12（12～14頁）◆成瀬仁蔵の平和思想と女性への提言（中寫邦）No.19（37～45頁）◆日本女子大学の一貫教育における実践的平和教育～小笠原サマースクール～（生野聡）No.28（15～17頁）

松浦正泰

成瀬先生の体育観を具象化した人々（馬場哲雄）No.3（10～11頁）

松江美枝子

「松江美枝子・ジュワリーの世界」展 No.13 口絵

松野加寿子

『家庭週報』を担った人達—すぎし面（小笠原節子）No.13（27～32頁）

丸山千代

桜楓会託児所保母主任 丸山千代（山中裕子）No.30（47～71頁）

三田庸子

更生・福祉事業に生きて（三田庸子）No.3（42～49頁）

『日本教会費自給論』

紹介『日本教会費自給論』No.10 (35～44頁)

『ニューヨークタイムズ』

成瀬仁蔵インタビュー『ニューヨークタイムズ』
1912年11月10日(川端康雄) No.26 (72～52
頁)

梅花学園

「成瀬仁蔵を取り巻く人々」展について(遠藤トモ)
No.17 (8～10頁)

原口鶴子

「心理学者 原口鶴子の青春」映画製作にこめ
た思い(泉悦子) No.22 (8～10頁)

ヒューズ, エリザベス P.

エリザベス P. ヒューズ—成瀬仁蔵を助けた英
国女子教育のパイオニア(白井堯子) No.9 (46
～57頁) ◆日英交流と明治期の女子高等教育—
放送大学講義で成瀬仁蔵を語る(白井堯子)
No.21 (38～52頁) ◆E.P.ヒューズの English
Literature for Japanese Studentsと成瀬仁蔵
(白井堯子) No.27 (14～34頁)

平井章

母 平井章のこと(平井卓郎) No.10 (6～7頁)

平塚らいてう

「平塚らいてうとその学友」展 No.14 口絵◆偉
大なる先輩との交わりから—あの二つの指輪の行
方は?(三枝佐枝子) No.19 (26～36頁) ◆『青
鞆』と日本女子大学 No.26 口絵◆新発見史料
「平塚らいてう」の答案を読み解く—成瀬仁蔵の
「実践倫理」講義の答案の概要から考える(中
島邦) No.29 (34～50頁)

広岡浅子

成瀬仁蔵宛 広岡浅子書簡 明治二九年六月
一五日 No.27 (80～84頁) ◆広岡浅子とその
時代—日本女子大学校への夢—(吉良芳恵)
No.30 (72～92頁)

弘津千代

姉 弘津千代のこと(弘津友三郎) No.4 (8～
9頁)

フィリップス

大学本科と私の半生(藤澤英子) No.14 (70～
80頁) ◆E.G.フィリップスと日本女子大学校—残
された書簡を中心に(白井堯子) No.17 (30～
58頁) ◆日英交流と明治期の女子高等教育—
放送大学講義で成瀬仁蔵を語る(白井堯子)
No.21 (38～52頁)

福井貞子

福井貞子 絵展 No.27 口絵

服装

「きものから洋服へ—日本女子大学校の服装史
—」展 No.5 口絵◆日本女子大学の服装史(佐々
井啓) No.5 (32～44頁)

附属高等学校

短歌・俳句と高校教育(綾野道江) No.12 (10
～11頁) ◆附属中学校・高等学校の学校週五
日制に寄せて—五日制のめざすもの(小林基男)
No.15 (15～17頁) ◆零(ゼロ)からの出発—
草創期の附属高校(西生田校)—(小林すみ
江) No.15 (44～49頁) ◆アフガニスタン女性教
育支援に取り組んで(田中若代) No.18 (8～11
頁) ◆附属高等学校に創立者の教育理想をみる
(井上光) No.20 (11～13頁)

二十六日 No.17 (16～22頁) ◆成瀬仁蔵講話
研究科生並ビニ卒業生ノ為メニ—明治三十八年
三月二十九日 No.18 (15～22頁) ◆成瀬仁蔵
講和 始業式ニ於テ—明治三十八年四月十二
日 No.19 (17～25頁) ◆成瀬仁蔵講話 1 新
入生ノ入学式ニ於テ—明治三十八年四月二十
一日 2 一学年実践倫理講話—明治三十八年
四月二十四日 No.20 (20～29頁) ◆成瀬仁蔵
講話 1 体育ニ就キテ—明治三十八年五月一
日 2 第二学年倫理講話—明治三十八年五月
五日 No.21 (53～61頁) ◆成瀬仁蔵講
話 1 通学生総会ニ於テ—明治三十八年五月
五日 2 第三学年実践倫理講話 No.22 (39～
45頁) ◆成瀬仁蔵講話 1 第一学年 実践倫
理—明治三十八年五月八日 2 第三学年 倫理
学—明治三十八年五月十日 No.23 (95～102頁)
◆成瀬仁蔵講話 1 桜楓会例会ニ於テ—明治
三十八年五月十四日 2 第三学年倫理学—明
治三十八年五月二十四日 3 第二学年 倫理
講話—明治三十八年五月二十六日 No.24 (30
～39頁) ◆成瀬仁蔵講話 1 始業式ニテ—明
治四十二年四月十三日 2 大学部新入生歓迎
会ニテ—明治四十二年四月十七日 No.25 (71～
80頁) ◆成瀬仁蔵講話 1 四十二年度計画発
表会—明治四十二年四月十八日 2 第一学年
にて—明治四十二年四月二十四日 No.26 (42～
51) ◆成瀬仁蔵講話 1 第一学年に於テ—明
治四十三年五月十四日 2 春期運動会批評会
後にて—明治四十三年五月二十一日 No.27 (78
～79頁) ◆成瀬仁蔵講話 大学部全体ノ為ニ
—明治四十四年三月二十二日 No.28 (31～40
頁) ◆成瀬仁蔵講話 大学部全体ノ御話—明
治四十四年五月三十一日 No.29 (51～59頁)
◆成瀬仁蔵講話 1 大学部二、三学年にて—
明治四十四年七月五日 2 第一学年生まとめ
の会—明治四十四年七月九日 No.30 (93～105
頁)

成瀬文庫

成瀬蔵書、より (石川松太郎) No.1 (4～6頁)
◆成瀬文庫のN・E・D (亀山健吉) No.2 (4～
5頁) ◆社会学的世界の解説—「成瀬文庫」
について— (山本鎮雄) No.4 (4～6頁)

新島襄

日本女子大学と同志社 成瀬仁蔵と新島襄が
蒔いた種 (本井康博) No.17 (10～13頁)

西生田

西生田校地草創の頃 (木下けい) No.6 (8～9
頁) ◆成瀬記念館西生田記念室の開設にあた
って (宮本美沙子) No.12 (4～5頁) ◆「西生
田成瀬講堂」によせて (北川定男) No.13 (6～
8頁) ◆零 (ゼロ) からの出発—草創期の附属
高校 (西生田校) — (小林すみ江) No.15 (44
～49頁) ◆生田の森の四季 (大塚泰弘) No.24
(9～12頁) ◆女子大の森の保全について (関
口文彦) No.28 (12～14頁)

仁科節

仁科節日記 (その1) 大正七年十二月二十九
日—大正八年一月三日 No.2 (20～25頁) ◆仁
科節日記 (その2) 大正八年一月十五日—二
月五日 No.3 (24～29頁) ◆仁科節日記 (その3)
大正八年二月六日—二月二十五日 No.4 (20～
27頁) ◆仁科節日記 (その4) 大正八年二月
二十六日—三月四日 No.5 (22～31頁) ◆仁科
節日記 (補遺)・成瀬校長の病床に侍して [大
正八年三月三日—四日] No.6 (23～27頁) ◆「家
庭週報」を担った人達—すぎし面影 (小笠原節
子) No.13 (27～32頁)

新渡戸稲造

上代タノと新渡戸稲造—上代タノ書簡を中心に
(島田法子) No.13 (75～54頁)

分館の思い出（守屋良子）No.30（6～8頁）

成瀬記念講堂

父 田辺淳吉と成瀬記念講堂（岩田礼子）No.14（6～8頁）◆成瀬記念講堂—未来を夢みてここに集う No.17 口絵◆私の成瀬講堂物語（後藤久）No.21（6～8頁）◆日本女子大学附属豊明小学校・幼稚園 成瀬記念講堂 百周年記念 豊明 百年の浪漫（岸本美香子）No.21（62～78頁）◆成瀬記念講堂—設計者のこと、震災復旧のこと、保存修復のことなど（松波秀子）No.22（46～55頁）

成瀬仁蔵

成瀬先生と“真面目”（稲沼史）No.2（50～52頁）◆成瀬先生の思い出（野村郁子）No.2（52～54頁）◆成瀬先生と聖書（今村晋）No.5（8～9頁）◆先覚者としての成瀬先生の教育思想（唐澤富太郎）No.6（28～41頁）◆成瀬仁蔵のアメリカ留学の故地を訪ねて（影山礼子）No.10（84～69頁）◆成瀬仁蔵先生の教育観（宮本美沙子）No.16（4～5頁）◆成瀬仁蔵の誕生日の謎（島田法子）No.17（23～29頁）◆現代に生きる創立者の願い（後藤祥子）No.21（4～5頁）◆創立者生誕百五十年に向けて（後藤祥子）No.22（4～5頁）◆成瀬仁蔵のワードローブ（間瀬登茂子）No.22（56～71頁）◆教え子から見た成瀬像（永田彩子）No.22（72～83頁）◆創立者生誕一五〇年記念諸行事に寄せて（後藤祥子）No.23（6～9頁）◆成瀬仁蔵の「帰一」に基づく宗教的人間形成論（大森秀子）No.23（18～45頁）◆成瀬仁蔵の英語による講演とその記録（新井明）No.23（46～57頁）◆成瀬仁蔵と近代日本の写真師たち—成瀬仁蔵肖像写真を中心に（増淵宗一）No.23（103～130頁）◆成瀬仁蔵の結婚と離婚—親族関係からのアプローチ（大門泰子）No.23（131～150頁）◆成

瀬仁蔵の死に際しての受容と信念（佐藤和人）No.29（4～5頁）

成瀬仁蔵講話

成瀬仁蔵講話 1 快樂ト克己、興味ト困難、愛と犠牲ノ関係 第一学年ニ於テ—明治四十一年六月二十六日 2 夏季寮ノ計畫ニツキテ 第三学年ニ於テ—明治四十一年七月八日 No.1（12～26頁）◆成瀬仁蔵講話 終業式ニ於テ—明治四十一年七月十日 No.2（10～19頁）◆成瀬仁蔵講話 1 第三学年ニ於テノ御話（体育ニ就テ）—明治四十一年十月廿一日 2 第一学年ニ於テ—明治四十一年十月卅一日 No.3（12～23頁）◆成瀬仁蔵講話 第一学年ニ於テ—明治四十一年十一月七日 No.4（10～19頁）◆成瀬仁蔵講話 第三学年ニ於テ—明治四十一年十一月十八日 No.5（14～21頁）◆成瀬仁蔵講話 1 運動会ノ批評—明治四十一年十一月廿四日 2 正会員ニ於テ—明治四十一年十二月六日 No.6（13～22頁）◆成瀬仁蔵講話 第三学年ニテノ御話—明治四拾一年拾二月九日 No.7（12～22頁）◆成瀬仁蔵講話 桜楓会例会ニ於テ—明治四拾一年拾二月十三日 No.8（16～22頁）◆成瀬仁蔵講話 第一学年ニ於テ—明治四十一年十二月十九日 No.9（14～22頁）◆成瀬仁蔵講話 大学部全体ノ為ニ No.11（15～30頁）◆成瀬仁蔵講話 尋問会ニ於テ No.12（15～23頁）◆成瀬仁蔵講話 新年祝賀式—明治四十二年一月一日 No.13（20～26頁）◆成瀬仁蔵講話 第三学期始業式ニ於テ—明治四十二年一月八日 No.14（19～25頁）◆成瀬仁蔵講話 1 高等女学校修身講話会ニテ—明治四十二年一月十一日 2 第三学年ニテノ御話—明治四十二年一月十三日 No.15（18～24頁）◆成瀬仁蔵講話 終業式ニ於テ—明治三十八年三月二十五日 No.16（15～21頁）◆成瀬仁蔵講話 お別れの会—明治三十八年三月

～26頁) ◆国立女性教育会館企画展示「女性科学者の誕生～チャレンジした女性たち～」(西村昭子) No.25 (6～8頁) ◆真島利行日記と黒田チカ資料にみえる丹下ウメ(永田英明) No.29 (8～10頁)

通信教育

通信教育創設の頃(竹中はる子) No.5 (12～13頁) ◆通信教育学生時代—知的飢餓感からの解放・学ぶことの喜び(生田千恵子) No.15 (52～63頁) ◆日本女子大学の伝統としての「生涯学習」—『日本女子大学通信教育関係資料』を刊行して(安井育代) No.20 (80～96頁)

辻きよ

丹下ウメ先生の教を胸に(村岡全子) No.22 (19～26頁)

津田梅子

日英交流と明治期の女子高等教育—放送大学講義で成瀬仁蔵を語る(白井堯子) No.21 (38～52頁)

塘茂太郎

義父 塘茂太郎の思い出(塘茂子) No.13 (14～19頁)

同志社

同志社女学校と大橋広(坂本清音) No.20 (14～19頁) ◆日本女子大学と同志社 成瀬仁蔵と新島襄が蒔いた種(本井康博) No.17 (10～13頁)

東北大学

東北帝国大学と女子学生(永田英明) No.17 (13～15頁)

中村佐喜子

私の大学本科の頃(中村佐喜子) No.11 (70～79頁)

長澤美津

長澤美津氏に聞く No.6 (42～57頁)

成瀬記念館

成瀬記念館開館特別展 No.1口絵◆成瀬記念館に思う(木下法也) No.3 (4～5頁) ◆成瀬記念館の階段(宮本美沙子) No.9 (4～5頁) ◆成瀬記念館開館十周年にあたって(宮本美沙子) No.10 (4～5頁) ◆記念館と赤煉瓦(森本正一) No.10 (93～95頁) ◆成瀬記念館への想いと願い(一番ヶ瀬康子) No.10 (100～102頁) ◆成瀬記念館の役割に思う(中寫邦) No.10 (103～105頁) ◆成瀬記念館西生田記念室の開設にあたって(宮本美沙子) No.12 (4～5頁) ◆成瀬記念館で学ぶ(土屋莊次) No.15 (11～13頁) ◆成瀬記念館開館二十周年記念展示 成瀬記念館と設計者・浦辺鎮太郎(岸本美香子) No.19 (46～55頁) ◆成瀬記念館の二十周年を祝して(松崎彰) No.19 (73～74頁) ◆日本女子大学の大学史および大学史活動のこと(鈴木秀幸) No.19 (75～77頁) ◆開館二十周年によせて(桑尾光太郎) No.19 (78～79頁) ◆成瀬記念館開館の頃、そして未来へ(秋山俱子) No.19 (80～89頁) ◆成瀬記念館開館三〇年に寄せて(西山伸) No.30 (119～120頁) ◆成瀬記念館と共に三〇年(井上潤) No.30 (115～118頁) ◆開館の頃(青木生子) No.30 (121頁)

成瀬記念館分館

成瀬先生の住まい(鈴木賢次) No.9 (11～13頁) ◆本学職員としての成瀬記念館分館の思い出(石垣典子) No.19 (11～13頁) ◆成瀬記念館

No.7 (59～63頁) ◆戦時下の一学生として(師岡愛子) No.11 (65～69) ◆アンケート「太平洋戦争と日本女子大学(校) 学生生活」について(成瀬記念館) No.12 (24～41頁) ◆回想 敗戦直後の学生生活(横山陽子) No.15 (8～10頁) ◆私の学生時代と「信州戦争展」(平田広子) No.16 (10～12頁) ◆戦時下における歌集『茶の花』・『白埴』の誕生一付 『茶の花』翻刻一(濱田美枝子) No.29 (14～33頁)

雑司ヶ谷

企画展「江戸時代に生まれた庶民信仰の空間—音羽と雑司ヶ谷—」(永村眞) No.26 (9～11頁) ◆キャンパスにしたい雑司ヶ谷界隈(葉袋奈美子) No.29 (10～13頁)

体育

成瀬先生の体育観を具象化した人々(馬場哲雄) No.3 (10～11頁) ◆日本女子大学と体育(馬場哲雄) No.10 (10～12頁) ◆成瀬仁蔵と健康教育(佐藤和人) No.18 (31～38頁) ◆成瀬仁蔵講話 体育ニ就キテ—明治三十八年五月一日 No.21 (53～59頁) ◆成瀬仁蔵の考えた「食」と健康(徳野裕子) No.23 (85～94頁)

大学院

道喜美代先生との出会い(江澤郁子) No.18 (23～30頁) ◆家政学研究科設置に向けて上代タノがロックフェラー財団に要請した支援 No.27 (蟻川芳子) (35～48頁)

大学昇格

展示「新制家政学部 成立の軌跡」によせて—大学昇格とGHQ資料(成瀬記念館) No.14 (26～60頁) ◆学生時代の思い出(鈴木和子) No.14 (65～69頁)

大学本科

大学本科の頃(武藤静子) No.9 (58～62頁) ◆私の大学本科の頃(中村佐喜子) No.11 (70～79頁) ◆高等学部・大学本科に学んで(丹野はな) No.12 (56～57頁) ◆高等学部並びに大学本科のこと(上村悦子) No.12 (58～64頁) ◆大学本科と私の半生(藤沢英子) No.14 (70～80頁) ◆大学本科時代を回顧して(黒川淳子) No.16 (49～59頁)

高月千代

母、千代(1回生)を語る(高月東一) No.3 (6～8頁)

高村智恵子

高村智恵子書簡 No.9 口絵

タゴール

平和のために生きる(高良とみ) No.2 (42～49頁) ◆「軽井沢三泉寮の80年」展 No.3 口絵 ◆タゴールのことなど(青木生子) No.4 (2～3頁) ◆はるかなるえにし(青木生子) No.8 (4～6頁) ◆高良とみの遺稿と成瀬記念館(高良留美子) No.14 (15～18頁) ◆成瀬仁蔵はタゴールをどう理解したか(吉江久彌) No.16 (22～43頁)

多田牧子

多田牧子 組紐展 No.23 口絵

田辺淳吉

父 田辺淳吉と成瀬記念講堂(岩田礼子) No.14 (6～8頁) ◆成瀬記念講堂—設計者のこと、震災復旧のこと、保存修復のことなど(松波秀子) No.22 (46～55頁)

丹下ウメ

丹下ウメ先生の教えを胸に(村岡全子) No.22 (19

一成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の答案の概要から考える（中馬邦）No.29（34～50頁）◆宮澤トシの「実践倫理」答案一成瀬校長の導きとトシの心の軌跡・思索の跡（山根知子）No.30（11～41頁）

渋沢栄一

渋沢栄一の女子教育支援 そして、女子教育への思い（井上潤）No.18（12～14頁）

生涯学習・生涯教育

成瀬先生の生涯教育論（辻功）No.9（6～8頁）◆成瀬仁蔵先生と生涯学習（宮本美沙子）No.11（4～6頁）◆創立百周年の記念事業の一つ「生涯学習総合センター」の実現に期待（宮本美沙子）No.14（4～5頁）◆日本女子大学の伝統としての「生涯学習」—『日本女子大学通信教育関係資料』を刊行して（安井育代）No.20（80～96頁）

上代タノ

上代タノと新渡戸稲造—上代タノ書簡を中心に（島田法子）No.13（75～54頁）◆上代タノ先生に学ぶ（原育子）No.27（6～8頁）◆家政学研究科設置に向けて上代タノがロックフェラー財団に要請した支援（蟻川芳子）No.27（35～48）頁◆上代先生のご遺品整理（松本晴子）No.28（6～8頁）◆上代先生と日本女子大学合唱団（大竹洋子）No.30（42～46頁）

食

成瀬仁蔵と健康教育（佐藤和人）No.18（31～38頁）◆成瀬仁蔵の考えた「食」と健康（徳野裕子）No.23（85～94頁）

『女子教育』

成瀬仁蔵著『女子教育』の中国版と近代中国

における役割について（大浜慶子）No.19（56～62頁）

『女子大学週報』

柳八重関係資料 No.12 口絵

白井規矩郎

成瀬先生の体育観を具象化した人々（馬場哲雄）No.3（10～11頁）◆日本女子大学と体育（馬場哲雄）No.10（10～12頁）

新庄学園（広島県）

広島県新庄学園訪問記—成瀬校長の蒔いた種—（後藤祥子）No.27（10～13頁）

鈴木ひでる

葉学一筋の姉鈴木ひでる（鈴木香代）No.8（65～76頁）◆継ぎの当たった割烹着と女性科学者（蟻川芳子）No.25（4～5頁）◆国立女性教育会館企画展示「女性科学者の誕生～チャレンジした女性たち～」（西村昭子）No.25（6～8頁）◆鈴木ひでるの世界に生きて（飯田枝美）No.25（9～11頁）

生誕記念日

成瀬仁蔵の誕生日の謎（島田法子）No.17（23～29頁）

青鞜

『青鞜』と日本女子大学 No.26 口絵

関口裕子

関口裕子染色作品展 No.30 口絵

戦争

更生・福祉事業に生きて（三田庸子）No.3（42～49頁）◆三年八か月の大戦争（広田寿子）

著作一覧 No.2 (39～41頁)

高等学部

大学本科の頃(武藤静子) No.9 (58～62頁)
◆私の大学本科の頃(中村佐喜子) No.11 (70～79頁) ◆高等学部・大学本科に学んで(丹野はな) No.12 (56～57頁) ◆高等学部並びに大学本科のこと(上村悦子) No.12 (58～64頁) ◆大学本科と私の半生(藤沢英子) No.14 (70～80頁) ◆大学本科時代を回顧して(黒川淳子) No.16 (49～59頁)

河野清丸

日本女子大学附属豊明小学校初代主任河野清丸(友沢桂子) No.3 (30～41頁) ◆河野清丸略歴, 著作 No.3 (71～68頁)

高良とみ

平和のために生きる(高良とみ) No.2(42～49頁)
◆高良とみの遺稿と成瀬記念館(高良留美子) No.14 (15～18頁) ◆激動の時代を生きて—高良とみ展 No.29 口絵

五味保義

五味保義先生のこと、「ゆりの木」のことなど(実藤恒子) No.7 (10～11頁)

『今後の女子教育』

成瀬仁蔵『今後の女子教育』—学生と共に読む(青木生子) No.2 (52～53頁)

澤山保羅

成瀬仁蔵著 “A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について No.7 (23～44頁) ◆成瀬仁蔵著 “A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について(2) No.8 (23～47頁) ◆成瀬仁蔵著 “A

Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について(3) No.9 (23～45頁) ◆成瀬仁蔵著 “A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について(4) No.10 (13～44頁) ◆成瀬仁蔵著 “A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について(5) No.11 (31～43頁) ◆“A Modern Paul in Japan” 成瀬仁蔵著『沢山保羅—現代日本のパウロ—』の成立をめぐる(新井明) No.12(42～54頁)

三綱領

三綱領の書かれた日について—二月二十八日執筆に対する疑問—(石川ムメ) No.4 (41～51頁) ◆自発創生(柴崎武夫) No.6 (6～7頁) ◆生誕一五〇年記念 成瀬仁蔵墨書展 No.24 口絵

三泉寮

「軽井沢三泉寮の80年」展 No.3 口絵◆日本女子大学三泉寮の創設(中野邦) No.4 (28～40頁) ◆三泉寮百周年を記念して 三井高修「成瀬仁蔵肖像」と廣子夫人「成瀬仁蔵肖像画」—没後十年の追悼競作(増淵宗一) No.21 (14～37頁) ◆生誕一五〇年記念 成瀬仁蔵墨書展 No.24 口絵

シェイクスピア劇

英文学科第十一回シェイクスピア劇 関連資料 No.20 口絵◆英語劇「お気に召すまま」の上演(一九五三年)(英文学科新制四回生) No.20(44～79頁) ◆女子大生が演じたシェイクスピア劇 No.21 口絵

実践倫理

宮沢トシと成瀬仁蔵—「実践倫理講話」筆記録を中心に(山根知子) No.15 (25～43頁) ◆新発見史料「平塚らいてう」の答案を読み解く

～14頁)

家政学部

展示「新制家政学部 成立の軌跡」によせて—
大学昇格とGHQ資料（成瀬記念館）No.14（26
～60頁）◆家政学部被服学科（大野静枝）
No.14（61～64頁）◆道喜美代先生との出会い
（江澤郁子）No.18（23～30頁）◆日本女子大
学校の家政学教育—「家政学概論」の講義か
ら—（佐々井啓）No.22（27～38頁）◆家政学
部の拠点・桜楓家政研究館（木下けい）No.24
（56～64頁）

合唱団

上代先生と日本女子大学合唱団（大竹洋子） No.
30（42～46頁）

『家庭週報』

『家庭週報』の変遷（小川美保）No.7（45～
58頁）◆桜楓会『家庭週報』の思い出（小笠
原節子）No.8（61～64頁）◆『家庭週報』を
担った人達—すぎし面影（小笠原節子）No.13
（27～32頁）

亀本信子

日本女子大学・住居学科〈絵画デッサン〉教室
の現在まで 荻太郎と亀本信子・山口都 展 No.
11口絵

軽井沢

軽井沢一昔・中仙道の宿場 今世界のパラダイ
ス—（野見山不二）No.3（8～10頁）◆軽井
沢の自然に囲まれて（三輪信江）No.16（44～
48頁）◆日本女子大学と三井家—「軽井沢別
邸」の保存の可能性の問題と小山市の「小石
川三井家資料」（増淵宗一）No.25（41～70頁）

『軽井沢山上の生活』

「軽井沢山上の生活」の詩について—原詩を尋
ねて—（上）（片桐芳雄）No.28（62～41頁）

◆「軽井沢山上の生活」の詩について—原詩
を尋ねて—（下）（片桐芳雄）No.29（83～67頁）

関東大震災

成瀬記念講堂—設計者のこと、震災復旧のこと、
保存修復のことなど（松波秀子） No.22（46～
55頁）◆「大正拾貳年九月一日 震災善後録
記録係」No.29（60～66頁）

帰一協会

成瀬先生とのふれあいの中で（今岡信一良）No.
1（28～33頁）

ギルマン夫人

成瀬仁蔵とギルマン夫人（山内恵）No.25（15
～27頁）

クリスタル・マクミラン

平和研究と日本女子大学（杉森長子）No.12（12
～14頁）

黒板さき

はは 黒板さきと日本女子大学校（永井路子）No.
8（9～11頁）

健康

→体育

校歌

校歌のことなど（原田夏子）No.13（8～11頁）

甲賀ふじ

日本女子大学附属豊明幼稚園初代主任甲賀ふじ
（前典子）No.2（26～38頁）◆甲賀ふじ略歴、

ウェルズリー女子大学

成瀬先生とウェルズリー女子大学（影山礼子）
No.13（12～14頁）

浮田克躬

成瀬記念館所蔵絵画小展—同時展示・長田喜和「校内風景」— No.2口絵◆心の軌跡—浮田克躬肖像展 No.9 口絵

浦辺鎮太郎

不易流行（青木生子）No.7（4～6頁）◆記念館と赤煉瓦（森本正一）No.10（93～95頁）◆成瀬記念館開館二十周年記念展示 成瀬記念館と設計者・浦辺鎮太郎（岸本美香子）No.19（46～55頁）

桜楓会

桜楓会「家庭週報」の思い出（小笠原節子）No.8（61～64頁）◆桜楓会設立百周年に想う（藤枝修子）No.19（8～10頁）◆成瀬先生生誕一五〇年を迎えて 桜楓会の取り組み（大槻弥栄子）No.23（16～17頁）◆成瀬仁蔵から託された桜楓会の使命（山本和代）No.23（58～73頁）

桜楓家政研究館

家政学部の拠点・桜楓家政研究館（木下けい）
No.24（56～64頁）

桜楓会託児所

桜楓会託児所保母主任 丸山千代（山中裕子） No.30（47～71頁）

大橋広

成瀬仁蔵先生と大橋廣先生（湯浅明）No.11（7～9）◆大学本科時代を回顧して（黒川淳子）No.16（49～59頁）◆同志社女学校と大橋広（坂本清音）No.20（14～19頁）

大橋了介

日本女子大学校を描いた大橋了介 No.2（56～59頁）◆佐伯祐三と大橋了介（浅野徹）No.3（50～53頁）◆大橋了介展—日本女子大学校・パブリックを描く— No.4 口絵

大村嘉代子

祖母・母・子三代、女子大学に学んで（出淵敬子）No.1（6～9頁）◆「目白の雪の日」との3年（小森美巳）No.9（8～10頁）

荻太郎

荻太郎先生に聞く No.5（56～73頁）◆荻太郎展 ヒューマニズムの世界 No.6 口絵◆荻太郎展によせて No.6（58～59頁）◆日本女子大学・住居学科〈絵画デッサン〉教室の現在まで 荻太郎と亀本信子・山口都 展 No.11 口絵◆荻太郎 子どもの世界 展 No.19 口絵◆荻先生の思い出（山口都）No.25（12～14頁）◆附属豊明幼稚園新園舎落成 No.26 口絵

長田喜和

成瀬記念館所蔵絵画小展—同時展示・長田喜和「校内風景」— No.2口絵◆長田喜和「校内風景」展を見て No.2（49頁）◆長田先生をお供びして（鹿野澄子）No.11（12～14頁）

絵画

佐伯祐三と大橋了介（浅野徹）No.3（50～53頁）◆荻太郎先生に聞く No.5（56～73頁）

学寮

学寮の思い出—寮生として寮監として（石塚昌子）No.20（30～42頁）

何香凝

日本女子大学と中国（久保田文次）No.14（12

人名件名索引

A Modern Paul in Japan

成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”-沢山保羅牧師の生涯とその事業について- No.7 (23~44頁) ◆成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”-沢山保羅牧師の生涯とその事業について(2)- No.8 (23~47頁) ◆成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”-沢山保羅牧師の生涯とその事業について(3)- No.9 (23~45頁) ◆成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”-沢山保羅牧師の生涯とその事業について(4)- No.10 (13~34頁) ◆成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”-沢山保羅牧師の生涯とその事業について(5)- No.11 (31~43頁) ◆成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan” 成瀬仁蔵著『沢山保羅-現代日本のパウロー-』の成立をめぐる(新井明) No.12 (42~54頁)

O Lord! Correct Me

O Lord! Correct Meのルーツを辿る(出淵敬子) No.23 (74~84頁)

安座上真紀子

All About Paper Toys 安座上真紀子 20年の軌跡展 No.20 口絵

麻生正蔵

成瀬先生の体育観を具象化した人々(馬場哲雄) No.3 (10~11頁) ◆祖父麻生正蔵のこと(麻生誠) No.8 (11~14頁) ◆人情如山彦(岩橋

ヨシ) No.15 (50~51頁)

アフガニスタン女性教育支援

アフガニスタン女性教育支援に取り組んで(田中若代) No.18 (8~11頁)

阿部次郎

阿部次郎をめぐる手紙展 No.29 口絵

網野菊

偉大なる先輩との交わりから-あの二つの指輪の行方は?(三枝佐枝子) No.19 (26~36頁)

安房直子

大学本科と私の半生(藤澤英子) No.14 (70~80頁) ◆「安房直子・メルヘンの世界」展 No.16 口絵 ◆「安房直子・メルヘンの世界」展に寄せて(乗田令子) No.16 (6~7頁)

一宮道子

回想 校歌のことなど(原田夏子) No.13 (8~11頁)

市村今朝蔵

軽井沢の自然に囲まれて(三輪信江) No.16 (44~48頁)

今岡信一良

成瀬先生とのふれあいの中で(今岡信一良) No.1 (28~33頁)

師岡愛子 もろおか あいこ
〈私と日本女子大学〉戦時下の一学生として
No.11 (65～69頁)

ヤ

安井育代 やすい いくよ
〈資料紹介〉日本女子大学の伝統としての「生涯学習」—『日本女子大学史資料集第九 日本女子大学校通信教育関係資料』を刊行して—
No.20 (80～96頁)

柳文治郎 やなぎ ぶんじろう
〈随想〉母のこと No.8 (7～9頁)

山内恵 やまうち めぐみ
〈研究ノート〉成瀬仁蔵とギルマン夫人 No.25 (15～27頁)

山口都 やまぐち みやこ
〈随想〉新しい出発 No.22 (6～8頁) ◆荻先生の思い出 No.25 (12～14頁)

山中裕子 やまなか ひろこ
〈Bloom as a leader. 時代を切り拓く卒業生〉桜楓会託児所保母主任 丸山千代 No.30 (47～71頁)

山根知子 やまね ともこ
〈研究〉宮沢トシ「真実ノ為ノ勇進」—日本女子大時代の求道性を中心に— No.11 (44～64頁) ◆「宮沢トシと成瀬仁蔵—「実践倫理講話」筆記録を中心に— No.15 (25～41頁) ◆〈研究ノート〉宮沢トシの卒業証書 No.26 (14～24頁) ◆〈新資料紹介〉宮沢トシの「実践倫理」答案—成瀬校長の導きとトシの心の軌跡— No.30 (11～41頁)

山本和代 やまもと かずよ
〈創立者からのメッセージ〉成瀬仁蔵から託された桜楓会の使命 No.23 (58～73頁)

山本鎮雄 やまもと しずお
〈随想〉社会学的世界の解読—「成瀬文庫」について No.4 (4～6頁)

山領まり やまりょう まり
〈修復レポート〉百年館壁面の「龍の図」を修復して No.17 (59～62頁)

湯浅明 ゆあさ あきら
〈随想〉成瀬仁蔵先生の構想と理学部 No.7 (7～9頁) ◆成瀬仁蔵先生と大橋廣先生 No.11 (7～9頁)

湯浅弘子 ゆあさ ひろこ
〈随想〉附属豊明小学校のリトミック No.21 (8～10頁)

横溝修二 よこみぞしゅうじ
〈随想〉附属中学校のクラス授業におけるヴァイオリン教育 No.20 (8～11頁)

横山陽子 よこやま ようこ
〈随想〉回想 敗戦直後の学生生活 No.15 (8～10頁)

吉江久彌 よしえ ひさや
〈研究ノート〉成瀬仁蔵はタゴールをどう理解したか No.16 (22～43頁)

吉田久一 よした きゅういち
〈随想〉断想・宮澤賢治—福祉と「法華経」 No.12 (6～9頁)

(8～9頁)

マ

間瀬登茂子 ませ ともこ

〈調査報告〉成瀬仁蔵のワードローブ No.22 (56～71頁)

松崎彰 まつざき あきら

成瀬記念館の二十周年を祝して No.19 (73～74頁)

松波秀子 まつなみ ひでこ

〈研究ノート〉成瀬記念講堂—設計者のこと、震災復旧のこと、保存修復のことなど No.22 (46～55頁)

松本晴子 まつもと せいこ

〈随想〉上代先生のご遺品整理 No.28 (6～8頁)

前典子 まえ のりこ

〈研究〉日本女子大学附属豊明幼稚園初代主任甲賀ふじ No.2 (26～38頁) ◆〈随想〉附属豊明幼稚園の百周年に思うこと No.21 (10～13頁)

増淵宗一 ますぶち そういち

〈研究〉三泉寮百周年を記念して 三井高修「成瀬仁蔵首像」と廣子夫人「成瀬仁蔵肖像画」—没後十年の追悼競作 No.21 (14～37頁) ◆成瀬仁蔵と近代日本の写真師たち—成瀬仁蔵肖像写真を中心に No.23 (103～130頁) ◆〈報告〉日本女子大学と三井家 「軽井沢別邸」の保存の可能性の問題と小山市の「小石川三井家資料」 No.25 (41～70頁)

三田庸子 みた つねこ

〈聞きがき〉更生・福祉事業に生きて No.3 (42～49頁)

葉袋奈美子 みない なみこ

〈随想〉キャンパスにしたい雑司ヶ谷界限 No.29 (10～13頁)

宮本美沙子 みやもと みさこ

成瀬記念館の階段 No.9 (4～5頁) ◆成瀬記念館開館十周年にあたって No.10 (4～5頁) ◆成瀬仁蔵先生と生涯学習 No.11 (4～6頁) ◆成瀬記念館西生田記念室の開設にあたって No.12 (4～5頁) ◆大学の百周年 No.13 (4～5頁) ◆創立百周年の記念事業の一つ 「生涯学習総合センター」の実現に期待 No.14 (4～5頁) ◆「百年館」と桜 No.15 (4～5頁) ◆成瀬仁蔵先生の教育観 No.16 (4～5頁)

三輪信江 みわ のぶえ

〈私と日本女子大学〉軽井沢の自然に囲まれて No.16 (44～48頁)

武藤静子 むとう しずこ

〈私と日本女子大学〉大学本科の頃 No.9 (58～62頁)

村岡全子 むらおか まさこ

〈私と日本女子大学〉丹下ウメ先生の教えを胸に No.22 (19～26頁)

本井康博 もとい やすひろ

〈随想〉日本女子大学と同志社 成瀬仁蔵と新島襄が蒔いた種 No.17 (10～13頁)

森本正一 もりもと しょういち

記念館と赤煉瓦 No.10 (93～95頁)

守屋良子 もりや よしこ

〈随想〉成瀬記念館分館の思い出 No.30 (6～8頁)

西村昭子 にしむら あきこ
〈随想〉国立女性教育会館企画展示「女性科学者の誕生～チャレンジした女性たち～」 No.25 (6～8頁)

西村陽平 にしむらようへい
〈随想〉土と遊び、土を語らせる―豊明幼稚園の子どもたちの作品から― No.19 (6～8頁)

西山伸 にしやま しん
成瀬記念館開館三〇年に寄せて No.30 (119～120頁)

野見山不二 のみやま ふじ
〈随想〉軽井沢一昔・中仙道の宿場 今・世界のパラダイス No.3 (8～10頁)

野村郁子 のむら いくこ
〈思い出〉成瀬先生の思い出 No.2 (52～54頁)

乗田令子 のりた れいこ
〈随想〉「安房直子・メルヘンの世界」展に寄せて No.16 (6～7頁)

ハ

馬場哲雄 ばば てつお
〈随想〉成瀬先生の体育観を具象化した人々 No.3 (10～11頁) ◆日本女子大学と体育 No.10 (10～12頁)

濱田美枝子 はまだ みえこ
〈研究〉戦時下における歌集『茶の花』・『白堊』の誕生一付 『茶の花』翻刻― No.29 (14～33頁)

早見一十一 はやみ いそい
〈聞きがき〉「人格第一、技術これにつく」をモチーフに美容界に生きて No.5 (45～53頁)

原育子 はら いくこ
〈随想〉上代タノ先生に学ぶ No.27 (6～8頁)

原田夏子 はらた なつこ
〈随想〉回想 校歌のことなど No.13 (8～11頁)

平井卓郎 ひらい たくろう
〈随想〉母 平井章のこと No.10 (6～7頁)

平田広子 ひらた ひろこ
〈随想〉私の学生時代と「信州戦争展」 No.16 (10～12頁)

広田寿子 ひろた ひさこ
〈私と女子大学〉三年八か月の大戦争 No.7 (59～63頁)

弘津友三郎 ひろつ ともしぶろう
〈随想〉姉 弘津千代のこと No.4 (8～9頁)

福井貞子 ふくい さだこ
〈随想〉絵絋展、藍に生きて No.27 (8～10頁)

藤枝修子 ふじえだ しゅうこ
〈随想〉桜楓会設立百周年に想う No.19 (8～10頁)

藤澤英子 ふじさわ ひでこ
〈聞きがき〉大学本科と私の半生 No.14 (70～80頁)

藤田辰夫 ふじた たつお
〈随想〉夢塾 成瀬仁蔵を学んだ子どもたち No.24 (6～8頁)

細矢静子 ほそや しずこ
〈随想〉豊明幼稚園創設八十周年を祝ってNo.2

中寫邦 なかじま くに

〈研究〉日本女子大学三泉寮の創設 No.4 (28～39頁) ◆〈研究〉女子大学の現在—「女子大学は今」展によせて No.8 (48～60頁) ◆成瀬記念館の役割に思う No.10 (103～105頁) ◆〈研究ノート〉成瀬仁蔵の平和思想と女性への提言 No.19 (37～45頁) ◆〈新資料紹介〉新発見資料「平塚らいてう」の答案を読み解く—成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の概要から考える— No.29 (34～45頁) ◆開館三〇年に寄せて No.30 (122～124頁)

永田彩子 ながた あやこ

〈展示と記録〉日本女子大学のおひなさま No.18 (39～50頁) ◆教え子から見た成瀬像 No.22 (72～83頁)

永田英明 ながた ひであき

〈随想〉東北帝国大学と女子学生 No.17 (13～15頁) ◆眞島利行日記と黒田チカ資料にみえる丹下ウメ No.29 (6～7頁)

永田陽子 ながた ようこ

〈随想〉豊明幼稚園 落成式を前にして思うこと—様々な思いを受け継いで新園舎へ— No.26 (6～8頁)

中村佐喜子 なかむら さきこ

〈聞きがき〉私の大学本科の頃 No.11 (70～79頁)

中村輝子 なかむら てるこ

〈随想〉日本女子大学と桜 No.19 (13～16頁)

永村眞 ながむら まこと

〈随想〉企画展「江戸時代に生まれた庶民信仰の空間—音羽と雑司ヶ谷—」 No.26 (9～11頁)

成瀬記念館 なるせきねんかん

成瀬仁蔵研究文献補遺 (その1) No.1 (58～52頁) ◆成瀬仁蔵研究文献補遺 (その2) No.2 (71～67頁) ◆甲賀ふじ略歴・著作一覧 No.2 (39～41頁) ◆河野清丸略歴・著作 No.3 (71～68頁) ◆〈中間報告〉アンケート「太平洋戦争と日本女子大学 (校) 学生生活」について No.12 (24～41頁) ◆〈資料探訪〉展示「新制家政学部 成立の軌跡」によせて—大学昇格とGHQ資料 No.14 (26～60頁)

成瀬仁蔵 なるせ じんぞう

〈資料紹介・翻訳〉“A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について No.7 (23～44頁) ◆“A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について (2) No.8 (23～47頁) ◆“A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について (3) No.9 (23～45頁) ◆“A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について (4) No.10 (13～44頁) ◆“A Modern Paul in Japan”—沢山保羅牧師の生涯とその事業について (5) No.11 (31～43頁) ◆〈未発表資料 成瀬仁蔵講話〉人名件名索引「成瀬仁蔵講話」を参照

仁科節 にしな みさお

〈未発表資料〉仁科節日記 (その1) 大正七年十二月二十九日—大正八年一月三日 No.2 (20～25頁) ◆仁科節日記 (その2) 大正八年一月十五日—二月五日 No.3 (24～29頁) ◆仁科節日記 (その3) 大正八年二月六日—二月二十五日 No.4 (20～27頁) ◆仁科節日記 (その4) 大正八年二月二十六日—三月四日 No.5 (22～31頁) ◆仁科節日記 (補遺)・成瀬校長の病床に侍して〔大正八年三月三日—四日〕 No.6 (23～27頁)

関口裕子 せきぐち ひろこ
〈随想〉「シリーズ`作る、(7) 関口裕子 染色
作品展」を終えて No.30 (8~10頁)

関口文彦 せきぐち ふみひこ
〈随想〉女子大の森の保全について No.28 (12
~14頁)

夕

高月東一 たかつき どういち
〈随想〉母、千代(1回生)を語る No.3 (6~
8頁)

竹中はる子 たけなか はるこ
〈随想〉通信教育創設の頃 No.5 (12~13頁)

多田牧子 ただ まきこ
〈随想〉組物・組紐に思うこと No.23 (13~15頁)

館岡孝 たておか たか
〈随想〉顕微鏡の思い出 No.4 (6~8頁)

田中博次 たなか ひろじ
〈随想〉豊明小学校、成瀬校長の思い出 No.1
(9~11頁)

田中若代 たなか わかよ
〈随想〉アフガニスタン女性教育支援に取り組ん
で No.18 (8~11頁)

田村なか たむら なか
〈聞きがき〉日々“自発創生”に生きて No.1 (34
~41頁)

丹野はな たんの はな
〈私と日本女子大学〉高等学部・大学本科に学
んで No.12 (56~57頁)

千葉よう子 ちば ようこ
〈随想〉美しいときをクリエイトする宮地先生—「宮
地房江・染の粋」展によせて—No.15 (6~7頁)

辻功 つじ いさお
〈随想〉成瀬先生の生涯教育論 No.9(6~8頁)

土屋莊次 つちや そうじ
〈随想〉成瀬記念館で学ぶ No.15 (11~13頁)

塘茂子 つつみ しげこ
〈随想〉義父 塘 茂太郎の思い出 No.13 (14
~19頁)

徳野裕子 とくの ゆうこ
〈研究ノート〉成瀬仁蔵の考えた「食」と健康
No.23 (85~94頁)

友沢桂子 ともざわ けいこ
〈随想〉豊明小学校創設八十周年を祝ってNo.2
(6~7頁) ◆〈研究〉「日本女子大学附属豊明
小学校初代主任河野清丸 No.3 (30~41頁)

豊田ちやう とよた ちょう
〈聞きがき〉母校への想いを子に孫に No.6 (62
~64頁)

ナ

永井路子 ながい みちこ
〈随想〉はは 黒板さきと日本女子大学校No.8 (9
~11頁)

長澤美津 ながさわ みつ
〈成瀬記念館近代短歌展開催に当って〉長澤美
津氏に聞く 聞き手・清部千鶴子 No.6 (42~
57頁)

佐藤和人 さとう かずと

〈創立者からのメッセージ〉成瀬仁蔵と健康教育
No.18 (31～38頁) ◆成瀬仁蔵先生に立ち返り
つつ、前を向く No.28 (4～5頁) ◆成瀬仁蔵
の死に際しての受容と信念 No.29 (4～5頁)
◆成瀬記念館三〇周年記念号に寄せて No.30
(4～5頁)

実藤恒子 さねふじ つねこ

〈随想〉五味保義先生のこと、「ゆりの木」のこ
となど No.7 (10～11頁)

佐野淑 さの あつみ

〈随想〉附属高女の思い出 No.6 (10～12頁)

鹿野澄子 しかの すみこ

〈随想〉長田先生をお偲びして No.11 (12～14
頁)

篠原聡子 しのはら さとこ

〈建物紹介〉傾斜地に寄り添い、子供の成長に
寄り添う建築—豊明幼稚園とさくらナースリーの改
築に参画して— No.26 (25～34頁)

柴崎武夫 しばさき たけお

〈随想〉自発創生 No.6 (6～7頁)

島田法子 しまだ のりこ

〈研究〉上代タノと新渡戸稲造——上代タノ書簡
を中心に No.13 (75～54頁) ◆〈研究ノート〉
成瀬仁蔵の誕生日の謎 No.17 (23～29頁)

下村由紀子 しもむら ゆきこ

〈随想〉附属中学校・高等学校の学校週五日制
に寄せて 五日制になって No.15 (13～15頁)

生野聡 しょうの さとし

〈随想〉日本女子大学の一貫教育における実践
的平和教育～小笠原サマースクール～ No.28
(15～17頁)

白井堯子 しろい たかこ

〈資料探訪〉エリザベス P. ヒューズ—成瀬仁
蔵を助けた英国女子教育のパイオニア No.9 (46
～57頁) ◆〈資料探訪〉E・G・フィリップスと日
本女子大学校—残された書簡を中心に— No.
17 (30～58頁) ◆〈報告〉日英交流と明治期
の女子高等教育—放送大学講義で成瀬仁蔵を
語る No.21 (38～52頁) ◆〈研究ノート〉E・P・
ヒューズの English Literature for Japanese
Students と成瀬仁蔵 No.27 (14～34頁)

杉森長子 すぎもり ながこ

〈随想〉平和研究と日本女子大学 No.12 (12
～14頁)

鈴木一夫 すずき かずお

〈随想〉吉敷探訪 No.11 (9～11頁)

鈴木和子 すずき かずこ

〈私と日本女子大学〉学生時代の思い出 No.14
(65～69頁)

鈴木香代 すずき かよ

〈聞きかき〉葉業一筋の姉 鈴木ひでる No.8 (65
～76頁)

鈴木賢次 すずき けんじ

〈随想〉成瀬先生の住まい No.9 (11～13頁)

鈴木秀幸 すずき ひでゆき

日本女子大学の大学史および大学史活動のこと
No.19 (75～77頁)

～27頁)

久保田文次 くぼた ぶんじ

〈随想〉日本女子大学と中国 No.14 (12～14頁)

黒川淳子 くろかわ きよこ

〈聞きがき〉大学本科時代を回顧して No.16 (49～59頁)

黒瀬優子 くろせ ゆうこ

〈随想〉宮本美沙子先生の思い出 No.29 (8～10頁)

桑尾光太郎 くわお こうたろう

開館二十周年によせて No.19 (78～79頁)

高良とみ こうら とみ

〈聞きがき〉平和のために生きる No.2 (42～49頁)

高良留美子 こうら るみこ

〈随想〉高良とみの遺稿と成瀬記念館 No.14 (15～18頁)

後藤祥子 ごとう しょうこ

創立百年を超えて No.17 (6～7頁) ◆温故知新 No.18 (4～5頁) ◆開館二十周年を迎えて No.19 (4～5頁) ◆新たな時代における記念館の役割 No.20 (4～5頁) ◆現代に生きる創立者の願い No.21 (4～5頁) ◆創立者生誕百五十年に向けて No.22 (4～5頁) ◆創立者生誕一五〇年記念諸行事に寄せて No.23 (6～9頁) ◆〈随想〉広島県新庄学園訪問記—成瀬校長の蒔いた種— No.27 (10～13頁)

後藤久 ごとう ひさし

〈随想〉私の成瀬講堂物語 No.21 (6～8頁)

小林すみ江 こばやし すみえ

〈私と日本女子大学〉零(ゼロ)からの出発—草創期の附属高校(西生田校)— No.15 (44～49頁)

小林基男 こばやし もとお

〈随想〉附属中学校・高等学校の学校週五日制に寄せて 五日制のめざすもの No.15 (15～17頁)

小森美巳 こもり みみ

〈随想〉『目白の雪の日』との3年 No.9 (8～10頁) ◆「目白の雪の日」と私たちの歴史 No.24 (12～15頁)

近藤久子 こんどう ひさこ

〈聞きがき〉いのち・環境を守って 鳥取県連合婦人会50年のあゆみとともに No.13 (33～44頁)

サ

三枝佐枝子 さえぐさ さえこ

〈寄贈資料に寄せて〉偉大なる先輩との交わりから—あの二つの指輪の行方は? No.19 (26～36頁)

坂本清音 さかもと きよね

〈交流〉同志社女学校と大橋広 No.20 (14～19頁)

佐々井啓 ささい けい

〈研究〉日本女子大学の服装史 No.5 (32～44頁) ◆〈報告〉日本女子大学校の家政学教育—「家政学概論」の講義から— No.22 (27～38頁)

ねて No.10 (84～69頁) ◆〈随想〉成瀬先生とウェルズリー女子大学 No.13 (12～14頁)

片桐芳雄 かたぎりよしお

〈資料探訪〉成瀬仁蔵の実践倫理講話—『実践倫理講話筆記(明治三十七・三十八年度ノ部)』を読む— No.26 (35～47頁) ◆〈研究ノート〉「軽井沢山上の生活」の詩について—原詩を尋ねて—(上) No.28 (62～41頁) ◆「軽井沢山上の生活」の詩について—原詩を尋ねて—(下) No.29 (83～67頁)

金丸操 かねまる みさお

〈聞きがき〉今も心に残る名講義 No.6 (65～66頁)

上村美紗子 かみむら みさこ

〈随想〉森戸辰男文庫のこと No.16 (12～14頁)

亀山健吉 かめやま けんきち

〈随想〉成瀬文庫のN・E・D No.2 (4～5頁)

唐澤富太郎 たらさわ とみたらう

〈講話〉先覚者としての成瀬先生の教育思想 No.6 (28～41頁)

川端康雄 かわばた やすお

〈資料紹介〉成瀬仁蔵インタビュー—『ニューヨークタイムズ』1912年11月10日 No.26 (72～52頁)

河村浩一 かわむら こういち

〈随想〉長州・大江戸スタンプラリー No.23 (10～12頁)

河村サダ[※] かわむら さだ

〈聞きがき〉母校とともに72年 その1 No.9 (63

～74頁) ◆〈聞きがき〉母校とともに72年 その2 附属中学校設立の頃 No.10 (45～52頁)

岸本美香子 きしもと みかこ

〈展示と記録〉成瀬記念館開館二十周年記念展示 成瀬記念館と設計者・浦辺鎮太郎 No.19 (46～55頁) ◆日本女子大学附属豊明小学校・幼稚園 成瀬記念講堂 百周年記念 豊明百年の浪漫展 No.21 (62～78頁) ◆日本女子大学と国際交流展 No.23 (151～172頁)

北川定男 きたがわ さだお

〈随想〉「西生田成瀬講堂」によせて No.13 (6～8頁)

木下けい きのした けい

〈随想〉西生田校地草創の頃 No.6 (8～10頁) ◆限りない心の安らぎと糧 No.10 (96～99頁) ◆〈遺稿〉家政学部の拠点・桜楓家政研究館 No.24 (56～64頁)

木下法也 きのした のりや

〈随想〉成瀬記念館に思う No.3 (4～5頁)

清部千鶴子 きよべ ちずこ

〈成瀬記念館近代短歌展開催に当って〉長澤美津氏に聞く 聞き手・清部千鶴子 No.6 (42～57頁)

吉良芳恵 きら よしえ

〈未発表資料〉広岡浅子とその時代—日本女子大学校への夢— No.30 (72～92頁)

功力俊文 くぬぎ としふみ

〈随想〉新校舎のこと—豊明プロポーザル方式— No.14 (9～11頁) ◆〈探訪〉八回生・津田治子さんを訪ねて—創立者の肖像画(二)— No.24 (16

遠藤トモ えんどう とも

〈随想〉「成瀬仁蔵を取り巻く人々」展について
No.17 (8～10頁)

大門泰子 おおかど やすこ

〈調査報告〉成瀬仁蔵の結婚と離婚—親族関係からのアプローチ No.23 (131～150頁) ◆〈随想〉もっと書架があったらいいのに……—中畠邦先生の蔵書をいただいて— No.26 (11～13頁)
◆〈調査報告〉旧制時代における本学への留学生 附 日本女子大学校留学生名簿 No.27 (49～70頁)

大島澄 おおしま すみ

〈随想〉祖父森村市左衛門の思い出 No.5 (9～11頁)

大竹洋子 おおたけ ようこ

〈日本女子大学と私〉上代先生と日本女子大学合唱団 No.30 (42～46頁)

大塚泰弘 おおつか やすひろ

〈随想〉生田の森の四季 No.24 (9～12頁)

大槻弥栄子 おおつき やえこ

〈随想〉成瀬先生生誕一五〇年を迎えて 桜楓会の取り組み No.23 (16～17頁)

大野静枝 おおの しずえ

〈私と日本女子大学〉家政学部被服学科に所属して No.14 (61～65頁)

大浜慶子 おおはま けいこ

〈資料紹介〉成瀬仁蔵著『女子教育』の中国語版と近代中国における役割について No.19 (56～62頁)

大町久世 おおまち ひさよ

〈聞きがき〉継続は力なりをモットーに地域活動に生きる No.7 (64～72頁)

大森秀子 おおもり ひでこ

〈研究〉成瀬仁蔵の「帰一」に基づく宗教的人間形成論 No.23 (18～45頁) ◆〈研究ノート〉成瀬仁蔵の実践倫理にみる神智学 No.28 (18～30頁)

小笠原節子 おがさわら せつこ

〈私と日本女子大学〉桜楓会『家庭週報』の思い出 No.8 (61～64頁) ◆〈私と日本女子大学〉『家庭週報』を担った人達—すぎし面影 No.13 (27～32頁)

小川信子 おがわ のぶこ

〈成瀬記念館絵画展によせて〉荻太郎先生に聞く 聞き手・小川信子 No.5 (56～73頁) ◆〈随想〉卒業生アンケートによせてNo.8 (14～15頁)
◆〈建物紹介〉日本女子大学附属豊明幼稚園 No.25 (28～40頁)

小川美保 おがわ みほ

〈研究ノート〉『家庭週報』の変遷 No.7 (45～58頁)

荻太郎 おぎ たろう

〈成瀬記念館絵画展によせて〉荻太郎先生に聞く 聞き手・小川信子 No.5 (56～73頁)

小尾欣一 おび きんいち

〈随想〉理学部十周年に思う No.18 (6～8頁)

カ

影山礼子 かげやま れいこ

〈資料探訪〉成瀬仁蔵のアメリカ留学の故地を訪

寮監として No.20 (30～42頁)

石村伎俱美 いしむら きくみ

〈聞きがき〉女子教育ひと筋に生きて No.4 (52～59頁)

出渕敬子 いずぶち けいこ

〈随想〉祖母・母・子三代、女子大学に学んで No.1 (6～9頁) ◆〈研究ノート〉O Lord! Correct Me のルーツを辿る No.23 (74～84頁)

泉悦子 いずみ えつこ

〈随想〉「心理学者 原口鶴子の青春」映画製作 No.22 (8～10頁)

一番ヶ瀬康子 いちばんがせ やすこ

成瀬記念館への想いと願い No.10 (100～102頁)

伊藤なを いたう なお

日本女子大学の思い出 断章 No.5 (54～55頁)

伊藤寿和 いたう としかず

〈随想〉日本女子大学周辺のフィールドワーク No.16 (8～10頁)

稲沼史 いなぬま ふみ

〈思い出〉成瀬先生と“真面目” No.2 (50～52頁)

井上潤 いのうえ じゅん

〈随想〉渋沢栄一の子教育支援 そして、女子教育への思い No.18 (12～14頁) ◆成瀬記念館と共に三〇年 No.30 (115～118頁)

井上光 いのうえ みつ

〈随想〉附属高等学校に創立者の教育理想をみ

る No.20 (11～13頁)

今市涼子 いまいち りょうこ

〈随想〉理学部開設二〇周年に思う No.28 (9～11頁)

今岡信一良 いまおか しんいちろう

〈訪問インタビュー〉成瀬先生とのふれあいの中で No.1 (28～33頁)

今島実 いまじま みのる

〈随想〉日本女子大学の理科教育——葉のスナップ写真から No.10 (7～10頁)

今村晋 いまむら すずむ

〈随想〉成瀬先生と聖書 No.5 (8～9頁)

岩田礼子 いわた れいこ

〈随想〉父 田辺淳吉と成瀬記念講堂 No.14 (6～8頁)

岩橋ヨシ いわはし よし

〈思い出を語る〉人情如山彦 No.15 (50～51頁)

生田千恵子 いくた ちえこ

〈聞きがき〉通信教育学生時代——知的飢餓感からの解放・学ぶことの歓び No.15 (52～63頁)

上村悦子 うえむら えつこ

〈私と日本女子大学〉高等学部並びに大学本科のこと No.12 (58～64頁)

江澤郁子 えざわ いくこ

〈日本女子大学と私〉道 喜美代先生との出会い No.18 (23～30頁)

執筆索引
(五十音順)

凡例：
執筆者名 よみ
題目 冊子No.(頁)

ア

青木生子 あおき たかこ

発刊によせて No.1 (2～3頁) ◆成瀬仁蔵『今後の女子教育』—学生と共に読む No.2 (2～3頁) ◆母恋い No.3 (2～3頁) ◆タゴールのことなど No.4 (2～3頁) ◆成瀬記念館創設五周年を迎えて No.5 (6～7頁) ◆静謐な空間 No.6 (4～5頁) ◆不易流行 No.7 (4～6頁) ◆はるかなるえにし No.8 (4～6頁) ◆開館十周年によせて No.10 (87～92頁) ◆開館の頃(談) No.30 (121頁)

秋山俱子 あきやま ともこ

成瀬記念館開館の頃、そして未来へ No.19 (80～89頁)

安座上真紀子 あさがみ まきこ

〈随想〉ペーパートイの二十年 No.20 (6～8頁)

浅野徹 あさの とおる

〈紹介〉佐伯祐三と大橋了介 No.3 (50～53頁)

麻生誠 あそう まこと

〈随想〉祖父麻生正蔵のこと No.8 (11～14頁)

綾野道江 あやの みちえ

〈随想〉短歌・俳句と高校教育 No.12 (10～11頁)

新井明 あらい あきら

〈資料紹介〉成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan” 成瀬仁蔵著『沢山保羅—現代日本のパウロ—』の成立をめぐる No.12 (42～54頁) ◆〈講話〉三綱領について—軽井沢の自然のなかで No.22 (11～18頁) ◆〈「講話」後日譚〉成瀬仁蔵の英語による講演とその記録 No.23 (46～57頁) ◆〈書評〉大森秀子著『多元的宗教教育の成立過程』 No.24 (28～29頁)

蟻川芳子 ありかわ よしこ

歴史的資料に魅せられて No.24 (4～5頁) ◆継ぎの当たった割烹着と女性科学者 No.25 (4～5頁) ◆三綱領との出会い No.26 (4～5頁) ◆創立一二〇周年に向けて新たな日本女子大学を目指す No.27 (4～5頁) ◆〈資料探訪〉家政学研究科設置に向けて上代タノがロックフェラー財団に要請した支援 No.27 (35～48頁)

飯田枝美 いいだ えみ

〈随想〉鈴木ひでのるの世界に生きて No.25 (9～11頁)

石垣典子 いしがき のりこ

〈随想〉本学職員としての成瀬記念館分館の思い出 No.19 (11～13頁)

石川松太郎 いしかわ まつたろう

〈随想〉“成瀬蔵書”より No.1 (4～6頁)

石川ムメ いしかわ むめ

〈研究〉三綱領の書かれた日について—二月二十八日執筆に対する疑問 No.4 (41～51頁)

石塚昌子 いづか まさこ

〈日本女子大学と私〉学寮の思い出—寮生として

□絵

シリーズ“創る”(7) 関口裕子染色作品展
関口裕子「ムステイエ・サント・マリ」

巻頭言

成瀬記念館三〇周年記念号に寄せて
…………… 佐藤和人 …… 4

随想

成瀬記念館分館の思い出 … 守屋良子 …… 6

「シリーズ“創る”(7) 関口裕子

染色作品展」を終えて …… 関口裕子 …… 8

新資料紹介

宮澤トシの「実践倫理」答案

—成瀬校長の導きとトシの心の軌跡—

…………… 山根知子 …… 11

日本女子大学と私

上代先生と日本女子大学合唱団

…………… 大竹洋子 …… 42

Bloom as a leader. 時代を切り拓く卒業生

桜楓会託児所保母主任 丸山千代

…………… 山中裕子 …… 47

未発表資料 35

広岡浅子とその時代

—日本女子大学校への夢—

…………… 吉良芳恵 …… 72

成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡

明治三二年三月三日

明治三二年四月二日

未発表資料 36

成瀬仁蔵講話 1 大学部二、三学年にて

—明治四十四年七月五日……………93

成瀬仁蔵講話 2 第一学年生まとめの会

—明治四十四年七月九日 …… 102

二〇一四年業務日誌 …… 106

展示の記録(成瀬記念館／西生田記念室)

…………… 111

成瀬記念館開館三〇周年特集

成瀬記念館と共に三〇年……………井上潤 … 115

成瀬記念館開館三〇年に寄せて

…………… 西山伸 … 119

開館の頃 …… 青木生子(談) … 121

開館三〇年に寄せて …… 中罵邦 … 122

「成瀬記念館」総目次／

執筆者索引／人名件名索引

1～30号(1985～2015) …… 177

成瀬記念館略年表 …… 137

成瀬記念館・

西生田記念室展示一覧 …… 135

成瀬記念館刊行物 …… 127

No. 28 2013

□絵

理学部開設 20 周年記念展

一日白^{リケジヨ}の理系女子物語

参考図版 精神的律動の諧和を表す絵

成瀬仁蔵の依頼により柳敬助が本の
挿絵を模写したもの

巻頭言

成瀬仁蔵先生に立ち返りつつ、前を向く
…………… 佐藤和人 …… 4

随想

上代先生のご遺品整理 …… 松本晴子 …… 6
理学部開設二〇周年に思う 今市涼子 …… 9
女子大の森の保全について 関口文彦 12

日本女子大学の一貫教育における
実践的平和教育～小笠原

サマースクール～ …… 生野 聡 …… 15

研究ノート

成瀬仁蔵の実践倫理にみる神智学
…………… 大森秀子 …… 18

未発表資料 32

成瀬仁蔵講話 1 大学部全体の為に
—明治四十四年三月二十二日 …… 31

研究ノート

「軽井沢山上の生活」の詩について
—原詩を尋ねて—(上) 片桐芳雄 …… 62
二〇一二年度活動の記録 …… 63
二〇一二年度展示の記録 …… 68

No. 29 2014

□絵

阿部次郎をめぐる手紙展

激動の時代を生きて—高良とみ展

巻頭言

成瀬仁蔵の死に際しての受容と信念
…………… 佐藤和人 …… 4

随想

眞島利行日記と黒田チカ資料にみえる
丹下ウメ …… 永田英明 …… 6
宮本美沙子先生の思い出 黒瀬優子 …… 8
キャンパスにしたい雑司ヶ谷界隈
…………… 葉袋奈美子 …… 10

研究

戦時下における歌集『茶の花』・
『白埴』の誕生—付 『茶の花』翻刻—
…………… 濱田美枝子 …… 14

新資料紹介

新発見資料「平塚らいてう」の答案を読み
解く

—成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の
概要から考える— …… 中島 邦 …… 34

未発表資料 33

成瀬仁蔵講話 1 大学部全体の御話
—明治四十四年五月三十一日 …… 51

未発表資料 34

「大正拾貳年九月一日
震災善後録 記録係」 …… 60

研究ノート

「軽井沢山上の生活」の詩について
—原詩を尋ねて—(下) 片桐芳雄 …… 83
二〇一三年度活動の記録 …… 84
二〇一三年度展示の記録 …… 89

随想

- 豊明幼稚園 落成式を前にして思うこと
—様々な思いを受け継いで新園舎へ—
…………… 永田陽子 …… 6
- 企画展「江戸時代に生まれた
庶民信仰の空間—音羽と雑司ヶ谷—」
…………… 永村 真 …… 9
- もっと書架があったらいいのに…
—中島邦先生の蔵書をいただいて—
…………… 大門泰子 …… 11

研究ノート

- 宮澤トシの卒業証書 …… 山根知子 …… 14

建物紹介

- 傾斜地に寄り添い、子供の成長に寄り添う建
築
—豊明幼稚園とさくらナースリーの
改築に参画して— …… 篠原聡子 …… 25

資料探訪

- 成瀬仁蔵の実践倫理講話
—『実践倫理講話筆記(明治三十七・
十八年度ノ部)』を読む—
…………… 片桐芳雄 …… 35

未発表資料 29

- 成瀬仁蔵講話 1 四十二年度計画発表会
—明治四十二年四月十八日— …… 42
- 成瀬仁蔵講話 2 第一学年にて
—明治四十二年四月二十四日— …… 48

資料紹介

- 成瀬仁蔵インタビュー
—『ニューヨークタイムズ』
1912年11月10日 …… 川端康雄 …… 72
- 二〇一〇年度活動の記録 …… 73
- 二〇一〇年度展示の記録 …… 79

No. 27 2012

□絵

- シリーズ“創る”(6)
藍に生きて 福井貞子 絵絋展
創立一一〇周年記念出版物

巻頭言

- 創立一二〇周年に向けて
新たな日本女子大学を目指す
…………… 蟻川芳子 …… 4

随想

- 上代タノ先生に学ぶ …… 原 育子 …… 6
- 絵絋展、藍に生きて …… 福井貞子 …… 8
- 広島県新庄学園訪問記
—成瀬校長の蒔いた種— 後藤祥子 10

研究ノート

- E・P・ヒューズの English Literature for
Japanese Students と成瀬仁蔵
…………… 白井堯子 …… 14

資料探訪

- 家政学研究科設置に向けて上代タノが
ロックフェラー財団に要請した支援
…………… 蟻川芳子 …… 35

調査報告

- 旧制時代における本学への留学生
附 日本女子大学校留学生名簿
…………… 大門泰子 …… 49

未発表資料 30

- 成瀬仁蔵講話 1 第一学年に於て
—明治四十三年五月十四日— …… 71
- 成瀬仁蔵講話 2 春期運動会批評会後にて
—明治四十三年五月二十一日— …… 78

未発表資料 31

- 成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡
明治二九年六月一日 …… 80
- 二〇一一年度活動の記録 …… 85
- 二〇一一年度展示の記録 …… 90

「目白の雪の日」と私たちの歴史 …………… 小森美巳 …… 12	一明治三十八年五月二十四日 …… 33
探訪	成瀬仁蔵講話3 第二学年 倫理講話 一明治三十八年五月二十六日 …… 36
八回生・津田治子さんを訪ねて 創立者の肖像画(二) …… 功力俊文 …… 16	感想文 創立者成瀬仁蔵 生誕一五〇年を迎えて 一日本女子大学・各附属校園より 寄せられた声 …… 40
書評 大森秀子著『多元的宗教教育の成立過程』 …………… 新井 明 …… 28	遺稿 家政学部の拠点・桜楓家政研究館 …………… 木下けい …… 56
未発表資料 27 成瀬仁蔵講話1 桜楓会例会ニ於テ 一明治三十八年五月十四日一 …… 30	二〇〇八年度活動の記録 …… 65
成瀬仁蔵講話2 第三学年倫理学	二〇〇八年度展示の記録 …… 70

No. 25 2010

□絵	報告
「成瀬記念館 開館二五周年記念展」 追悼 荻 太郎 先生	日本女子大学と三井家 一「軽井沢別邸」の保存の可能性の 問題と小山市の「小石川三井家資料」 …………… 増淵宗一 …… 41
巻頭言 継ぎの当たった割烹着と 女性科学者 …… 蟻川芳子 …… 4	未発表資料 28 成瀬仁蔵講話1 始業式ニテ 一明治四十二年四月十三日 …… 71
随想 国立女性教育会館企画展示 「女性科学者の誕生～チャレンジした 女性たち～」…………… 西村昭子 …… 6	成瀬仁蔵講話2 大学部新入生歓迎会ニテ 一明治四十二年四月十七日 …… 78
鈴木ひでるの世界に生きて 飯田枝美 …… 9	二〇〇九年度活動の記録 …… 81
荻先生の思い出 …… 山口 都 …… 12	二〇〇九年度展示の記録 …… 87
研究ノート 成瀬仁蔵とギルマン婦人 山内 恵 …… 15	
建物紹介 日本女子大学附属豊明幼稚園 …………… 小川信子 …… 28	

No. 26 2011

□絵	巻頭言
附属豊明幼稚園新園舎落成 『青鞥』創刊一〇〇周年記念展 『『青鞥』と日本女子大学』	三綱領との出会い …… 蟻川芳子 …… 4

調査報告	二〇〇六・二〇〇七年度活動の記録 …… 84
成瀬仁蔵のワードローブ 間瀬登茂子 56	展示の記録(二〇〇七年一月~十二月)
展示と記録	…………… 90
教え子から見た成瀬像 …… 永田彩子 …… 72	

No. 23 2008 成瀬仁蔵生誕 150 年記念号

□絵	研究ノート
成瀬仁蔵生誕一五〇年記念展	〇 Lord ! Correct Me のルーツを辿る
「天職に生きる」・記念行事	…………… 出淵敬子 …… 74
シリーズ“創る”(5) 伝統の美と先端技術	成瀬仁蔵の考えた「食」と健康
多田牧子 組紐展	…………… 徳野裕子 …… 85
巻頭言	未発表資料 26
創立者生誕一五〇年記念諸行事に寄せて	成瀬仁蔵講話 1 第一学年 実践倫理
…………… 後藤祥子 …… 6	—明治三十八年五月八日 …… 95
随想	成瀬仁蔵講話 2 第三学年 倫理学
長州・大江戸スタンプラリー	—明治三十八年五月十日 …… 99
…………… 河村浩一 …… 10	研究
組物・組紐に思うこと …… 多田牧子 …… 13	成瀬仁蔵と近代日本の写真師たち
成瀬先生生誕一五〇年を迎えて	—成瀬仁蔵肖像写真を中心に
桜楓会の取り組み …… 大槻弥栄子 …… 16	…………… 増淵宗一 …… 103
研究	調査報告
成瀬仁蔵の「帰一」に基づく	成瀬仁蔵の結婚と離婚
宗教の人間形成論 …… 大森秀子 …… 18	—親族関係からのアプローチ
「講話」後日譚	…………… 大門泰子 …… 131
成瀬仁蔵の英語による講演とその記録	展示と記録
…………… 新井 明 …… 46	日本女子大学と国際交流 展
創立者からのメッセージ	…………… 岸本美香子 …… 151
成瀬仁蔵から託された桜楓会の使命	二〇〇七年度活動の記録 …… 173
…………… 山本和代 …… 58	展示の記録(二〇〇八年一月~三月)
	…………… 175

No. 24 2009

□絵	随想
生誕一五〇年記念「成瀬仁蔵墨書展」	夢塾 成瀬仁蔵を学んだ子どもたち
巻頭言	…………… 藤田辰夫 …… 6
歴史的資料に魅せられて 蟻川芳子 …… 4	生田の森の四季 …… 大塚泰弘 …… 9

No. 21 2006

□絵	未発表資料 24
女子大生が演じたシェイクスピア劇 展	成瀬仁蔵講話 1
巻頭言	体育ニ就キテ
現代に生きる創立者の願い 後藤祥子 … 4	一明治三十八年五月一日 …………… 53
随想	成瀬仁蔵講話 2
私の成瀬講堂物語 …………… 後藤 久 …… 6	第二学年倫理講話
附属豊明小学校のリトミック	一明治三十八年五月五日 …………… 60
…………… 湯浅弘子 …… 8	展示と記録
附属豊明幼稚園の百周年に思うこと	日本女子大学附属豊明小学校・幼稚園
…………… 前 典子 …… 10	成瀬記念講堂 百周年記念
研究	豊明百年の浪漫展 … 岸本美香子 …… 62
三泉寮百周年を記念して 三井高修	二〇〇五・二〇〇六年度活動の記録 …… 79
「成瀬仁蔵肖像」と廣子夫人「成瀬仁蔵	展示の記録(二〇〇六年一月～十二月)
肖像画]—没後十年の追悼競作	…………… 88
…………… 増淵宗一 …… 14	
報告	
日英交流と明治期の女子高等教育	
一放送大学講義で成瀬仁蔵を語る	
…………… 白井堯子 …… 38	

No. 22 2007

□絵	報告
シリーズ“創る”(4)	日本女子大学校の家政学教育
記憶の都市を求めて 山口 都 絵画展	—「家政学概論」の講義から—
巻頭言	…………… 佐々井 啓 …… 27
創立者生誕百五十年に向けて	未発表資料 25
…………… 後藤祥子 …… 4	成瀬仁蔵講話 1
随想	通学生総会ニ於テ
新しい出発 …………… 山口 都 …… 6	一明治三十八年五月五日 …………… 39
「心理学者 原口鶴子の青春」	成瀬仁蔵講話 2
映画製作にこめた思い 泉 悦子 …… 8	第三学年 実践倫理講話
講話	一明治三十八年五月六日 …………… 43
三綱領について—軽井沢の自然のなかで	研究ノート
…………… 新井 明 …… 11	成瀬記念講堂 一設計者のこと、
私と日本女子大学	震災復旧のこと、保存修復のことなど
丹下ウメ先生の教えを胸に 村岡全子 19	…………… 松波秀子 …… 46

本学職員としての成瀬記念館	
分館の思い出	石垣典子 …… 11
日本女子大学と桜	中村輝子 …… 13
未発表資料	22
成瀬仁蔵講和 始業式ニ於テ	
—明治三十八年四月十二日	…………… 17
寄贈資料に寄せて	
偉大なる先輩との交わりから	
—あの二つの指輪の行方は？—	…………… 三枝佐枝子 …… 26
研究ノート	
成瀬仁蔵の平和思想と女性への提言	…………… 中嶌 邦 …… 37
展示と記録	
成瀬記念館開館二十周年記念展示	
成瀬記念館と設計者・浦辺鎮太郎	…………… 岸本美香子 …… 46

No. 20 2005

□絵	
安座上 真紀子 二十年の軌跡 展	
英文学科第十一回シェイクスピア劇関連資料	
巻頭言	
新たな時代における記念館の役割	…………… 後藤祥子 …… 4
随想	
ペーパートーイの二十年	…………… 安座上真紀子 …… 6
附属中学校のクラス授業における	
ヴァイオリン教育	…………… 横溝修二 …… 8
附属高等学校に創立者の教育理想をみる	…………… 井上 光 …… 11
交流	
同志社女学校と大橋 広	… 坂本清音 …… 14
未発表資料	23
成瀬仁蔵講話 1 新入生ノ入学式ニ於テ	
—明治三十八年四月二十一日	…………… 20

資料紹介	
成瀬仁蔵著『女子教育』の中国語版と	
近代中国における役割について	…………… 大浜慶子 …… 56
二〇〇三年度活動の記録	
成瀬記念館 開館二十周年特集	
成瀬記念館の二十周年を祝して	…………… 松崎 彰 …… 73
日本女子大学の大学史および	
大学史活動のこと	…………… 鈴木秀幸 …… 75
開館二十周年によせて	桑尾光太郎 …… 78
成瀬記念館会館の頃、そして未来へ	…………… 秋山俱子 …… 80
「成瀬記念館」総目次・	
執筆者索引・人名件名索引	…………… 131
成瀬記念館この10年(94年以降)	…………… 109

成瀬仁蔵講話 2 一学年実践倫理講和	
—明治三十八年四月二十四日	…………… 24
日本女子大学と私	
学寮の思い出—寮生として寮監として—	…………… 石塚昌子 …… 30
記録	
英語劇「お気に召すまま」の上演	
(一九五三年)	…………… 英文学科新制四回生 …… 40
資料紹介	
日本女子大学の伝統としての「生涯学習」	
—『日本女子大学史資料集第九 日本女子	
大学校通信教育関係資料』を刊行して—	…………… 安井育代 …… 80
二〇〇四年度活動の記録	…………… 97
展示の記録(二〇〇五年一月～十二月)	…………… 102

No. 17 2001・2002

□絵

日本女子大学創立百周年記念特別展示
 巻頭言
 創立百年を超えて …… 後藤祥子 …… 6
 随想
 「成瀬仁蔵を取り巻く人々」展について
 …… 遠藤トモ …… 8
 日本女子大学と同志社
 成瀬仁蔵と新島襄が蒔いた種
 …… 本井康博 …… 10
 東北帝国大学と女子学生 永田英明 …… 13
 未発表資料 20
 成瀬仁蔵講話 お別れの会
 一明治三十八年三月二十六日 …… 16

研究ノート

成瀬仁蔵の誕生日の謎 … 島田法子 …… 23
 資料探訪
 E・G・フィリップスと
 日本女子大学校—残された書簡を中心に
 …… 白井堯子 …… 30
 修復レポート
 百年館壁面の「龍の図」を修復して
 …… 山領まり …… 59
 記念館見学記
 「成瀬仁蔵 その生涯—明治期の
 日本女子大学校」展を観て …… 65
 成瀬記念館 2000, 2001 年度
 活動の記録 …… 69

No. 18 2003

□絵

日本女子大学理学部十周年記念
 自然科学教育の百年 展
 巻頭言
 温故知新 …… 後藤祥子 …… 4
 随想
 理学部十周年に思う …… 小尾欣一 …… 6
 アフガニスタン女性教育支援に
 取り組んで …… 田中若代 …… 8
 渋沢栄一の子教育支援 そして、
 女子教育への思い …… 井上 潤 …… 12

未発表資料 21

成瀬仁蔵講話
 研究生並びニ卒業生ノ為メニ
 一明治三十八年三月二十九日 …… 15
 日本女子大学と私
 道 喜美代先生との出会い 江澤郁子 23
 創立者からのメッセージ
 成瀬仁蔵と健康教育 …… 佐藤和人 …… 31
 展示と記録
 日本女子大学のおひなさま 永田彩子 39
 2002 年度活動の記録 …… 51

No. 19 2004

□絵

荻 太郎 子どもの世界 展
 巻頭言
 開館二十周年を迎えて … 後藤祥子 …… 4

随想

土と遊び、土を語らせる
 一豊明幼稚園の子どもたちの作品から—
 …… 西村陽平 …… 6
 桜楓会設立百周年に想う 藤枝修子 …… 8

No. 15 1999

□絵	—明治四十二年一月十三日 …………… 22
シリーズ“創る”(2)宮地房江・染の粋 展	研究
巻頭言	宮沢トシと成瀬仁蔵
「百年館」と桜 …………… 宮本美沙子 …… 4	—「実践倫理講話」筆記録を中心に
随想	…………… 山根知子 …… 25
美しいときをクリエイトする宮地先生	私と日本女子大学
—「宮地房江・染の粋」展によせて	零(ゼロ)からの出発
…………… 千葉よう子 …… 6	—草創期の附属高校(西生田校)
回想 敗戦直後の学生生活 横山陽子 …… 8	…………… 小林すみ江 …… 44
成瀬記念館で学ぶ …………… 土屋莊次 …… 11	思い出を語る
附属中学校・高等学校の学校五日制に寄せて	人情如山彦 …………… 岩橋ヨシ …… 50
五日制になって …… 下村由紀子 …… 13	聞きがき
五日制のめざすもの …… 小林基男 …… 15	通信教育学生時代
未発表資料 18	—知的飢餓感からの解放・
成瀬仁蔵講話 1 高等女学校修身講話会ニ	学ぶことの歓び …… 生田千恵子 …… 52
テ—明治四十二年一月十一日 …………… 18	成瀬記念館 '98年度活動の記録 …………… 64
成瀬仁蔵講話 2 第三学年ニテノ御話	

No. 16 2000

□絵	研究ノート
安房直子・メルヘンの世界 展	成瀬仁蔵はタゴールをどう理解したか
巻頭言	…………… 吉江久彌 …… 22
成瀬仁蔵先生の教育観 宮本美沙子 …… 4	私と日本女子大学
随想	軽井沢の自然に囲まれて 三輪信江 …… 44
「安房直子・メルヘンの世界」展に寄せて	聞きがき
…………… 乗田令子 …… 6	—大学本科時代を回顧して 黒川淳子 …… 49
日本女子大学周辺のフィールドワーク	記念館見学記 …………… 60
…………… 伊藤寿和 …… 8	成瀬記念館 '99年度活動の記録 …………… 61
私の学生時代と「信州戦争展」	
…………… 平田広子 …… 10	
森戸辰男文庫のこと …… 上村美紗子 …… 12	
未発表資料 19	
成瀬仁蔵講話 終業式ニ於テ	
—明治三十八年三月二十五日 …………… 15	

No. 13 1997

□絵

シリーズ“創る”(1)

松江美枝子・ジュウリーの世界展

巻頭言

本学の百周年 …………… 宮本美沙子 …… 4

随想

「西生田成瀬講堂」によせて

…………… 北川定男 …… 6

回想 校歌のことなど …… 原田夏子 …… 8

成瀬先生とウェルズリー女子大学

…………… 影山礼子 …… 12

義父 塘 茂太郎の思い出

…………… 塘 茂子 …… 14

未発表資料 16

成瀬仁蔵講話 新年祝賀式

—明治四十二年一月一日 …… 20

私と日本女子大学

「家庭週報」を担った人達

—すぎし面影 …… 小笠原節子 …… 27

聞きがき

いのち・環境を守って 鳥取県連合婦人会

50年のあゆみとともに

…………… 近藤久子 …… 33

成瀬記念館'96年度活動の記録 …… 45

研究

上代タノと新渡戸稲造—上代タノ書簡を

中心に …… 島田法子 …… 75

No. 14 1998

□絵

平塚らいてうとその学友展

巻頭言

創立百周年の記念事業の一つ

「生涯学習総合センター」の実現に期待

…………… 宮本美沙子 …… 4

随想

父 田辺淳吉と成瀬記念講堂

…………… 岩田礼子 …… 6

新校舎のこと —豊明プロポーザル

方式 …… 功力 俊文 …… 9

日本女子大学と中国 …… 久保田文次 …… 12

高良とみの遺稿と成瀬記念館

…………… 高良留美子 …… 15

未発表資料 17

成瀬仁蔵講話 第三学期始業式ニ於テ

—明治四十二年一月八日 …… 19

資料探訪

展示「新制家政学部 成立の軌跡」に

よせて —大学昇格とGHQ資料

…………… 成瀬記念館 …… 26

私と日本女子大学

家政学部被服学科に所属して

…………… 大野静枝 …… 61

学生時代の思い出 …… 鈴木和子 …… 65

聞きがき

大学本科と私の半生 …… 藤澤英子 …… 70

成瀬記念館'97年度活動の記録 …… 81

No. 11 1995

□絵

日本女子大学・住居学科
 <絵画デッサン>教室の現在まで
 萩 太郎と亀本信子・山口 都展

巻頭言

成瀬仁蔵先生と生涯学習
 …………… 宮本美沙子 …… 4

随想

成瀬仁蔵先生と大橋廣先生
 …………… 湯浅 明 …… 7
 吉敷探訪 …………… 鈴木一夫 …… 9
 長田先生をお偲びして …… 鹿野澄子 …… 12

未発表資料 14

成瀬仁蔵講話 大学部全体ノ為ニ …… 15

資料紹介・翻訳

成瀬仁蔵著“A modern Paul inJapan”
 一沢山保羅牧師の生涯と
 その事業について(5) …………… 31

研究

宮沢トシ「真実ノ為ノ勇進」
 一日本女子大時代の求道性を中心に—
 …………… 山根知子 …… 44

私と日本女子大学

戦時下の一学生として …… 師岡愛子 …… 65

聞きがき

私の大学本科の頃 …… 中村佐喜子 …… 70
 記念館見学記 …………… 80
 成瀬記念館 '94 年度活動の記録 …………… 83
 女子教育研究所 '94 年度活動の記録 …… 94

No. 12 1996

□絵

柳 敬助・八重 夫妻展
 一共に歩んだ肖像画家と女性編集者—

巻頭言

成瀬記念館西生田記念室の
 開設にあたって …… 宮本美沙子 …… 4

随想

断想・宮澤賢治
 一福祉と『法華経』 …… 吉田久一 …… 6
 短歌・俳句と高校教育 …… 綾野道江 …… 10
 平和研究と日本女子大学 杉森長子 …… 12

未発表資料 15

成瀬仁蔵講話 尋問会ニ於テ …………… 15

中間報告

アンケート「太平洋戦争と日本女子学(校)
 学生生活」について・成瀬記念館 …… 24

資料紹介

成瀬仁蔵著“A modern Paul in Japan”
 成瀬仁蔵著『沢山保羅—現代日本の
 パウロー』の成立をめぐる
 …………… 新井 明 …… 42

私と日本女子大学

高等学部・
 大学本科に学んで …… 丹野はな …… 56

高等学部並びに

大学本科のこと …………… 上村悦子 …… 58
 記念館見学記 …………… 23・55
 成瀬記念館 '95 年度活動の記録 …………… 66

No. 9 1993

□絵

心の軌跡—浮田克躬肖像画展
寄贈品より 高村智恵子書簡

巻頭言

成瀬記念館の階段 …… 宮本美沙子 …… 4

随想

成瀬先生の生涯教育論 …… 辻 功 …… 6

「目白の雪の日」との3年 小森美巳 …… 8

成瀬先生の住まい …… 鈴木賢次 …… 11

未発表資料 13

成瀬仁蔵講話 第一学年ニ於テ …… 14

資料紹介・翻訳

成瀬仁蔵著“A modern Paul in Japan”

—沢山保羅牧師の生涯と

その事業について(3) …… 23

資料探訪

エリザベス P.ヒューズ —成瀬仁蔵を
助けた英国女子教育のパイオニア

…………… 白井堯子 …… 46

私と日本女子大学

大学本科の頃 …… 武藤静子 …… 58

聞きがき

母校と共に72年 その1 河村サダ …… 63

博物館実習を終えて—実習生の感想 …… 75

成瀬記念館'92年度活動の記録 …… 76

女子教育研究所'92年度活動の記録 …… 86

No. 10 1994

□絵

好本コレクション「布と面」展
寄贈品より 山川登美子葉書

巻頭言

成瀬記念館十周年にあたって
…………… 宮本美沙子 …… 4

随想

母 平井章のこと …… 平井卓郎 …… 6

日本女子大学の理科教育—一葉の

スナップ写真から …… 今島 実 …… 7

日本女子大学と体育 …… 馬場哲雄 …… 10

資料紹介・翻訳

成瀬仁蔵著“A modern Paul in Japan”

—沢山保羅牧師の生涯と

その事業について(4) …… 13

附・紹介『日本教会費自給論』…………… 35

聞きがき

母校と共に72年 その2・

附属中学校設立の頃 …… 河村サダ …… 45

記念館見学記 …… 53・68

成瀬記念館'93年度活動の記録 …… 56

女子教育研究所'93年度活動の記録 …… 66

資料探訪

成瀬仁蔵のアメ리카留学の

故地を訪ねて …… 影山礼子 …… 84

成瀬記念館開館十周年特集

開館十周年によせて …… 青木生子 …… 87

記念館と赤煉瓦 …… 森本正一 …… 93

限りない心の安らぎと糧 木下けい …… 96

成瀬記念館への

想いと願い …… 一番ヶ瀬康子 …… 100

成瀬記念館の役割に思う 中寫 邦 …… 103

「成瀬記念館」総目次

1～10(1985～1994) …… 125

執筆者索引 …… 121

人名件名索引 …… 117

成瀬記念館この10年 …… 115

No. 7 1991

□絵

近代短歌の系譜 ー日本女子大学に学んだ
歌人たち 展より

成瀬仁蔵書簡

巻頭言

不易流行 …………… 青木生子 …… 4

随想

成瀬仁蔵先生の構想と理学部
…………… 湯浅 明 …… 7

五味保義先生のこと、
「ゆりの木」のことなど …… 実藤恒子 …… 10

未発表資料 11

成瀬仁蔵講話
第三学年ニテノ御話 …………… 12

資料紹介・翻訳

成瀬仁蔵著“A Modern Paul in Japan”

ー澤山保羅牧師の生涯と

その事業について …………… 23

研究ノート

「家庭週報」の変遷 …………… 小川美保 …… 45

私と女子大学

三年八か月の大戦争 …… 広田寿子 …… 59

聞きがき

継続は力なりをモットーに

地域活動に生きる …… 大町久世 …… 64

成瀬記念館 西生田キャンパスで

“展示”を見て …………… 73

成瀬記念館 '90年度活動の記録 …………… 75

女子教育研究所 '90年度活動の記録 …… 84

No. 8 1992

□絵

曾祖母からの贈りものー
くらしを伝える雛人形たちと衣裳展より

第一回生卒業証書

巻頭言

はるかなる えにし …………… 青木生子 …… 4

随想

母のこと …………… 柳 文治郎 …… 7

はは 黒板さきと日本女子大学校
…………… 永井路子 …… 9

祖父麻生正蔵のこと …… 麻生 誠 …… 11

卒業生アンケートによせて 小川信子 14

未発表資料 12

成瀬仁蔵講話 桜楓会例会ニ於テ …… 16

資料紹介・翻訳

成瀬仁蔵著“A modern Paul in Japan”

ー沢山保羅牧師の生涯と

その事業について(2) …………… 23

研究

女子大学の現在 ー「女子大学は今」展

によせて …………… 中畷 邦 …… 48

私と日本女子大学

桜楓会「家庭週報」の思い出

…………… 小笠原節子 …… 61

聞きがき

薬学一筋の姉鈴木ひでる

…………… 鈴木 香代 …… 65

成瀬記念館・展示を見て …………… 77

成瀬記念館 '91年度活動の記録 …………… 81

女子教育研究所 '91年度活動の記録 …… 90

No. 5 1989

□絵

「きものから洋服へ」展より

食器

成瀬仁蔵書簡

油彩「男爵森村市左衛門」

巻頭言

成瀬記念館創設五周年を迎えて
…………… 青木生子 …… 6

随想

成瀬先生と聖書 …… 今村 晋 …… 8

祖父森村市左衛門の思い出
…………… 大島 澄 …… 9

通信教育創設の頃 …… 竹中はる子 …… 12

未発表資料 8

成瀬仁蔵講話 第三学年ニ於テ …… 14

未発表資料 9

仁科 節日記(その四) …… 22

研究

日本女子大学の服装史 … 佐々井 啓 …… 32

聞きがき

「人格第一、技術これにつぐ」
をモットーに美容界に生きて
…………… 早見一十一 …… 45

日本女子大学校の思い出 断章
…………… 伊藤なを …… 54

成瀬記念館絵画展によせて

萩 太郎先生に聞く
…………… 聞き手 小川信子 …… 56

成瀬記念館を訪れて …… 74

成瀬記念館 '88年度の記録 …… 76

女子教育研究所 '88年度の記録 …… 84

No. 6 1990

□絵

萩 太郎展より

成瀬仁蔵「安息日論」

巻頭言

静謐な空間 …… 青木生子 …… 4

随想

自発創生 …… 柴崎武夫 …… 6

西生田校地草創の頃 …… 木下けい …… 8

附属高女の思い出 …… 佐野 倅 …… 10

未発表資料 10

成瀬仁蔵講話

1 運動会ノ批評 …… 13

2 正会員ニ於テ …… 17

仁科 節日記(補遺)・

成瀬校長の病床に侍して …… 23

講話

先覚者としての成瀬先生の教育思想
…………… 唐沢富太郎 …… 28

成瀬記念館近代短歌展開催に当って

長澤美津氏に聞く
…………… 聞き手 清部千鶴子 …… 42

萩 太郎展によせて …… 58

聞きがき

母校への想いを子に孫に
…………… 豊田ちやう …… 62

今も心に残る名講義 …… 金丸 操 …… 65

成瀬記念館 '89年度活動の記録 …… 67

女子教育研究所 '89年度活動の記録 …… 76

成瀬先生の思い出	野村郁子	52
紹介		
日本女子大学校を描いた大橋了介		56
長田喜和“校内風景”展を見て		49
成瀬記念館を訪れて・豊明小学校児童		55

成瀬記念館 '85 年度活動の記録	60
女子教育研究所 '85 年度活動の記録	66
成瀬仁蔵研究文献目録補遺(その2)	71

No. 3 1987

□絵		
成瀬記念館展示より		
成瀬仁蔵書簡		
巻頭言		
母恋い	青木生子	2
随想		
成瀬記念館に思う	木下法也	4
母、千代(1回生)を語る	高月東一	6
軽井沢一昔・中仙道の宿場 今・		
世界のパラダイス	野見山不二	8
成瀬先生の体育観を具象化した人々		
	馬場哲雄	10
未発表資料 4		
成瀬仁蔵講話		
1 第三学年ニ於テノ御話		12

2 第一学年ニ於テ	18	
未発表資料 5		
仁科 節日記(その二)	24	
研究		
日本女子大学附属豊明小学校		
初代主任 河野清丸	友沢桂子	30
聞きがき		
更正・福祉事業に生きて	三田庸子	42
紹介		
佐伯祐三と大橋了介	浅野 徹	50
成瀬記念館を訪れて・大学部学生		54
成瀬記念館 '86 年度活動の記録		58
女子教育研究所 '86 年度活動の記録		66
河野清丸略歴・著作		68

No. 4 1988

□絵		
大橋了介展より		
顕微鏡によせて		
巻頭言		
タゴールのことなど	青木生子	2
随想		
社会学的世界の解説—「成瀬文庫」について		
	山本鎮雄	4
顕微鏡の思い出	館岡 孝	6
姉 弘津千代のこと	弘津友三郎	8
未発表資料 6		
成瀬仁蔵講話 第一学年ニ於テ		10

未発表資料 7		
仁科 節日記(その三)	20	
研究		
日本女子大学三泉寮の創設		
	中罵 邦	28
三綱領の書かれた日について—2月28日		
執筆に対する疑問	石川ムメ	41
聞きがき		
女子教育ひと筋に生きて		
	石村伎俱美	52
大橋了介によせて		60
成瀬記念館 '87 年度活動の記録		62
女子教育研究所 '87 年度活動の記録		70

「成瀬記念館」総目次／執筆者索引／人名件名索引
1～30 (1985～2015)

総目次

No. 1 1985

□絵	愛ト犠牲ノ関係 …………… 12
成瀬記念館開館特別展	2 夏季寮ノ計畫ニツキテ …………… 18
巻頭言	訪問インタビュー
発刊に寄せて ……………青木生子 …… 2	成瀬先生とのふれあいの中で …………… 今岡信一良 …… 28
随想	聞きがき
“成瀬蔵書より” …………… 石川松太郎 …… 4	日々“自発創生”に生きて 田村なか …… 34
祖母・母・子三代、女子大学に学んで …………… 出淵敬子 …… 6	成瀬記念館を訪れて(1)(2) …………… 27,41
豊明小学校、成瀬校長の思い出 …………… 田中博次 …… 9	成瀬記念館規則・案内 …………… 42
未発表資料 1	女子教育研究所 '84 年度活動の記録 …… 44
成瀬仁蔵講話	成瀬記念館 '84 年度活動の記録 …… 46
1 快樂ト克己, 興味ト困難,	成瀬仁蔵研究文献目録補遺(その1) …… 58

No. 2 1986

□絵	未発表資料 2
成瀬記念館展示より	成瀬仁蔵講話 終業式に於て …………… 10
巻頭言	未発表資料 3
成瀬仁蔵『今後の女子教育』— —学生と共に読む …… 青木生子 …… 2	仁科 節日記(その一) …………… 20
随想	研究
成瀬文庫のN・E・D …… 亀山健吉 …… 4	日本女子大学附属豊明幼稚園
豊明小学校創設八十周年を祝って …………… 友沢桂子 …… 6	初代主任 甲賀ふじ …… 前 典子 …… 26
豊明幼稚園創設八十周年を祝って …………… 細矢静子 …… 8	聞きがき
	平和のために生きる …… 高良とみ …… 42
	思い出
	成瀬先生と“真面目” …… 稲沼 史 …… 50

■成瀬記念館より

昨年度は、三つの大きな企画展示を開催することができました。その一つが「開館30周年記念 蔵出し 日本女子大学コレクション展」です。創立八〇周年記念事業として一九八四年一〇月に開館した成瀬記念館の貴重な宝物を展示しました（成瀬先生遺品の初公開）。また開館当時収蔵していた資料についても、『収蔵資料目録1 旧成瀬記念室資料』を刊行することができました。二つ目が「戦時下の青春展」です。この展示は、戦時期の大学部・附属高等学校に在籍していた方々に対し、一九五五年（戦後五〇年記念）に実施したアンケート調査がもとになっています。戦時下の学園生活や勤労動員生活などを描くだけでなく、戦争や平和についての意識なども分析の対象にしました。いずれその成果をまとめる予定です。三つ目が「シリーズ創る」（7）関口裕子染色作品展」です。色彩、文様、技法、どれをとってもその「伸びやかさ」（小笠原小枝本学名誉教授）があふれる展示となりました。また展示後、素晴

らしい作品「ムステイエ・サント・マリ」をご寄贈いただきました。本学の宝物がまた一つ増えたことをご報告いたします。

なお展示図録をご希望の方は、成瀬記念館までご連絡を頂ければ幸いです。（吉良『成瀬記念館』30号を記念してデザインを一新しました。表紙とカットを手掛けるのは、雑司が谷にアトリエを構える画家・装画家の武藤良子さんです。今年秋からのNHK連続テレビ小説は、本学創立発起人・評議員として草創期の学園を支えた広岡浅子がモデルの「あさが来た」に決定。一月から広岡浅子展を開催します。（岸本）創立者成瀬の住まいであった、成瀬記念館分館の移築が決まりました。移築後の公開については未定ですが、多くの方にご覧いただければと思っております。（杉崎）

昨年度は、戦後五〇年を契機に戦時下に在学していた卒業生を対象にした「戦争アンケート」の再分析を行い、「戦時下の青春展」を開催しました。新しい体験型展示として防空壕体験コーナーを設けるなど、新しいことに挑戦する機会を頂き、充実した一年を過ごすことが出来ました。（高橋）

成瀬記念館 2015 No. 30

二〇一五年七月二三日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

電話（〇三）五九八一—三三七六

FAX（〇三）五九八一—三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三一二六一—四



日本女子大学
成瀬記念館